秋田県文化財調査報告書第481集

阿 部 舘 遺 跡

―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―

２０１２・７

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992 年 8 月発見、高さ 7 ㎝、凝灰岩。

阿部舘遺跡（あべだて）

―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―

２０１２・７

秋田県教育委員会

1　阿部舘遺跡遠景（東→）

2　阿部舘遺跡遠景（西→）

1　阿部舘遺跡調査区全景（上が北）

1　ＳＤ17 大溝跡（南東→）

2　土坑墓群（西→）

1　ＳＥ33 井戸跡（西→）

2　ＳＥ33 井戸跡曲物

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、秋田県がめざす活発な地域交流と連携のための、根幹を成す開発事業であります。本教育委員会では、これらの開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に先立って、平成23年度に、にかほ市において実施した阿部舘遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。調査では、平安時代の大溝跡や土坑墓群が検出され、須恵器・土師器などの遺物も見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、にかほ市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成24年７月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　　言

1　本書は、一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に伴い、平成23(2011)年度に発掘調査した、秋田県にかほ市に所在する阿部舘遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査要項

遺　跡　名	阿部舘遺跡(あべだていせき)
遺跡略号	６ＡＢＤ
遺跡所在地	秋田県にかほ市両前寺字阿部舘28－１外
調査期間	平成23年５月19日～平成23年７月29日
調査面積	4,300㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	山田　徳道　(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事)
	水品　仁志　(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事)
総務担当者	菊地　尚久　(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　主査)
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所　にかほ市教育委員会

3　調査の内容については、すでにその一部が秋田県埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4　発掘調査から報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

グリッド杭打設：多摩調査測量株式会社

空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル

木製品・金属製品保存処理、樹種同定：株式会社吉田生物研究所

放射性炭素年代測定・樹種同定：パレオ・ラボ株式会社

遺物写真撮影：株式会社みどり光学社

5　本書の執筆は、第４章を除き山田徳道が行った。なお、第５章は榮　一郎が加筆した。編集は山田が行った。

6　第４章「理化学的分析」は、株式会社吉田生物研究所及びパレオ・ラボ株式会社に業務委託した成果報告である。

凡　　例

1　本書の７ページに使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図(平沢)を１/２縮小した。

2　本報告書に収載した遺跡図面等に付した方位は平面直角座標第Ｘ系座標北である。

3　遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位にはアラビア数字を使用した。

4　遺跡基本層位と遺構内層位の土色の表記は、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2005年版によった。

目　次

序
例言・凡例
目次(挿図･表･図版目次)
第１章　調査の経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過……1
　第３節　整理作業の経過……3
第２章　遺跡の位置と環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……8
第３章　調査の方法と成果……13
　第１節　調査の方法……13
　第２節　基本層序……13
　第３節　検出遺構と遺物……18
第４章　理化学的分析……70
　第１節　樹種同定(１)……70
　第２節　樹種同定(２)……71
　第３節　放射性炭素年代測定(１)……73
　第４節　放射性炭素年代測定(２)……76
第５章　総括……79
図版
報告書抄録……97

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……4
第２図　周辺地形図……5
第３図　遺跡周辺の地形区分図……6
第４図　鳥海山周辺地域の切峰面図……6
第５図　阿部舘遺跡と周辺遺跡位置図……7
第６図　遺構配置図……14
第７図　柱穴配置図(１)……15
第８図　柱穴配置図(２)……16
第９図　基本土層図……17
第10図　ＳＤ17大溝跡……35
第11図　ＳＤ17大溝跡断面図……36
第12図　ＳＢ19掘立柱建物跡……37
第13図　ＳＢ36掘立柱建物跡、
　　ＳＡ37・38柱穴列……38
第14図　ＳＥ33・35井戸跡……39
第15図　ＳＫ01・02・03・04・13土坑……40
第16図　ＳＫ05・08・09土坑……41
第17図　ＳＥ18井戸跡、
　　ＳＫ10・11・12・14・15土坑……42
第18図　ＳＫ16・20・21・22・27土坑、
　　ＳＫＰ28柱穴……43
第19図　ＳＫ29・30・31・34土坑、
　　ＳＳ23鍛冶関連遺構……44
第20図　ＳＡ24・25・26柵跡……45
第21図　遺構内土器(１)……46
第22図　遺構内土器(２)……47
第23図　遺構内土器(３)……48
第24図　遺構内土器(４)……49
第25図　遺構内土器(５)……50
第26図　遺構内土器(６)……51
第27図　遺構内土器(７)……52
第28図　遺構外土器(１)……53
第29図　遺構外土器(２)……54
第30図　遺構外土器(３)……55
第31図　遺構外土器(４)……56
第32図　土製品・鉄製品・鉄関連遺物・
　　天然アスファルト……57
第33図　ＳＥ33井戸跡隅柱・横桟(１)……58
第34図　ＳＥ33井戸跡隅柱・横桟(２)……59
第35図　ＳＥ33井戸跡曲物・箸・横桟……60
第36図　ＳＥ33井戸跡縦板(１)……61
第37図　ＳＥ33井戸跡縦板(２)……62
第38図　ＳＥ33井戸跡縦板(３)……63
第39図　ＳＥ33井戸跡縦板(４)……64
第40図　暦年較正結果(１)……78
第41図　暦年較正結果(２)……78

表　目　次

第１表　阿部舘遺跡周辺の遺跡一覧（１）……11
第２表　阿部舘遺跡周辺の遺跡一覧（２）……12
第３表　柱穴一覧表（１）……31
第４表　柱穴一覧表（２）……32
第５表　柱穴一覧表（３）……33
第６表　柱穴一覧表（４）……34
第７表　土器観察表（１）……65
第８表　土器観察表（２）……66
第９表　土器観察表（３）……67
第10表　土器観察表（４）……68
第11表　土製品一覧表……68
第12表　鉄製品・鉄関連遺物・
　　天然アスファルト一覧表……68
第13表　ＳＥ33井戸跡出土木製品・
　　遺材一覧表……69
第14表　ＳＥ33井戸跡出土木製品同定表……70
第15表　樹種同定結果……71
第16表　測定試料及び処理（１）……73
第17表　放射性炭素年代測定及び
　　暦年較正結果（１）……74
第18表　測定試料及び処理（２）……76
第19表　放射性炭素年代測定及び
　　暦年較正結果（２）……77

図　版　目　次

巻頭図版１　１　阿部舘遺跡遠景（東→）
　　２　阿部舘遺跡遠景（西→）
巻頭図版２　１　阿部舘遺跡調査区全景（上が北）
巻頭図版３　１　ＳＤ17大溝跡（南東→）
　　２　土坑墓群（西→）
巻頭図版４　１　ＳＥ33井戸跡（西→）
　　２　ＳＥ33井戸跡曲物
図版１　１　ＳＤ17大溝跡現況（南東→）
　　２　ＳＤ17大溝跡断面（南→）
　　３　ＳＤ17大溝跡断面（南→）
　　４　ＳＤ17大溝跡遺物出土状況
　　（南西→）
　　５　ＳＤ17大溝跡出土土師器坏
　　（南西→）
　　６　ＳＤ17大溝跡出土土師器高台付坏
　　（北西→）
　　７　ＳＡ24・25・26柵跡完掘
　　（南東→）
　　８　ＳＡ25柵跡出土須恵器甕（西→）
図版２　１　ＳＢ19掘立柱建物跡完掘
　　（西→）
　　２　ＳＢ36掘立柱建物跡完掘
　　（南東→）
　　３　ＳＥ33井戸跡井戸側（西→）
　　４　ＳＥ33井戸跡井戸側内面
　　（南西→）
　　５　ＳＥ33井戸跡曲物周囲の川原石
　　（西→）
　　６　ＳＥ33井戸跡下部の曲物・礫
　　（西→）
　　７　ＳＥ18井戸跡完掘（東→）
　　８　ＳＥ35井戸跡完掘（南東→）
図版３　１　ＳＫ01土坑完掘（南東→）
　　２　ＳＫ01土坑出土鉄鏃（南→）
　　３　ＳＫ02土坑完掘（南西→）
　　４　ＳＫ03土坑断面（南東→）
　　５　ＳＫ04土坑完掘（南東→）
　　６　ＳＫ05土坑完掘（南西→）
　　７　ＳＫ08土坑断面（西→）
　　８　ＳＫ09・10・11・12土坑完掘
　　（南東→）
図版４　１　ＳＫ01・13・04土坑完掘
　　（南東→）
　　２　ＳＫ14・15土坑完掘
　　（南東→）
　　３　ＳＫ16土坑断面（南西→）
　　４　ＳＫ20土坑断面（南西→）
　　５　ＳＫ22土坑断面（北→）
　　６　ＳＫ29土坑完掘（南西→）
　　７　ＳＫ31土坑完掘（南→）
　　８　ＳＫＰ28柱穴出土土師器甕
　　（南東→）
図版５　出土土器（１）
図版６　出土土器（２）
図版７　出土土器（３）
図版８　出土土器（４）
図版９　出土土器（５）
図版10　土製品・鉄製品・鉄関連遺物・
　　天然アスファルト
図版11　ＳＥ33井戸跡隅柱
図版12　ＳＥ33井戸跡横桟
図版13　ＳＥ33井戸跡縦板（１）
図版14　ＳＥ33井戸跡縦板（２）
図版15　ＳＥ33井戸跡縦板（３）
図版16　阿部舘遺跡出土木材の光学顕微鏡・
　　走査型電子顕微鏡写真

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴う国道建設事業である。日本海沿岸東北自動車道は、新潟市を起点とし、山形県の庄内地方沿岸部を通過し、小坂ＪＣＴで東北縦貫自動車道と接続し、青森市に至る総延長約322㎞の高規格幹線道路である。この道路は、日本海沿岸の高速交通体系を改善し、沿岸諸地域の生産活動や情報・物資の交流の促進を目的として計画された。

一般国道７号仁賀保本荘道路は、平成３年12月に基本計画決定された仁賀保インターチェンジ(I.C)～本荘I.C間12.5㎞の自動車専用道である。計画工事区内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、国道建設工事に先立ち、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所から秋田県教育委員会に、埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室が平成22年３月４日に計画工事区内の分布調査を実施した。その結果、計画工事区内に新発見の遺跡である阿部舘遺跡が確認された(註１)。

この調査をふまえ、秋田県埋蔵文化財センターが平成22年10月25日から11月８日まで阿部舘遺跡確認調査を実施し、工事区内の要発掘調査面積を認定した(註２)。これを受けて秋田県教育委員会と国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所とで協議した結果、工事区域内のうちの1,300㎡について記録保存の措置をとることで合意した。

以上の経緯から、秋田県埋蔵文化財センターが、当初平成23年５月19日から６月30日までの予定で阿部舘遺跡発掘調査を実施することとなった。調査開始後、要発掘調査範囲が広がることが判明し、最終的に4,300㎡を対象に調査期間を７月29日まで延長して発掘調査を実施した。

第２節　発掘調査の経過

平成23年５月19日から７月29日まで実施した発掘調査の経過は次のとおりである。

【第１週】５月19日～５月20日

19日作業員20人体制で発掘調査を開始する。高橋所長、榮中央調査班長来跡。20日調査区東西方向の中央ラインを基本土層として精査を行う。国土交通省東北整備局秋田河川国道事務所(以下、秋田河川国道事務所)矢口監督官、三浦社会保険労務士来跡。

【第２週】５月23日～５月27日

調査区西側の遺構検出作業及び基本土層図の精査を行う。25日ＳＫ01土坑から鉄製品が出土する。26日ＳＫ02・04土坑を精査終了する。27日ＳＫ01土坑を精査終了する。齋藤副所長、利部調査班長、榮中央調査班長来跡。

【第３週】５月30日～６月３日

調査区西側及び東側の遺構検出作業を行う。31日発掘調査対象地前土地所有者の高橋氏が来跡し、

発掘調査前の耕作範囲と耕作時の状況を知る。１日ＳＫ07土坑を精査終了する。齋藤副所長、榮中央調査班長来跡。２日ＳＫ03土坑を精査終了する。

【第４週】６月６日～６月10日

調査区西側及び東側の遺構検出作業を行う。６日ＳＤ17大溝跡を検出する。ＳＫ08・16土坑を精査終了する。秋田河川国道事務所矢口監督官来跡。７日ＳＫ13土坑を精査終了する。８日ＳＫ09・10土坑を精査終了する。９日ＳＫ11・12・15土坑を精査終了する。10日ＳＫ15土坑を精査終了する。文化財保護室宇田川文化財主査来跡。

【第５週】６月13日～６月17日

調査区中央及び東側の遺構検出作業を行う。ＳＤ17大溝跡から須恵器の蓋・坏・甕・壺、土師器の坏・甕が集中的に出土する。当該大溝跡は調査区外に延びることが予想される。13日ＳＢ19掘立柱建物跡を精査終了する。14日榮中央調査班長来跡。15日ＳＫ20・21・22土坑を精査終了する。16日文化財保護室高橋主幹､宇田川文化財主査､榮中央調査班長来跡。17日調査区北側の表土除去を重機で行い、ＳＤ17大溝跡の延長部分を精査する。ＳＳ23鍛冶関連遺構を精査終了する。

【第６週】６月20日～６月24日

調査区北側の遺構検出作業及びＳＤ17大溝跡の精査を行う。21日秋田河川国道事務所矢口監督官、文化財保護室宇田川文化財主査、齋藤副所長、榮中央調査班長、五十嵐学芸主事来跡。大溝跡が調査区の北隣と東隣に延びることが確実となり、秋田河川国道事務所と文化財保護室との協議の結果、調査範囲を拡張し、調査期間も延長する方向で調整することとなる。22日県文化財保護協会小川氏来跡。

【第７週】６月27日～７月１日

調査範囲を北側から東側にかけて拡張して調査面積を4,300㎡とし、調査期間を実働20日間延長して７月29日までとすることに決定する。ＳＤ17大溝跡及び検出遺構の精査を行う。28日ＳＫ27土坑、ＳＫＰ28柱穴を精査終了する。29日ローリングタワーを設置し、調査区近景の写真撮影を行う。30日ＳＡ24・25・26柵跡を精査終了する。

【第８週】７月４日～７月８日

調査区北側の建物基礎及び駐車場の表土除去を行い、ＳＤ17大溝跡の北側延長部分を精査する。４日高橋所長、利部調査班長、榮中央調査班長来跡。５日駐車場のアスファルトと建物基礎の撤去及び搬出を行う。６日総務班鹿角班長、久米副主幹来跡。７日ＳＫ29・31土坑を精査終了する。利部調査班長、にかほ市観光協会高木氏来跡。８日ＳＫ30土坑を精査終了する。

【第９週】７月11日～７月15日

調査区北側の建物基礎と駐車場及び調査区東側のＳＤ17大溝跡延長部分の遺構検出作業を行う。11日榮中央調査班長来跡。13日ＳＥ33井戸跡を検出する。14日ＳＥ33井戸跡から井戸部材を検出する。15日にかほ市立平沢小学校６年生80名が遺跡見学を行う。齋藤副所長、利部調査班長、榮中央調査班長来跡。元秋田城跡調査事務所長小松正夫氏来跡し、調査指導を受ける。

【第10週】７月19日～７月22日

調査区東側の遺構検出作業及び遺構精査を行う。19日ＳＫ34土坑を精査終了する。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター巴氏来跡。20日ＳＥ35井戸跡を精査終了する。ＳＢ36掘立柱建物跡を検出する。22日山田学芸主事が早朝に機材庫東側の窓ガラス破損被害を発見し、榮中央調査班長の指示に

よりにかほ警察署に通報する。齋藤副所長がにかほ警察署対応のため来跡する。山田学芸主事が実況検分に立ち会った後、齋藤副所長の指示により被害届を提出する。見学会コースの養生及び遺跡内清掃を行う。

【第11週】７月24日～７月29日

全ての遺構精査を完了する。24日阿部舘遺跡見学会を実施する。見学者は93名。高橋所長、文化財保護室宇田川文化財主査、利部調査班長、小林資料管理活用班長、榮中央調査班長来跡。25日ＳＢ36掘立柱建物跡を精査完了する。26日現場引き渡しに係る現地協議を秋田河川国道事務所佐々木監督官、須藤専門職、文化財保護室宇田川文化財主査、榮中央調査班長、山田学芸主事で行う。空中写真撮影現地確認のため、シン技術コンサルの小山内氏来跡。27日空中写真撮影を行う。ＳＥ33井戸跡の周囲を重機で掘り下げ、遺構精査の安全を確保する。28日ＳＤ17大溝跡、ＳＥ33井戸跡の精査を終了する。

第３節　整理作業の経過

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図の整合性をはかった図を第二原図として作成し、これをデジタルトレースして挿図を作成した。第二原図の作成は平成23年10月～12月にかけて行い、デジタルトレースは平成24年１～３月に行った。

遺物の整理は、平成23年10月～平成24年５月にかけて秋田県埋蔵文化財センター中央調査班で行った。洗浄・注記・接合・復元作業の間、報告書に記載する遺物の選別・分類を行い、実測図・拓影図を作成した後に写真撮影を行った。遺物の注記は、遺跡略記号（６ＡＢＤ）・出土位置・遺物番号・出土層位・出土年月日を記入した。遺物の実測図・拓影図の作成は平成23年12月～平成24年２月にかけて行い、これをデジタルトレースして挿図を平成24年２～５月に作成した。

註１　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第465集　2011（平成23）年

註２　註１文献。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

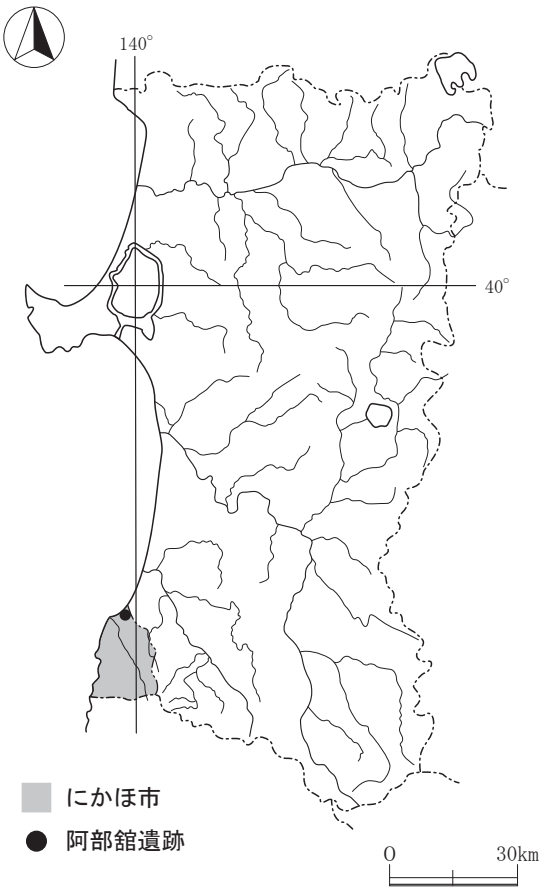
阿部舘遺跡のあるにかほ市は、平成17(2005)年10月１日に仁賀保町、金浦町、象潟町の３町が合併して誕生した。秋田県の南西部に位置し、南側に鳥海山、西側に日本海を臨む、山と海に抱かれた風光明媚なまちである。遺跡は東経139度58分38秒、北緯39度17分41秒に位置しており、ＪＲ羽越本線仁賀保駅より北東へ約1.2㎞、海岸部からは約0.8㎞離れている。

にかほ市の西側は日本海に面した平野部であり、東側は標高200ｍ～ 500ｍの仁賀保高原のなだらかな台地となっており、遺跡はこの高原北西端の裾部にあたる。遺跡のすぐ西側には仁賀保高原の裾部に沿って国道７号線が通っており、平野部が広がっている。遺跡に隣接する平野部は主に水田として利用されている。遺跡の北側には阿部堂川、南側には両前寺川が西流して日本海に注いでいる。

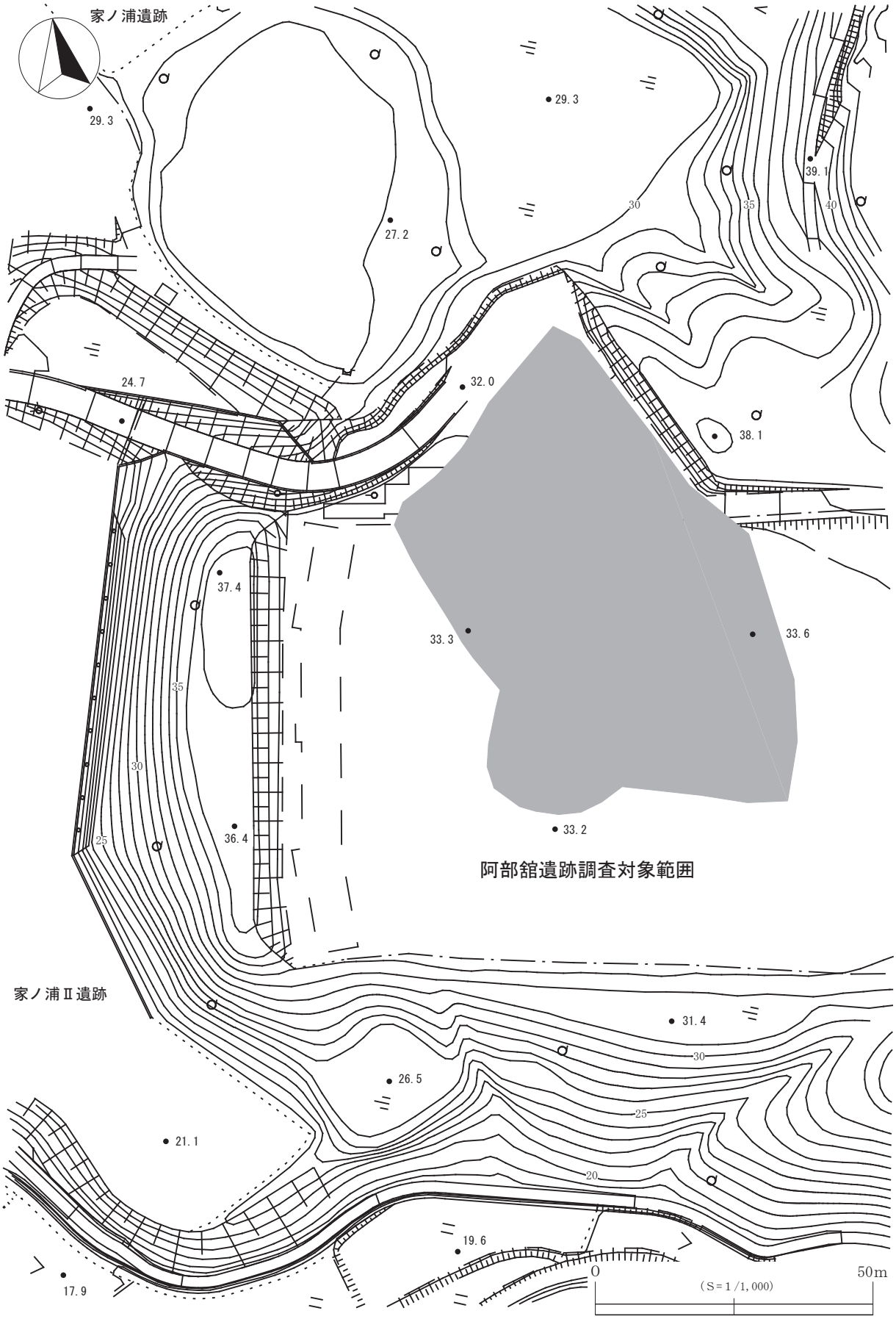
遺跡周辺の地形を西から概観すると低地、台地、山地・丘陵地に分けられる。標高2,230ｍの鳥海山は、約50万年前に開始された火山活動によって形成された成層火山である。周辺地形は鳥海山の火山活動に起因する地形を主としている。第４図にあるように、鳥海山を中心に同心円状に高度分布が広がり、高度は西方～北西方向に規則的に低下している。また、鳥海山の山麓部には「山体崩壊」や「岩屑なだれ」で形成された標高18 ～ 20ｍの小高い丘が随所に見られ、火山地形を呈している。

遺跡のある丘陵は非火山性の仁賀保丘陵地であり、南北に延びている。一般に仁賀保高原と呼ばれているものの一部である。遺跡の南側には火山性台地である象潟泥流台地が広がり、遺跡のすぐ西側には象潟泥流台地発生後の沖積作用によって形成されている仁賀保沖積低地、その先には仁賀保新期砂丘地が海岸線を細長く縁取って分布している。

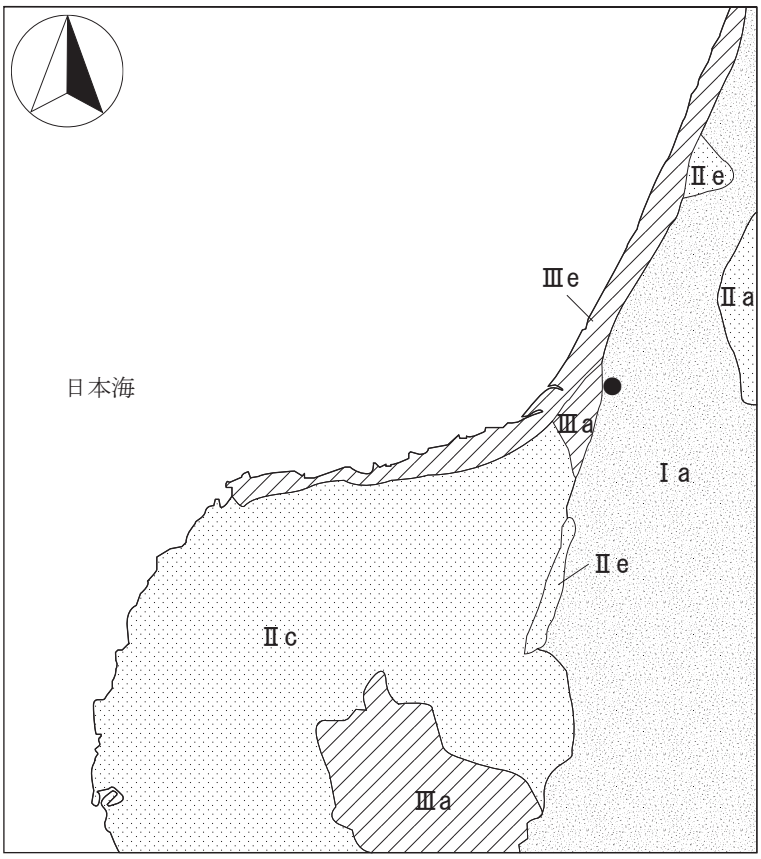
阿部舘遺跡はＪＲ羽越本線仁賀保駅より北東へ約1.2㎞、日本海を望む仁賀保丘陵西斜面中腹にある標高33ｍ前後の平坦面上に立地する。遺跡周辺の地形は、畑地や水田あるいはゴルフ練習場造成などによってある程度改変されているが、古代における旧



第１図　遺跡位置図


家ノ浦遺跡
29.3
29.3
39.1
27.2
30
35
40
24.7
32.0
38.1
37.4
33.3
33.6
35
30
25
36.4
33.2
阿部舘遺跡調査対象範囲
家ノ浦Ⅱ遺跡
31.4
30
26.5
25
21.1
20
19.6
17.9
0
50m
（S＝1／1,000）

第２図　周辺地形図



Ⅰ　山地・丘陵
非火山性丘陵
Ⅰa　仁賀保丘陵地

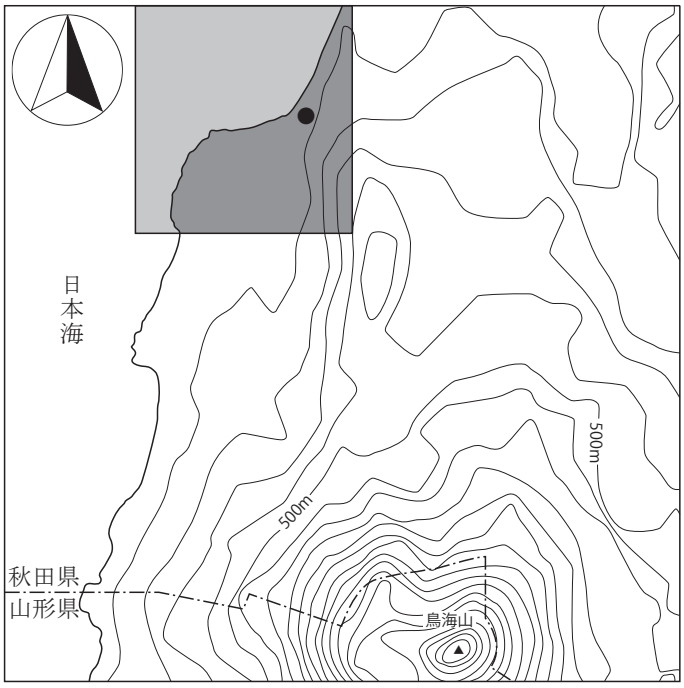
Ⅱ　台地
Ⅱa　鳥海火山噴出物台地
Ⅱc　象潟泥流台地
Ⅱe　仁賀保古期砂丘地

Ⅲ　低地
Ⅲa　仁賀保沖積低地
Ⅲe　仁賀保新期砂丘地

● 阿部舘遺跡

引用文献
秋田県『土地分類基本調査　象潟・吹浦』
2003 年(平成 15)年

第３図　遺跡周辺の地形区分図



※幅２km 未満の谷を埋積して作成
※等高線間隔は 100m

● 阿部舘遺跡

第３図 地形区分図範囲

引用文献
秋田県『土地分類基本調査　象潟・吹浦』
2003 年(平成 15)年

0　10km

第４図　鳥海山周辺地域の切峰面図

第５図　阿部舘遺跡と周辺遺跡位置図

地形は平坦面の西端側に数ｍ高い砂丘の高まりがあり、その東側が山側から海側に向かってわずかに傾斜する平坦面であったと考えられる。遺跡西側の低地部には隣接して家ノ浦Ⅱ遺跡があり、国道を挟んで立沢遺跡と前田表Ⅱ遺跡、同じ丘陵上の北側に家ノ浦遺跡と前田表遺跡、両前寺川を挟んで南西向かいには横枕遺跡、清水尻Ⅰ遺跡、清水尻Ⅱ遺跡など、古代の遺跡群が密集している。また、遺跡の西側に隣接して中世城館の安倍館跡がある。

発掘調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、鍛冶関連遺構、大溝跡、柵跡、中世の井戸跡などを検出した。出土した遺物は、平安時代の須恵器、土師器、鉄製品、中世の木製品などである。

遺跡の初現時期に属すると考えられる遺構は、最大幅5.15m、深さ1.64m、長さ78.4mの大規模な大溝跡である。大溝は平坦面の中央部を弧状に巡っており、その内側を区画したものと考えられる。本溝跡は、出土遺物から９世紀半ば過ぎに埋没したものと推定される。この大溝によって区画され、同時期と推定される遺構には、井戸跡、柵跡、柱穴群などがある。

大溝埋没後には、長さ２ｍ前後の隅丸長方形～楕円形平面の土坑が15基つくられる。これらの土坑は一度に埋め戻されており、中には副葬品の可能性がある鉄製品が出土した遺構もあることなどから、古代の土坑墓であったものと推定される。土坑墓群は長軸方向が南南東方向のものと西南西方向のものに大きく分かれる特徴的な配置を示しており、被葬者の性格の違いによって墓穴の向きを区別した可能性が推測される。調査区東端で検出した井戸跡は、14世紀前後に属すると推定される。４本の隅柱に横桟をほぞで組み、その外側に縦板を立て並べて構築され、底部には水溜とする径42㎝、高さ32㎝の曲物を据えている。

今回の調査で確認した遺構のうち、９世紀半ば過ぎを下限時期とする大溝跡については、現在のところ、県内にはこれだけの規模を有する同時期の類例は認められない。また、一定範囲に集中する古代の土坑墓群や井戸部材が良好な状態で残存する類例も稀である。阿部舘遺跡の西約0.3㎞には10世紀前半頃の製塩土器や墨書土器、円面硯が出土した立沢遺跡があり、役所と関係を持つ遺跡であると考えられている。また、本遺跡のすぐ北西側には掘立柱建物跡を検出した家ノ浦遺跡があり、平安時代から中世の集落跡であることが判明している。本遺跡は、大溝の具体的な目的は明瞭ではなく、９世紀半ば頃の遺跡成立時期の詳細な性格は必ずしも判然としない。大溝跡埋没後には平安時代の土坑墓群で構成される墓域が形成されると見られ、少なくとも立沢遺跡をはじめとするこの地域の古代遺跡群の一つとして位置づけられるものである。さらに14世紀前後の井戸跡が存在することから、当該時期には新たに集落が出現した可能性もあろう。(註１)

第２節　歴史的環境

にかほ市北西部の遺跡群の位置を『秋田県遺跡地図(由利地区版)』(2001年発行)に基づいて作成した第５図には、64の遺跡を数えることができる。ここでは、発掘調査が行われたにかほ市の遺跡を中心に、本遺跡を取り巻く歴史的環境を概観する。(註２)

この地域の縄文時代の遺跡は、紀元前466年の鳥海山の山崩れに伴う岩屑なだれに覆われてしまった可能性があり、確認されている遺跡が少ない。第５図にある縄文時代の遺跡は下岩ノ沢遺跡(60)、

高田遺跡(29)、黒潟遺跡(40)などがある。下岩ノ沢遺跡は縄文時代の陥し穴１基を検出し、縄文時代中期に帰属する土器片が出土した(註３)。高田遺跡からは縄文時代晩期の土器が出土した。

本遺跡の周囲には立沢遺跡(９)、家ノ浦遺跡(４)、家ノ浦Ⅱ遺跡(６)、前田表遺跡(７)、前田表Ⅱ遺跡(２)、横枕遺跡(14)、清水尻Ⅰ遺跡(19)、清水尻Ⅱ遺跡(20)、上谷地Ⅱ遺跡(31)など古代の遺跡群が密集している。本遺跡の南西側に位置する立沢遺跡は10世紀代の掘立柱建物跡からなる集落跡で、土師器、須恵器、緑釉陶器、円面硯、製塩土器、青磁皿などが出土しており官衙関連遺跡と考えられている(註４)。土師器には仏具である鉄鉢を模した製品、青磁には中国越州窯系の製品があり、両者とも秋田城跡や払田柵跡などの城柵官衙遺跡以外で殆ど出土例のないことが注目される。本遺跡の西側に隣接する家ノ浦Ⅱ遺跡は９世紀後半から10世紀中頃にかけての掘立柱建物跡、敷石遺構を伴う溝跡、鍛冶炉などが検出され、鍛冶関連の工房、祭祀の場、水場という３つの性格をもつ遺跡である(註５)。出土遺物には緑釉陶器や墨書土器などがあり、国道７号を挟んで南西側に位置する立沢遺跡と似たような傾向を示す。本遺跡北西側に位置する家ノ浦遺跡は主として掘立柱建物跡で構成される集落遺跡で、灰釉陶器台付皿、風字硯、「中將」と墨書された木簡、石帯の丸鞆が出土した(註６)。本遺跡南側には横枕遺跡、清水尻Ⅰ遺跡、清水尻Ⅱ遺跡がある。横枕遺跡は９世紀後半から10世紀代の竪穴建物跡や鍛冶工房跡で構成される遺跡である(註７)。清水尻Ⅰ遺跡は９世紀後半代を中心とする畑跡を検出し、県内では最古の遺構となる(註８)。清水尻Ⅱ遺跡は９世紀代初現の道路跡が検出された集落跡で、本道路跡は律令制下における地方の古代官道の可能性がある(註９)。

古代において鳥海山は大物忌神として畏敬の対象であった。大物忌神の初見は『続日本後紀』承和五(838)年である。この年の５月に従五位上から正五位下に位階を与えられたことを皮切りに徐々にその位階は上がり、元慶四(880)年には従二位が与えられている。『三代実録』の記録では貞観十三(871)年４月に噴火し、その悲惨な情景が記されている。このような噴火に対する人々の恐れとともに、この時期に起こった元慶の乱や天慶の乱にみられる蝦夷との関係による不安が、大物忌神に対する畏敬の念と救いを求める願いとして人々の間にあったものと思われる。「鳥海山」の名が歴史上に登場するのは室町時代に入ってからである(註10)。

中世の城館遺跡は、山根館(45)・安倍館(５)・平沢館(22)・鴻ノ巣館(28)・美濃輪館(32)・黒川館(39)・待居館(57)・丸山館(59)等がある(註11)。安倍館跡は本遺跡の北東側に隣接する。築城者やその年代は不明であるが、三つの郭からなり、その第一の郭(小館)は標高115ｍにあり、郭の大きさは約300㎡で帯郭を有する。第二の郭は520㎡のやや方形、西側は急斜面で眺望広く、日本海を臨む。館全体の西南側は急斜面、東側は山地を背負い、複雑な地形である。本遺跡の北側に隣接する香取神社には阿部堂遺跡(３)があり、中国(唐・宋・明)の古銭が約360枚出土した。また、北西側に隣接する家ノ浦遺跡からは古銭が約1,201枚出土した。県指定史跡である山根館は仁賀保氏が135年間居城したことが分かっている山城で、仁賀保氏が関ヶ原での戦功により常陸武田に転封となったことにともない慶長七(1602)年に廃城となっている。帯郭、空堀、空堀に沿った古道、また大手道などが確認されている他、礎石約200個が検出され、それにより１間６尺６寸の寸法で、４棟ほどの建物があったとされている。由利地方の城館の特色として誰が居城していたかが明確であり、石を防御施設に利用していることなどがあげられる。鴻ノ巣館は台地突端に帯郭と空堀をもつ。

中世の由利諸氏の動きについて概観すると、鎌倉初期の奥羽合戦後、由利郡では他地域のように関

東武士団が地頭に任命されたりはせず、平安時代以来の在地領主であった由利氏がそのまま安堵された。しかし由利氏も北条氏に地頭職を奪われ大弐局の支配下となる。室町時代になると大井(矢島)氏・仁賀保氏・赤宇津(赤尾津)氏・岩屋(岩谷)氏・下村氏・玉米氏・打越(内越)氏・滝沢氏・羽川氏などの俗に言う由利十二頭がそれぞれ領地を支配したが、戦国時代に入ると安藤氏や最上氏・小野寺氏などの戦国大名の影響を受け相争うようになる。しかしこの由利諸氏の抗争も天正十八(1590)年には終焉を迎え、豊臣秀吉が仁賀保氏・赤尾津氏・滝沢氏・内越氏・岩谷氏を由利五人衆に定めた。

慶長七(1602)年の仁賀保氏の転封後、由利５万５千石は最上義光領となり、仁賀保では新田開発が進められた。しかしその最上氏も元和八(1622)年に改易になり一年足らず本多正純領となるが、これも翌年改易となり、元和九(1623)年に六郷氏、岩城氏、仁賀保氏、打越氏が入ることとなった。旧領仁賀保領には大坂にいた仁賀保挙誠が、平沢以南、庄内藩境に至る１万石を賜り戻ってきた。しかし翌年に挙誠が亡くなり、寛永三(1626)年にその遺言に従い長男良俊が７千石を、次男誠政が２千石、三男誠次が千石を相続し、長男良俊が象潟の塩越に本拠地を置き仁賀保藩主となったが、寛永八(1631)年に嗣子なく亡くなったため仁賀保７千石が断絶し、一時庄内藩酒井氏の預かりとなる。残った仁賀保地域を平沢に陣屋(18)をおいた仁賀保氏が治め幕末に至っている。結局旧領の仁賀保領１万石は仁賀保氏領、生駒藩領、本荘領に分割されたため、仁賀保地域には１つの村を複数の領主が分割して治める「相給村」が３村もでき、仁賀保地域の領主の移り変わりの複雑さを物語っている。

註１　本節では、次の文献を参照した。
　　秋田県『土地分類基本調査　象潟・吹浦』　2003(平成15)年
註２　本節では、次の文献を参照した。
　　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(由利地区版)』　2001(平成13)年
　　伊藤清郎・山口博之編『中世出羽の領主と城館』奥羽史研究叢書２　2002(平成14)年
　　仁賀保町教育委員会『仁賀保町史　普及版』　2005(平成17)年
註３　仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』　1986(昭和61)年
註４　仁賀保町教育委員会『立沢遺跡発掘調査報告』　1987(昭和62)年
註５　秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報』30　平成23年度　2012(平成24)年
註６　秋田県教育委員会『家ノ浦遺跡―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―』秋田県文化財調査報告書第473集　2012(平成24)年
註７　秋田県教育委員会『横枕遺跡―一般国道７号象潟仁賀保道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―』秋田県文化財調査報告書第480集　2012(平成24)年
註８　註５文献。
註９　註５文献。
註10　須藤儀門『鳥海考』　1988(昭和63)年
註11　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

第１表　阿部舘遺跡周辺の遺跡一覧（１）

番号	地図番号	遺跡名	遺跡所在地	種別	時代
1	214－35－68	阿部舘	にかほ市両前寺字阿部舘	集落跡	古代
2	214－35－57	前田表Ⅱ	にかほ市両前寺字前田表	集落跡	古代・中世
3	214－35－15	阿部堂	にかほ市両前寺字阿部堂	遺物包含地	中世
4	214－35－61	家ノ浦	にかほ市両前寺字家ノ浦	集落跡	古代・中世
5	214－35－30	安倍館	にかほ市両前寺字安倍館	館跡	中世
6	214－35－65	家ノ浦Ⅱ	にかほ市両前寺字家ノ浦	集落跡	古代
7	214－35－36	前田表	にかほ市両前寺字前田表	集落跡	古代
8	214－35－14	平沢・琴浦境の立石	にかほ市平沢字新町	境界石	
9	214－35－34	立沢	にかほ市平沢字立沢	集落跡	古代
10	214－35－16	旧熊野神社	にかほ市平沢字出ヶ沢	寺院跡	古代
11	214－35－６	吉兵井戸	にかほ市平沢字前谷地の沖	井戸跡	
12	214－35－10	丁刃森方角石	にかほ市平沢字画書面	方角石	
13	214－35－11	建武碑Ⅰ	にかほ市平沢字画書面	板碑	
14	214－35－62	横枕	にかほ市平沢字横枕	集落跡	古代
15	214－35－49	須郷谷地	にかほ市両前寺字須郷谷地	遺物包含地	
16	214－35－48	出ヶ沢	にかほ市平沢字出ヶ沢	遺物包含地	古代
17	214－35－12	建武碑Ⅱ	にかほ市平沢字上町	板碑	
18	214－35－13	仁賀保家陣屋	にかほ市平沢字清水	陣屋跡	近世
19	214－35－66	清水尻Ⅰ	にかほ市平沢字清水尻	集落跡	古代
20	214－35－67	清水尻Ⅱ	にかほ市平沢字清水尻	集落跡	古代
21	214－35－５	淀切不動	にかほ市平沢字前谷地	磨崖仏	
22	214－35－53	平沢館	にかほ市平沢字坂ノ下	館跡	中世
23	214－35－４	恵比寿森方角石	にかほ市三森字浜田	方角石	
24	214－35－３	山王森方角石	にかほ市三森字浜田	方角石	
25	214－35－２	高磯森砲台	にかほ市芹田字高磯	砲台跡	
26	214－35－17	旧雄野寺	にかほ市平沢字前垣	寺院跡	
27	214－35－７	千石家陣屋	にかほ市平沢字前谷地	陣屋跡	
28	214－35－39	鴻ノ巣館	にかほ市平沢字田子坂	館跡	中世
29	214－35－52	高田	にかほ市三森字高田	遺物包含地	縄文時代
30	214－35－59	上谷地Ⅰ	にかほ市平沢字上谷地	遺物包含地	古代
31	214－35－60	上谷地Ⅱ	にかほ市平沢字上谷地	集落跡	古代
32	214－35－37	美濃輪館	にかほ市三森字美濃輪	館跡	中世

第２表　阿部舘遺跡周辺の遺跡一覧（２）

番号	地図番号	遺跡名	遺跡所在地	種別	時代
33	214－35－58	新脇田	にかほ市院内字新脇田	遺物包含地	古代
34	214－35－８	法界寺	にかほ市三森字高寺	寺院跡	古代
35	214－35－９	高寺	にかほ市三森字高寺	遺物包含地	古代
36	214－35－１	飛・芹田境界石	にかほ市芹田字門脇	境界石	
37	214－35－64	六日市	にかほ市黒川字六日市	集落跡	古代
38	214－36－３	普断寺	にかほ市黒川字護麻炊石	寺院跡	
39	214－36－５	黒川館	にかほ市黒川字館ノ内	館跡	中世
40	214－35－47	黒潟	にかほ市院内字黒潟	遺物包含地	縄文時代・古代
41	214－35－18	七高神社	にかほ市院内字堂の庭	寺院跡	
42	214－36－６	釜木森	にかほ市飛字釜木森	集落跡	
43	214－36－４	八幡	にかほ市黒川字八幡	遺物包含地	古代
44	214－35－50	南野	にかほ市小国字南野	遺物包含地	古代・中世
45	214－35－②	山根館	にかほ市小国字古館	館跡	中世
46	214－35－40	研石	にかほ市院内字研石	遺物包含地	古代
47	214－36－７	境石	にかほ市飛	境界石	
48	214－36－12	掃除丁場(南)(北)	にかほ市金浦字上林	境界石	
49	214－35－41	十文字	にかほ市院内字十文字	遺物包含地	
50	214－35－33	細久保	にかほ市馬場字細久保	遺物包含地	古代
51	214－36－10	金浦役所	にかほ市金浦字金浦	役所跡	
52	214－35－19	八森屋敷	にかほ市小国字八森	遺物包含地	
53	214－36－８	港島御台場	にかほ市金浦字港島	御台場跡	
54	214－36－９	港島方角石	にかほ市金浦字港島	方角石	
55	214－36－11	金浦御蔵屋敷	にかほ市金浦字金浦	屋敷跡	近世
56	214－35－20	梵字石	にかほ市樋目野字下山	磨崖仏	
57	214－35－32	待居館	にかほ市樋目野字待居	館跡	中世
58	214－35－51	上小国	にかほ市小国字上小国	遺物包含地	縄文時代
59	214－35－38	丸山館	にかほ市馬場字丸山	館跡	中世
60	214－35－35	下岩ノ沢	にかほ市馬場字下岩ノ沢	集落跡	縄文時代・古代
61	214－41－29	浜田	由利本荘市出戸字浜田	一里塚	
62	214－41－５	浜館	由利本荘市出戸字浜館	館跡	中世
63	214－35－55	猿田	にかほ市両前寺字浜中	遺物包含地	古代
64	214－41－６	猿田	由利本荘市出戸字猿田	遺物包含地	縄文・弥生・古代

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

発掘方法はグリッド法で行った。調査対象範囲内で任意の点（Ｘ＝－77978.456、Ｙ＝－73803.737）を原点（ＭＡ50）とし、平面直角座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線として、これに直交するラインを東西基線と定めた。この東西南北に沿って４ｍ×４ｍメッシュを組み、その交点にグリッド杭を打設し、グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す‥‥ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ‥‥というアルファベット２文字と、南から北へ向かって昇順する‥‥50・51・52・53‥‥の２桁の数字を組み合わせた記号を記入した。なお、各４m区画の呼称は南東隅の杭の記号を用いた。

遺構には種別を問わず確認した順に１から通し番号を付し、精査を行った。また、番号を登録した後に遺構と判断されなかったものについては欠番とした。

遺物は遺構内出土のものは、遺跡名・遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは遺跡名・出土区・出土層位・出土年月日を記入して取り上げた。

調査の記録は主に図面と写真によった。図面はグリッド杭を基準とした簡易遣り方測量を採用し、平面図・断面図ともに、基本的には１/20の縮尺で作成した。遺構細部や遺物出土状況など微細なものについては１/10で図化した。写真撮影は、35㎜のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルム及びデジタルカメラを使用した。

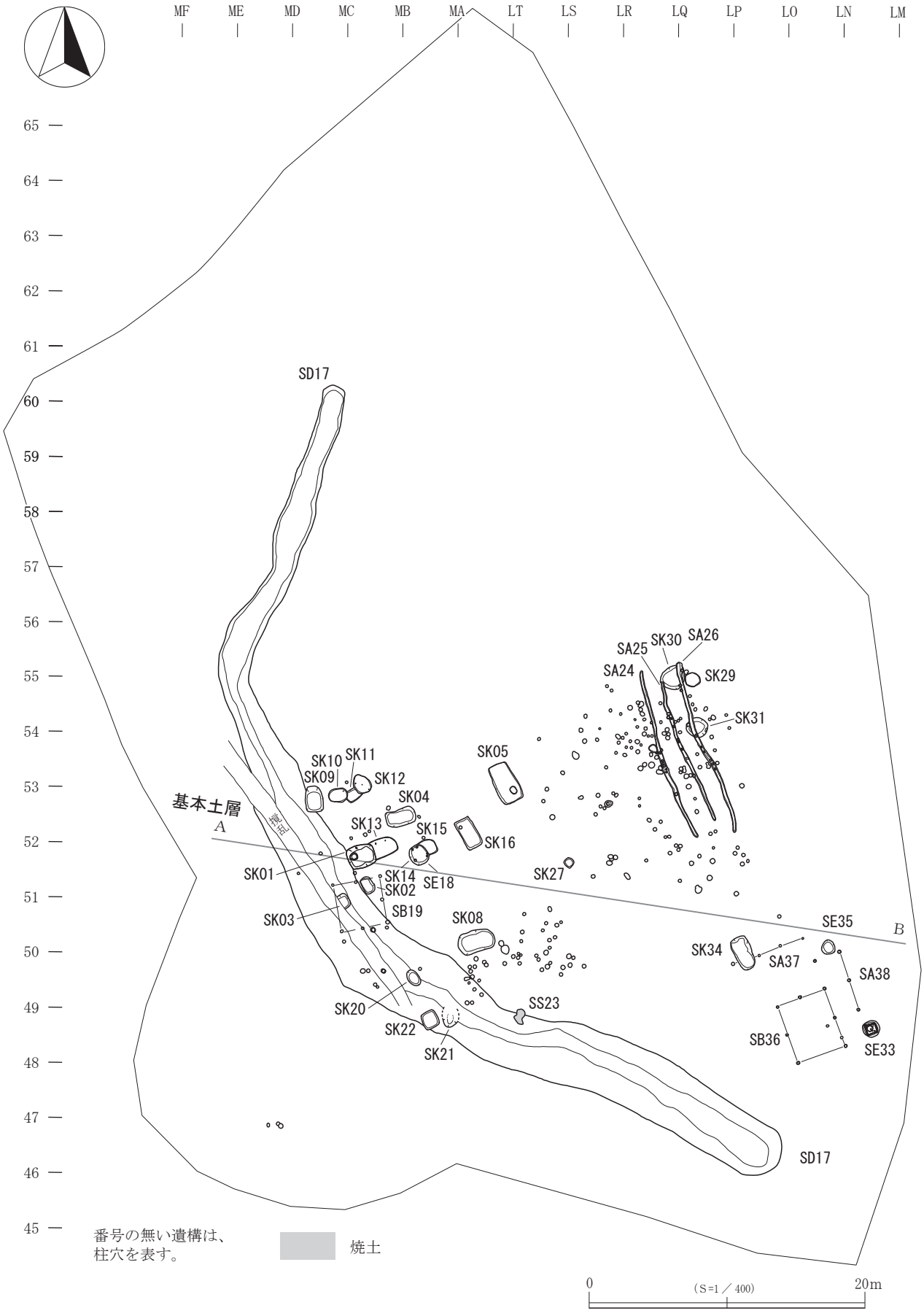
第２節　基本層序

遺跡の基本土層図は、調査区中央を東西に横断するラインで作成した（第６図、第９図）。基本層序は次の通りである。

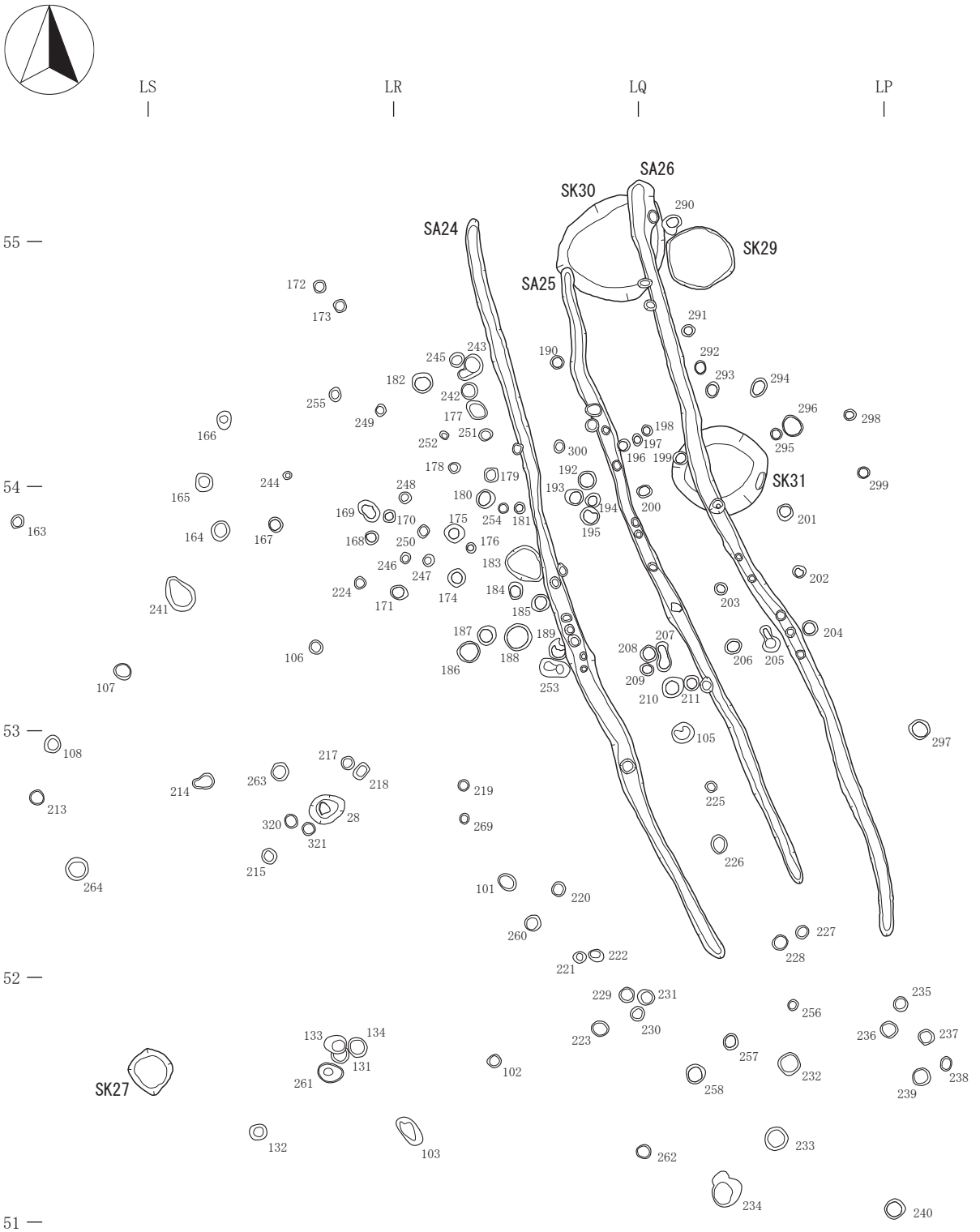
第Ⅰ層　　表土。ゴルフ練習場施設建設時の造成土。褐色（10ＹＲ４/４）シルト。
第Ⅱa層　　畑作土。暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト。
第Ⅱb層　　水田作土（グライ化が強い）。灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト。
第Ⅱc層　　水田作土（グライ化が弱い）。にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト。
第Ⅱd層　　水田の床土。褐色（7.5ＹＲ４/４）シルト。
第Ⅲ層　　古代の遺物包含層。黒褐色（10ＹＲ３/２）シルト。
第Ⅳ層　　地山。黄褐色（10ＹＲ５/４）ローム。

調査区は、ゴルフ練習場施設造成及びそれ以前の耕作地としての利用に起因する撹乱の影響を受けていた。西端の地山標高は約33.2m、東端の地山標高は約32.1ｍで約1.1ｍの高低差がある。

調査区内の平坦面は、ゴルフ練習場施設建設時に北側、西側の周囲を囲む丘陵部分を削平し、主として東側から南側にかけての低位部に盛土し造成している。第Ⅰ層表土は、当該施設建設時の造成層


MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
SD17
SK10
SK11
SK09
SK12
SK04
SK13
SK15
SK16
SK05
SA25
SK30
SA26
SA24
SK29
SK31
基本土層
A
B
撹乱
SK01
SK14
SK02
SE18
SK27
SK03
SB19
SK08
SE35
SK34
SA37
SA38
SK20
SS23
SK22
SK21
SB36
SE33
SD17
番号の無い遺構は、
柱穴を表す。
焼土
0
(S=1／400)
20m

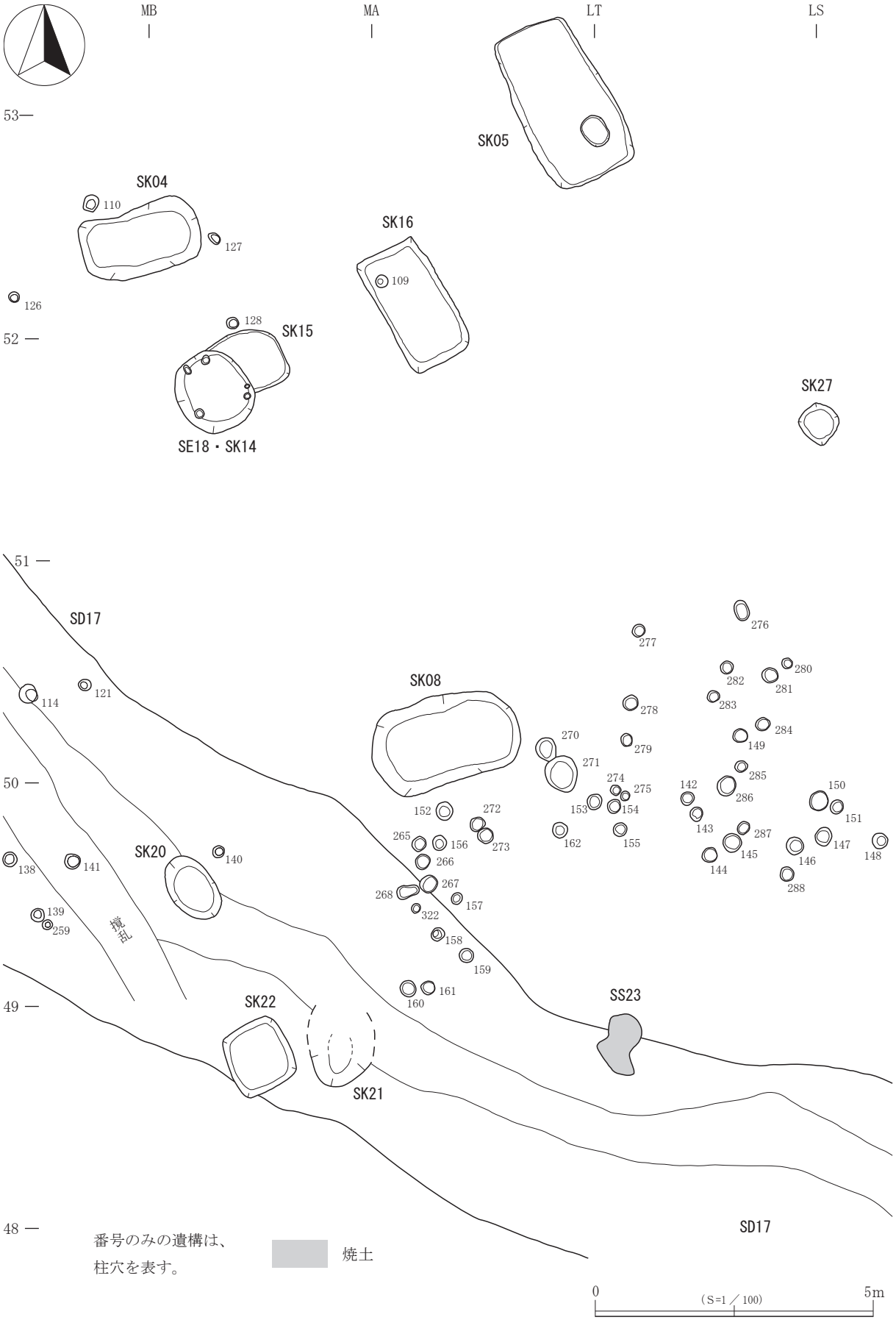
第６図　遺構配置図



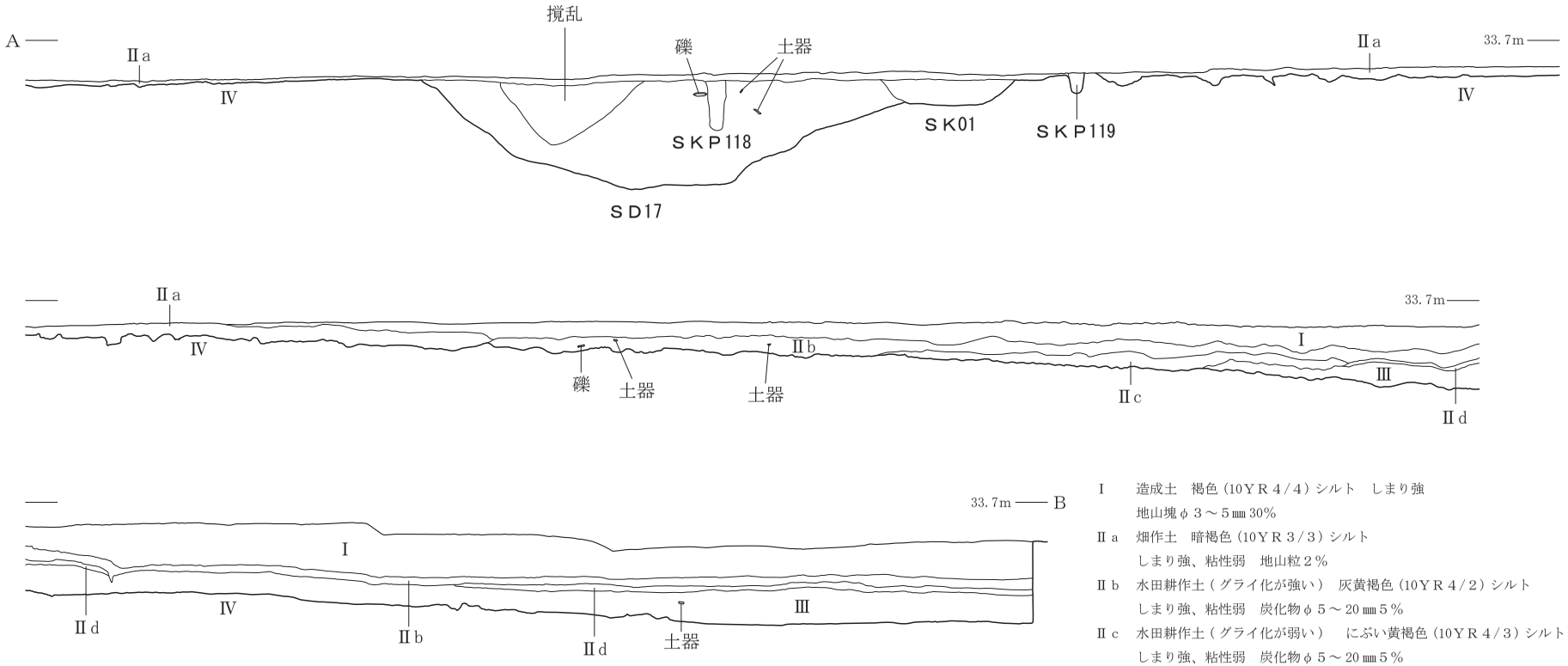
番号のみの遺構は、
柱穴を表す。

0　（S=1／100）　5m

第７図　柱穴配置図（１）


MB
MA
LT
LS
53
52
51
50
49
48
SK05
SK04
SK16
SK15
SE18・SK14
SK27
SD17
SK08
SK20
SK22
SK21
SS23
撹乱
番号のみの遺構は、
柱穴を表す。
焼土
0
(S=1／100)
5m

第８図　柱穴配置図（２）



Ⅰ　造成土　褐色（10ＹＲ４/４）シルト　しまり強
　　地山塊φ３～５㎜30%
Ⅱａ　畑作土　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト
　　しまり強、粘性弱　地山粒２%
Ⅱｂ　水田耕作土（グライ化が強い）　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
　　しまり強、粘性弱　炭化物φ５～20㎜５%
Ⅱｃ　水田耕作土（グライ化が弱い）　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト
　　しまり強、粘性弱　炭化物φ５～20㎜５%
Ⅱｄ　水田の床土　褐色（7.5ＹＲ４/４）シルト　しまり強、粘性弱
Ⅲ　古代の遺物包含層　黒褐色（10ＹＲ３/２）シルト　しまり強、粘性弱
Ⅳ　地山　黄褐色（10ＹＲ５/４）ローム

0　（S＝1／80）　4m

第９図　基本土層図

である。第Ⅱ層は、旧地形の表土や低位部に盛土し造成した耕作土である。第Ⅱa層は、北東－南西ライン以西の畑地の耕作土、第Ⅱb・Ⅱc・Ⅱd層は北東－南西ライン以東の水田の耕作土である。第Ⅱb層はグライ化が強く、第Ⅱc層はグライ化が弱い。第Ⅱd層は水田の床土である。第Ⅲ層は平安時代前期を中心とする古代の遺物包含層である。調査区東側では第Ⅲ層の層厚が約50㎝と厚くなるが、調査区西側は地山面まで削平されており、表土直下で遺構検出を行った。第Ⅳ層は地山としたローム層である。調査区西端から北側は第Ⅳ層地山が露出しており、遺物が希薄である。

第３節　検出遺構と遺物

１　概要

遺構は、掘立柱建物跡２棟、井戸跡３基、土坑22基、大溝跡１条、柵跡３条、柱穴列２条、柱穴195基を検出した。大半の遺構は平安時代に属すると推定されるが、井戸跡１基は中世まで下り、掘立柱建物跡及び柱穴列も平安時代よりも下る時期の可能性も想定される。遺跡の初現時期に属すると考えられる９世紀半ば過ぎを下限とするＳＤ17大溝跡は、平坦面の中央部を弧状に巡っており、その内側を区画したものと考えられる。この大溝によって区画される同時期と推定される遺構には、調査区中央から東側で検出した井戸跡２基、柵跡、柱穴群などがある。大溝埋没後の遺構には、調査区中央付近で検出した９世紀後半以降の土坑墓群、ＳＢ19掘立柱建物跡、調査区東端で検出した中世のＳＥ33井戸跡がある。本報告書に掲載した遺構内出土土器は、須恵器42点、土師器22点で、ＳＤ17大溝跡出土土器が全体の半数を占める。そのうち、須恵器の器種は蓋２点・坏20点・高台付坏３点・壺５点・甕12点である。土師器の器種は蓋１点・坏10点・高台付坏１点・甕10点である。ＳＥ33井戸跡出土木製品は、曲物１点、箸１点で、井戸側を構成する部材は、隅柱４点、横桟８点、縦板42点である。この他には土錘、環状土製品、鉄鏃、刀子、フイゴ羽口、鍛冶滓、天然アスファルトが出土した。選別された出土遺物の特徴については、土器観察表（第７～10表）、土製品一覧表（第11表）、鉄製品・鉄関連遺物・天然アスファルト一覧表（第12表）、ＳＥ33井戸跡木製品・遺材一覧表（第13表）に掲載した。

２　大溝跡

ＳＤ17（第10・11図、巻頭図版３、図版１）

調査区北側から南東側の第Ⅳ層上面で褐色の帯状プランとして確認した。ＳＢ19、ＳＫ01・03・09・20・21・22、ＳＳ23と重複し、これらの遺構に切られる。北側はゴルフ練習場施設造成時に削平され、東側は調査区外へ延びるため全体形状は不明であるが、平面形規模は残存部全長78.40ｍ、幅1.60～5.15m、深さ1.09～1.64ｍで、調査区を弧状に横断する。南東端から北西部までの掘り込みは確認面から1.5m前後と深く、幅も５ｍ前後ある。北西部から北端までは幅２ｍ前後、深さ0.5～１ｍとやや浅くなる。断面形は擂鉢状を呈し、壁は急な角度で立ち上がる。堆積土は５層に分かれ、１層は旧表土由来の暗褐色土で、地山土塊と炭化粒を多量に含むことから人為的な埋め戻し土と考える。２層は地山土由来のにぶい黄褐色土を主体とし、地山土塊と炭化粒を多量に含むことから人為的な埋め戻し土と考える。３～５層は地山土由来の褐色土～灰黄色土～暗灰黄色土で、湧水によるグライ化が認められる。

遺物は堆積土上層の１・２層に集中しており、須恵器の蓋２点（第21図１・２）・坏18点（第21・22・

24 ～ 26図３～７・９・10・13 ～ 18・32・34・41・43・55）・高台付坏３点（第21・22図８・11・12）・壺４点（第22図19 ～ 22）・甕７点（第23・24図23 ～ 29）が出土した。須恵器坏９・34・43・55はＳＫ03出土破片と、10はＳＫ22出土破片と接合関係にある。須恵器甕23はＳＥ35出土破片、24はＳＥ33出土破片と接合関係にある。土師器では蓋１点（第24図30）・坏８点（第24・25図31・33・36 ～ 40・42）・高台付坏１点（第24図35）・甕７点（第25・26図44 ～ 50）が出土した。土師器蓋30と土師器坏33・38はＳＫ03出土破片と接合関係にある。土製品では土錘１点（第32図111）、環状土製品１点（第32図114）、フイゴ羽口１点（第32図124）、鍛冶滓３点（第32図125 ～ 127）、天然アスファルト１点（第32図129）が出土した。

本大溝跡は調査区中央部を弧状に横断し、その東側では掘立柱建物跡、井戸跡、柵跡、建物を構成すると推定される柱穴群が検出されている。一方、大溝跡の西側には僅かな柱穴以外に遺構は認められない。このことから、本大溝は集落の西側を区画する施設と考えられる。本遺構の最終的な埋没年代は出土遺物から、平安時代前期の９世紀半ば過ぎと推定される。

３　掘立柱建物跡

２棟検出した。ＳＢ36掘立柱建物跡とＳＤ17大溝跡の検出面は共に第Ⅳ層上面であり、ＳＢ36掘立柱建物跡 はＳＤ17大溝跡に区画される遺構の一つの可能性もあるが断定できない。ＳＢ19掘立柱建物跡はＳＤ17大溝跡を切っていることから、ＳＤ17大溝跡埋没後の遺構である。

ＳＢ19（第12図、図版２）

ＭＢ50・51、ＭＣ50・51区に位置する。第Ⅳ層上面及びＳＤ17大溝跡堆積土上面において、暗褐色土主体の小型円形プランを７基検出し、堆積土に類似性が認められ、平行かつ等間隔の並びが抽出できたため、掘立柱建物跡として復元した。ＳＤ17大溝跡を切る。検出された７基の柱穴から、桁行２間×梁行２間の規模の建物が想定できる。ＳＤ17大溝跡の他に現代の撹乱溝と重複しており、本来、総柱構造であった可能性も考えられる。建物の方位は南北列の柱筋でＮ－12°－Ｗである。

柱間寸法は桁行方向で南北列でＰ３－４間1.70m、Ｐ４－７間1.70mである。梁行方向は東西列がＰ１－２間1.68m、Ｐ２－３間1.84m、Ｐ５－６間1.55m、Ｐ６－７間1.87mである。堆積土は単層で、旧表土由来の暗褐色土を主体とし、明確な柱痕跡は確認できなかった。

遺物はＰ５から土師器坏１点、土師器甕片、須恵器小壺１点、Ｐ１・２から土師器甕片が出土した。

本遺構はＳＤ17大溝跡埋没後に構築されていることから、その上限時期は９世紀半ば過ぎである。

ＳＢ36（第13図、図版２）

ＬＭ48、ＬＮ47 ～ 49、ＬＯ48・49区に位置する。第Ⅳ層上面において、暗褐色土主体の小型円形プランを11基検出し、堆積土に類似性が認められ、平行かつ等間隔の並びが抽出できたため、掘立柱建物跡として復元した。重複する遺構はなく、建物の東側に隣接してＳＥ33井戸跡、ＳＡ38柱穴列、北側にＳＡ37柱穴列がある。検出された８基の柱穴から桁行２間×梁行２間の規模の建物が想定できる。建物の方位は南北列の柱筋でＮ－20°－Ｗである。

柱間寸法は桁行方向で南北列がＰ２－５間2.12m、Ｐ５－７間2.20m、Ｐ１－４間2.10m、Ｐ４－６間

2.24m、Ｐ６－８間2.20mである。梁行方向は東西列でＰ２－３間1.77m、Ｐ３－４間1.88mである。堆積土は単層で、旧表土由来の暗褐色土を主体とし、明確な柱痕跡は確認できなかった。

遺物はＰ７から土師器甕片が出土した。

本遺構はその位置から、ＳＤ17大溝跡の区画内に同時存在した可能性も想定される。

４　井戸跡

３基検出した。このうちＳＥ33の井戸側は隅柱、横桟、縦板で構成され、底部に曲物を据えている。また、ＳＥ18底面の四隅に凹みを確認し、井戸側の隅柱を設置したものと推定される。ＳＥ18・35から構造物は確認できなかったが、他の土坑より底面標高が低く現在でも湧水があることと、掘方の類似性を認め、井戸跡とした。なお、遺構内の出土遺物は９世紀代の須恵器を中心とする。

ＳＥ18（第17図、図版２）

ＭＡ51区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＫ14・15土坑と重複し、これらの遺構に切られる。平面形規模は径残存値1.10mで、残存部から略円形と推定される。確認面からの深さは1.40m、底面標高は31.78mである。長軸の方位はＮ－33°－Ｗである。周壁は垂直に立ち上がり、最下層に湧水層が認められることから井戸跡とした。堆積土は２層に分かれ、１・２層ともに旧表土由来の黒褐色土～暗褐色土で、地山土塊と炭化物を多量に含むことから、井戸廃棄後の人為的な埋め戻しと考える。２層には木材や曲物の一部と推定される炭化物が多量に混入する。また、掘方底部の四隅には、径約10～20㎝の円形掘方が検出され、隅柱を伴う形態の井戸側を有したと推定される。

遺物は２層から土師器坏片が出土した。

本遺構はその位置及び土坑との切り合い関係とから、ＳＤ17大溝跡と併存した可能性が想定される。

ＳＥ33（第14図、巻頭図版４、図版２）

ＬＭ48区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は径1.16mの略円形である。確認面からの深さは1.80m、底面標高は30.07mである。長軸の方位はＮ－16°－Ｗである。周壁は垂直に立ち上がり、開口部付近でやや外傾する。水が湧き上がる場所に井戸を構築しており、浸透水を利用している。掘方内側に１辺約70㎝の方形で、縦板組隅柱横桟留め構造の井戸側を埋設している。井戸側は本来、確認面付近まで伸びていたものと考えられるが、腐食のため、高さ1.1m前後のみが残存している。隅柱と横桟の組み方は対抗する２本の隅柱には貫通孔を穿って横桟を通し、これに直交する方向では横桟の端部を段状に削り隅柱と結合している。隅柱と結合する横桟は下部と上部の２段検出しているが、上層の埋土から横桟と思われる部材が出土していることから、横桟の段は３段以上の可能性がある。縦板は隅柱と横桟で保持するその外側に隙間なく立て並べて、裏込め土の土圧で押さえ込んでいる。井戸側内の井戸下部には大型の曲物を井筒として埋設している。

堆積土は４層に分かれ、１・２層は地山土に類似する灰色土～暗オリーブ灰色土で、地山土塊や炭化粒を多量に含むことから、井戸廃棄後の人為的な埋め戻し土と考える。３層は褐灰色砂質土で、井戸側を設置した際の裏込め土である。４層は暗オリーブ灰色砂質土で、曲物設置に伴う裏込め土であり、径約３～５㎝の円礫が多量に混入する。井戸側や曲物の裏込めに砂質土を利用して浸透水を確保

し、曲物の外側や底部に川原石を敷き詰めることにより、井戸水の浄化を意図したものと推定される。また、底面のほぼ中央の曲物内には水の汲み上げの際の濁りを防ぐため、直径約10㎝の川原石を据えている。

隅柱（第33･34図130･131･134･135）は長さ102.1 ～ 110.2㎝、幅10.2 ～ 13.1㎝、厚さ5.9 ～ 6.4㎝、南東･南西･北東の各隅柱が板目材、北西隅柱が柾目材である。隅柱の板目面にヨキまたはチョウナではつった痕跡を残し、上下２か所に幅（材幅方向）4.0 ～ 4.2㎝、長さ（材長方向）5.1 ～ 6.0㎝の角孔をノミにより穿つ。隅柱底部先端の木口はヨキによるＶ字状あるいは平坦な加工痕を残す。隅柱の角孔両側にはノミで突いたとみられる鋭利な刃痕がある。横桟（第33 ～ 35図132・133・136・137・140 ～ 143）は、長さ71.4 ～ 79.5㎝、幅5.9 ～ 7.2㎝、厚さ4.5 ～ 6.1㎝、下部横桟（第33・34図132・133・136・137）は当時の原形をとどめているが、上部横桟（第35図140 ～ 143）は腐食が進み原形より細く丸みを帯びている。縦板は長さ42.5 ～ 81.0㎝、幅11.8 ～ 21.8㎝、厚さ0.7 ～ 3.9㎝、検出した42点の縦板の殆どが板目材で、柾目材は縦板（第36図145・147）の２点のみである。また、縦板（第36図144・146）の下部には径約１㎝の穿孔が１か所認められる。この穿孔は井戸側の構造と関係が認められず、転用材の可能性が高い。曲物（第35図138）は径42㎝、高さ32㎝で残存状態は良好である。曲物側板の内面には刃物の刃先でつけた縦方向のケビキが認められ、切り曲げの加工を施している。曲物の上下はまわしで補強し、側板とまわしは山桜の帯で綴じている。曲物底部には径約１㎝の孔を10㎝程の間隔で15か所穿ち、木釘を打って底板を固定したものであるが、底板が無いことから転用した井筒として再利用したものと推定される。曲物上部には開口部を二分する位置に径約１㎝の孔が２か所認められる。曲物上端にはＶ字状の切り込みが３か所認められ、まわしまで及んでいることから、井筒に転用した際の加工痕と推定される。

遺物は２層下部の水溜め部からＳＤ17出土破片と接合関係にある須恵器大甕（第23図24）、須恵器甕片２点（第26図51・52）、箸１点（第35図139）、土師器坏片、内黒土師器が出土した。

井戸跡の構築年代については、堆積土上部から出土した遺材と井戸側を構成する縦板（第38図155）の^{14}Ｃ年代測定による２σ暦年較正年代範囲が、それぞれ1220～1272年（第４章第３節）、1298～1402年（第４章第４節）となることから、13世紀～ 14世紀頃と考える。

ＳＥ35（第14図、図版２）

ＬＮ49・50区第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はないが、隣接してＳＢ36掘立柱建物跡、ＳＡ37・38柱穴列などが存在する。平面形規模は径1.04ｍの略円形である。確認面からの深さは0.62ｍ、底面標高は31.48ｍである。長軸の方位はＮ－８°－Ｗである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。最下層に湧水層が認められることから素掘りの井戸跡とした。堆積土は３層に分かれ、１・２層は地山土由来のにぶい黄褐色土～灰黄褐色土、３層はグライ化が著しい砂質土である。いずれも地山土塊を多量に含むことから、井戸廃棄後の人為的埋め戻しと考える。

遺物は２層から、ＳＤ17出土破片と接合関係にある須恵器大甕（第23図23）、２・３層から土師器坏片が出土した。

本遺構は位置及び出土遺物から、ＳＢ36掘立柱建物跡、ＳＤ17大溝跡などと併存した可能性も想定される。

５　土坑

土坑は22基検出した。このうち、長さ２ｍ前後の隅丸長方形～楕円形平面で、特徴的な形態の土坑10数基が調査区中央周辺にまとまって分布する。これらの土坑から人骨は検出されなかったが、一度に埋め戻されており、中には副葬品の可能性がある刀子や鉄鏃、棒状鉄製品が出土した遺構もあることから、土坑墓であったものと推定される。これらの土坑にはＳＤ17大溝跡埋没後に構築されているものがあること、出土土器の時期などから大きくは９世紀後半から10世紀頃に属するものと推定される。土坑墓群は長軸方向が北東方向のものと北西方向のものに大きく分かれ、被葬者の何らかの性格の違いなどを反映したものと推測される。

ＳＫ01（第15図、図版３・４）

ＭＢ51区第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ17大溝跡、ＳＫ13土坑を切る。平面形規模は長径1.9m、短径1.7ｍの隅丸長方形である。確認面からの深さは0.42ｍ、底面標高は32.78ｍである。長軸の方位はＮ－71°－Ｅである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦で、南西端に径0.58ｍの円形掘方をともなう。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かって外傾する。堆積土は２層に分かれ、地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来の黄褐色土～褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は南西端の１層底面から鉄鏃１点（第32図117）、土師器坏片・甕片が出土した。鉄鏃の先端部は北東方向に向け、横位に置かれており、その下層に円形掘方をともなう。また、堆積土１層から土師器片が出土した。北西端からは長軸約14㎝の被熱した角礫が出土した。人骨は検出していないが、副葬品と推定される鉄鏃が出土したことと、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ02（第15図、図版３）

ＭＢ51区第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径1.23m、短径0.81ｍの隅丸長方形である。確認面からの深さは0.25m、底面標高は32.69ｍである。長軸の方位はＮ－34°－Ｗである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、１層は旧表土由来の暗褐色土を主体とし、地山土塊と炭化物を多量に含む人為的埋め戻し土、２層は混入物がないことから周辺からの自然流入土と考える。

遺物は１層から、Ｌ字形鉄製品１点（第32図118）、棒状鉄製品３点、土師器坏片が出土した。人骨は検出していないが、副葬品と推定される棒状鉄製品が出土したことと、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。検出した炭化物の^{14}Ｃ年代測定の２σ暦年較正年代範囲は898 ～ 1019年である（第４章第３節）。本遺構の時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ03（第15図、図版３）

ＭＢ50・51、ＭＣ50・51区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ17と重複し、同遺構を切る。南西側及び上層はゴルフ練習場施設建設時で失われ、全体形状は不明であるが、平面形規模は残存値で長径残存部0.68m、短径残存部1.08m、残存部から平面形は隅丸長方形と推定される。長軸の方位は

Ｎ－63°－Ｗである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。確認面からの深さは0.09m、底面標高は32.80mである。周壁は緩やかな角度で立ち上がり、開口部に向かって外傾する。堆積土は単層で、旧表土由来の暗褐色土を主体とし、地山土塊と炭化物を多量に含むことから一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は、刀子破片２点(第32図119・120)、金属片、須恵器坏(第21・24 ～ 26図９・34・43・55)、須恵器甕片(第26図53・54)、土師器蓋(第24図30)・坏(第24・25図33・38)・甕(第27図56)・内黒土師器、鍛冶滓(第32図128)が出土した。このうち須恵器坏９・34・43・55、土師器蓋30、坏33・38はＳＤ17出土破片と接合関係にある。人骨は検出していないが、副葬品の可能性がある刀子が出土していることと、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ04(第15図、図版３・４)

ＭＡ・ＭＢ52区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径2.17m、短径1.20mの隅丸長方形である。長軸の方位はＮ－76°－Ｅである。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.36m、底面標高は32.87mである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、１層は旧表土由来の暗褐色土、２層は地山土由来の黄褐色土を主体とし、ともに地山土塊と炭化物を多量に含むことから一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、須恵器坏片が出土した。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ05(第16図、図版３)

ＬＳ52・53、ＬＴ52・53区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径3.02m、短径1.66mの隅丸長方形である。長軸の方位はＮ－27°－Ｗである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦で、南東側に長径0.56m、短径0.44mの楕円形掘方をともなう。上層はゴルフ練習場施設建設時で失われ、確認面からの深さは0.09m、底面標高は33.05mである。周壁は急な角度で立ち上がるものと推定される。堆積土は２層に分かれ、ともに地山土由来の黄褐色土を主体とする。１層底面中央付近に幅約40㎝、厚さ約0.5cmの炭化物層が認められ、２層は楕円形掘方の埋土であり、地山土塊と炭化物を多量に含むことから一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、土師器坏片・甕片が出土した。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ08(第16図、図版３)

ＬＴ49・50区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径2.72m、短径1.59mの隅丸長方形である。長軸の方位はＮ－71°－Ｅである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。確認面からの深さは0.46m、底面標高は32.55mである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、１層は旧表土由来の暗褐色土、２層は地山土由来の黄褐色土を主体とし、ともに地山土塊と炭化物を多量に含むことから、一括した人為的埋め

戻し土と考える。

遺物は１層から、刀子１点(第32図121)、須恵器坏１点(第27図57)、土師器甕片が出土した。人骨は検出していないが、副葬品と推定される刀子が出土していることと、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。出土遺物から時期は９世紀後半から10世紀頃と推定される。

ＳＫ09(第16図、図版３)

ＭＣ52区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ17と重複し、同遺構を切る。平面形規模は長径1.87m、短径1.30mの隅丸長方形である。長軸の方位はＮ－５°－Ｗである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。確認面からの深さは0.59m、底面標高は32.55mである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来のにぶい黄褐色土～灰黄褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、土師器甕片、角礫が出土した。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ10(第17図、図版３)

ＭＢ・ＭＣ52区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＫ11と重複し、同遺構を切る。平面形規模は長径1.39m、短径1.00mの隅丸長方形である。長軸の方位はＮ－54°－Ｅである。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.52m、底面標高は32.69mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来のにぶい黄褐色土～褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、角礫が出土した。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ11(第17図、図版３)

ＭＢ52区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＫ10・12と重複し、これらの遺構に切られる。西側はＳＫ10と北東側はＳＫ12と重複により失うため全体形状は不明であるが、平面形規模は長径残存値0.94m、短径0.85mで、残存部から隅丸長方形と推定される。長軸の方位はＮ－54°－Ｅである。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.42m、底面標高は32.82mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来の黄褐色土～褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は出土しなかった。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ12(第17図、図版３)

ＭＢ52・53区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＫ11と重複し、同遺構を切る。平面形規模は長径1.46m、短径1.17mの楕円形である。長軸の方位はＮ－55°－Ｗである。底面は南東側がやや深くなるが、ほぼ平坦である。確認面からの深さは0.40m、底面標高は32.84mである。周壁はほぼ垂直に立

ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来のにぶい黄褐色土～褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から礫が出土した。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ13（第15図、図版４）

ＭＢ51・52区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＫ01と重複し、同遺構に切られる。南西側はＳＫ01と重複により失うため全体形状は不明であるが、平面形規模は長径残存値1.73m、短径1.35mで、残存部から隅丸長方形と推定される。長軸の方位はＮ－71°－Ｅである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。確認面からの深さは0.31m、底面標高は32.83mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は２層に分かれ、地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来のにぶい黄褐色土～褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から長軸８～14㎝の小礫が２個出土した。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ14（第17図、図版４）

ＭＡ51区に位置し、第Ⅳ層上面で周囲よりやや凹む円形プランを確認した。ＳＥ18、ＳＫ15と重複し、これらの遺構を切る。重複するＳＥ18は井戸廃棄後に埋め戻されているが、最下層の湧水により上層部は周囲より凹んでいたものと考える。ＳＫ14はＳＥ18廃棄後の凹みを利用して構築された土坑と推定される。平面形規模は長径1.47m、短径1.29mの円形である。長軸の方位はＮ－33°－Ｗである。底面は中央部がやや凹む。確認面からの深さは0.21m、底面標高は33.00mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は単層で、地山土塊と炭化物を多量に含む旧表土由来の暗褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、刀子１点（第32図122）、土師器甕片が出土した。人骨は検出していないが、副葬品と推定される刀子が出土していることと、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ15（第17図、図版４）

ＭＡ51・52区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＥ18、ＳＫ14と重複し、ＳＫ14に切られ、ＳＥ18を切る。南西側はＳＫ14と重複により失うため全体形状は不明であるが、平面形規模は長径残存値1.36m、短径1.14mで、残存部から隅丸長方形と推定される。確認面からの深さは0.83m、底面標高は32.4mである。長軸の方位はＮ－64°－Ｅである。底面は南西側が深くなり、径0.48m、深さ残存値0.64mの円形掘方をともなう。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かって外傾する。堆積土は３層に分かれ、地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来のにぶい黄褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、棒状鉄製品２点（第32図123）、土師器甕片が出土した。人骨は検出していないが、棒状鉄製品が出土していることと、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の

土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ16（第18図、図版４）

ＬＴ51・52区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＫＰ109と重複し、同遺構に切られる。平面形規模は長径2.27m、短径1.21mの隅丸長方形である。長軸の方位はＮ－27°－Ｗである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。確認面からの深さは0.26m、底面標高は33.12mである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は３層に分かれ、１・２層は地山土塊と炭化物を多量に含む地山土由来のにぶい黄褐色土～褐色土を主体とし、一括した人為的埋め戻し土と考える。３層は壁面の崩落土と考える。

人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。時期は他の土坑墓の類例から、９世紀後半から10世紀頃と推定する。

ＳＫ20（第18図、図版４）

ＭＡ49区第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ17を切る。平面形規模は長径1.26m、短径0.80mの楕円形である。長軸の方位はＮ－33°－Ｗである。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.29m、底面標高は32.36mである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は単層で、地山土塊を多量に含み、旧表土由来の暗褐色土を主体とする人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、土師器坏片・甕片が出土した。ＳＤ17との切り合い関係から、上限時期は９世紀半ば過ぎである。

ＳＫ21（第18図）

ＬＴ・ＭＡ48区第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ17を切る。北側は確認調査時のトレンチにより失うため全体形状は不明であるが、平面形規模は長径残存値1.14m、短径残存値0.56mで、残存部から楕円形と推定される。長軸の方位はＮ－80°－Ｗである。底面は中央部がやや凹む。確認面からの深さは0.18m、底面標高は33.32mである。周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は単層で、地山土由来の黄褐色土塊を多量に含み、旧表土由来の暗褐色土を主体とする人為的埋め戻し土と考える。ＳＤ17との切り合い関係から、上限時期は９世紀半ば過ぎである。

ＳＫ22（第18図、図版４）

ＭＡ48区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ17を切る。平面形規模は長径1.24m、短径1.16mの隅丸方形である。長軸の方位はＮ－24°－Ｗである。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.50m、底面標高は32.00mである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は単層で、地山土由来の黄褐色土塊を主体とし、一括した人為的埋め戻しと考える。

遺物は下層から須恵器坏（第21図10）が出土し、ＳＤ17出土破片と接合関係にある。ＳＤ17との切り合い関係から、上限時期は９世紀半ば過ぎである。

ＳＫ27（第18図）

ＬＲ51区第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径0.67m、短径0.65mの隅丸方形である。長軸の方位はＮ－49°－Ｗである。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.52m、底面標高は32.56mである。周壁はほぼ垂直な角度で立ち上がる。堆積土は２層で、１層は地山土塊を多量に含み、旧表土に由来する暗褐色土を主体とし、最下層は湧水によりグライ化が認められる。２層は地山土由来のにぶい黄褐色土塊を主体とする人為的な埋め戻し土と考える。最下層に湧水層が認められることから素掘りの井戸跡の可能性も考えられる。

遺物は１層から、土師器甕片が出土した。詳細な時期は不明である。

ＳＫ29（第19図、図版４）

ＬＰ54・55区第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径1.17m、短径1.02mの略円形である。長軸の方位はＮ－65°－Ｗである。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.43m、底面標高は32.46mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は４層で、１・２層は旧表土由来の暗褐色土～黒褐色土を主体とし、地山土塊と炭化物を多く含む。３・４層は地山土由来のにぶい黄褐色土～褐色土を主体とする。１～４層ともに人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は１層から土師器坏１点（第27図59）・甕片が出土した。詳細な時期は不明である。

ＳＫ30（第19図）

ＬＰ54・55、ＬＱ54・55区第Ⅳ層上面で確認した。ＳＡ25・26に切られる。平面形規模は長径1.90m、短径1.62mの不整な楕円形である。長軸の方位はＮ－38°－Ｅである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。確認面からの深さは0.54m、底面標高は32.35mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は２層で、旧表土由来の黒褐色土～暗褐色土を主体とし、地山土塊と炭化物を含むことから人為的埋め戻し土と考える。詳細な時期は不明である。

ＳＫ31（第19図、図版４）

ＬＰ53・54区第Ⅳ層上面で確認した。ＳＡ26に切られる。平面形規模は長径1.50m、短径1.39mの略円形である。長軸の方位はＮ－66°－Ｗである。底面は若干の凹凸を有するもののほぼ平坦である。確認面からの深さは0.39m、底面標高は32.60mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は２層で、１層は旧表土由来の黒褐色土を主体とし、地山土塊と炭化物を多く含むことから人為的埋め戻し土と考える。２層は地山土由来のにぶい黄褐色土を主体とする人為的埋め戻し土と考える。

遺物は１層から、土師器甕片が出土した。東端２層上面で径30㎝の円礫が出土した。詳細な時期は不明である。

ＳＫ34（第19図）

ＬＯ49・50、ＬＰ49・50区第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径2.47m、短径1.29mの隅丸長方形である。長軸の方位はＮ－25°－Ｗである。底面は南東側は平坦であるが、北西側はやや深くなる。確認面からの深さは0.36m、底面標高は31.99mである。周壁は急な角度で立ち

上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層に分かれ、１層は地山土に類似する褐灰色土で、地山土塊と炭化粒を多量に含むことから人為的な埋め戻し土と考える。２層は地山土に類似する黄灰色土で炭化粒を少量含む。

遺物は１～２層から須恵器壺片（第27図60）、１層から土師器坏片・甕片が出土した。人骨は検出していないが、一度に埋め戻されていることから土坑墓と判断する。出土遺物から時期は９世紀後半から10世紀頃と推定する。

６　鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構は、１基検出した。遺跡内からは鉄製品及び鍛冶滓やフイゴ羽口を検出しており、鍛冶関連施設の可能性がある。

ＳＳ23（第19図）

ＬＳ48区に位置し、第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ17を切る。平面形規模は長径1.05m、短径0.55mの不整な楕円形である。長軸の方位はＮ－15°－Ｗである。底面は南東側は平坦であるが、北西側はやや深くなる。確認面からの深さは0.20m、底面標高は32.14mである。堆積土は単層の被熱層で、明赤褐色塊を主体とし、炭化粒を多量に含むことから、遺構周辺で焼成行為があったものと考える。

遺物は鍛冶滓、土師器甕片が出土した。遺構の周辺からは刀子などの鉄製品、フイゴ羽口や鍛冶滓が出土していることから鍛冶関連遺構とした。ＳＤ17を切ることから、９世紀半ば過ぎを上限とする。

７　柵跡・柱穴列

柵跡は３条、柱穴列はＳＢ36掘立柱建物跡の北側と東側で２条検出した。いずれも区画のための柵列や目隠し塀の可能性が考えられる。

ＳＡ24（第20図、図版１）

ＬＰ52・53、ＬＱ53～55区に位置する。第Ⅳ層上面で地山土塊・炭化物粒を含む暗褐色土主体の帯状プランと複数の小型円形プランを確認した。また、東側に隣接するＳＡ25・26と平行する。

本遺構は溝と９基の柱穴から構成される。北側及び南側は上面の削平により失われているが、残存部は全長13.87m、幅0.19～0.46m、確認面からの深さは32.88～33.20mで、Ｎ－20°－Ｗを主軸とする。柱穴は円形で径0.11～0.24m、確認面からの深さは0.05～0.31m、底面標高は32.74～33.02mである。堆積土は２層で、１層は旧表土由来の暗褐色土を主体とし、２層は地山土由来のにぶい黄褐色土を主体とした人為的な埋め戻し土と考える。柱穴は杭跡と推定されるが、柱痕跡や塀板の痕跡は認められず、廃絶の際に抜去されたものと推測する。

遺物は３層から口端外面に自然釉を被る須恵器坏片、土師器坏片・甕片が出土した。

ＳＡ25（第20図、図版１）

ＬＰ52～54、ＬＱ53・54区に位置する。第Ⅳ層上面で地山土塊・炭化物粒を含む暗褐色土主体の帯状プランと複数の小型円形プランを確認した。また、東側に隣接するＳＡ26、西側に隣接するＳＡ

24と平行する。溝の北端はＳＫ30と重複し、同遺構を切る。

本遺構は溝と８基の柱穴から構成される。北側及び南側は上面の削平により失われているが、残存部は全長10.73m、幅0.20 ～ 0.22m、確認面からの深さは0.06 ～ 0.10mで、Ｎ－21°－Ｗを主軸とする。柱穴は円形平面を基調とし、径0.15～0.26m、確認面からの深さは0.08～0.23m、底面標高は、32.76～32.98mである。堆積土は溝・柱穴とも単層であり、旧表土由来の暗褐色土を主体とする。柱穴は杭跡と推定されるが、柱痕跡や塀板の痕跡は認められず、廃絶の際に抜去されたものと推測する。

遺物は１層中央付近から須恵器甕１点（第27図61）、回転糸切りによる底部の切り離しが認められる土師器坏が出土した。

ＳＡ26（第20図、図版１）

ＬＯ52、ＬＰ52 ～ 55区に位置する。第Ⅳ層上面で地山土塊・炭化物粒を含む暗褐色土主体の帯状プランと複数の小型円形プランを確認した。また、西側に隣接するＳＡ24・25と平行する。溝の中央付近でＳＫ31と、北端でＳＫ30と重複し、それぞれ同遺構を切る。

本遺構は溝と９基の柱穴から構成される。北側及び南側は上面の削平により失われているが、残存部は全長13.16m、幅0.22 ～ 0.30m、確認面からの深さは0.04 ～ 0.32mで、Ｎ－19°－Ｗを主軸とする。柱穴は円形平面を基調とし、径0.11～0.24m、確認面からの深さは0.04～0.32m、底面標高は、32.62～33.03mである。堆積土は溝・柱穴とも単層であり、旧表土由来の暗褐色土を主体とする。柱穴は杭跡と推定されるが、柱痕跡や塀板の痕跡は認められず、廃絶の際に抜去されたものと推測する。

遺物は１層から土師器坏片・甕片が出土した。土師器甕の外面に平行タタキ、内面に平行のアテ具痕が認められる。

ＳＡ37（第13図）

ＬＮ50、ＬＯ49・50、ＬＰ49区に位置する。第Ⅳ層上面において、黒褐色土主体の小型円形プランを４基検出し、堆積土に類似性が認められ、等間隔の並びが抽出できたため、柱穴列とした。重複する遺構はなく、柱穴列の北側に隣接してＳＢ36掘立柱建物跡、南側にＳＡ38柱穴列、ＳＥ33井戸跡がある。柱穴列の方位はＮ－69°－Ｅで、ＳＢ36掘立柱建物跡の梁行き方向とほぼ平行し、ＳＡ38柱穴列とはほぼ直交する。

本遺構は４基の柱穴から構成される。柱穴は円形平面を基調とし、径0.14 ～ 0.23m、確認面からの深さは0.37 ～ 0.66m、底面標高は31.34 ～ 31.7mである。柱間寸法は、Ｐ１－２間2.00m、Ｐ２－３間1.85m、Ｐ３－４間1.70mである。堆積土は単層で、旧表土由来の黒褐色土を主体とし、Ｐ３の埋土下部から礎盤と考える扁平な礫が検出されたが、明確な柱痕跡や塀板の痕跡は認められず、廃絶の際に抜去されたものと推測する。

本遺構は、ＳＢ36掘立柱建物跡と平行関係にあることから、ＳＡ37柱穴列とともに建物跡を区画するための柵列や目隠し塀等の関連施設の可能性が推定される。

ＳＡ38（第13図）

ＬＭ48・49、ＬＮ49・50区に位置する。第Ⅳ層上面において、黒褐色土主体の小型円形プランを３

基検出し、堆積土に類似性が認められ、等間隔の並びが抽出できたため、柱穴列とした。重複する遺構はなく、柱穴列の西側に隣接してＳＢ36掘立柱建物跡、南側にＳＥ33井戸跡、北側にＳＡ38柱穴列がある。柱穴列の方位はＮ－19°－Ｗで、ＳＢ36掘立柱建物跡の桁行き方向とほぼ平行し、ＳＡ37柱穴列と直交する。

３基の柱穴は円形平面を基調とし、径0.20～0.25m、確認面からの深さは0.35～0.50m、底面標高は31.37～31.74mである。柱間寸法はＰ１－２間2.16m、Ｐ２－３間2.24mである。堆積土は旧表土由来の黒褐色土を主体とする単層である。明確な柱痕跡は確認できなかった。

本遺構は、ＳＢ36掘立柱建物跡と平行関係にあることから、ＳＡ37柱穴列とともに建物跡を区画するための柵列や目隠し塀等の関連施設の可能性が推定される。

８　柱穴

柱穴は第Ⅳ層上面で確認し、195基を検出した。このうちＳＫＰ28の平面形規模は長径0.60m、短径0.47mの楕円形で、確認面からの深さは0.58m、底面標高は32.66mである。周壁は急な角度で立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。堆積土は２層で、１層は旧表土由来の暗褐色土を主体とした柱痕跡、２層は地山土塊を多量に含む地山土由来の褐色土を主体とした裏込め土と考える。遺物はＳＫＰ28の１層上面から、横位の状態で土師器甕(第27図58)が出土した(第18図、図版４－８)。また、ＳＫＰ107からは内黒土師器坏(第27図62)、ＳＫＰ160からは土師器甕(第27図63)、ＳＫＰ271からは須恵器坏(第27図64)が出土した。これらの柱穴群には規則的な配列が認められなかったが、規模と埋土が比較的類似する。これらの埋没時期は周辺の土坑や柵跡等と時期差がないものと考えられる。なお、柱穴の位置については柱穴配置図(第７・８図)、柱穴個々の規模、出土遺物については柱穴一覧表(第３～６表)に掲載した。

９　遺構外出土遺物

遺構外からは、須恵器蓋１点(第28図65)、須恵器皿１点(第28図66)、須恵器坏４点(第28図67・69・74・75)、須恵器高台付坏６点(第28図68・70～73、第31図97)、須恵器甕14点(第28～30図76～89)、須恵器系陶器擂鉢１点(第30図90)、土師器坏13点(第30～31図91～96・98～104)、土師器鍋１点(第31図105)、土師器甕５点(第31図106～110)、土錘２点(第32図112・113)、環状土製品２点(第32図115・116)が出土している。選別された出土遺物の特徴については、土器観察表(第８～10表)、土製品一覧表(第11表)に掲載した。

第３表　柱穴一覧表（１）

番号	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	底面標高	土色	土性	しまり	粘性	混入物	重複関係	出土遺物	挿図
			(cm)	(cm)	(cm)	(m)						新＞旧		
28	ＬＲ52	楕円形	60	47	58	32.66	１暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	中	地塊:φ５～７㎜３％ 炭粒:φ３～５㎜５％	—	土師器甕	第27図58
							２褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱				
101	ＬＱ52	略楕円形	32	25	39	32.66	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	無	—	—	土師器甕	—
102	ＬＱ51	略円形	22	22	53	32.40	１暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	—	—	—	—
							２褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱				
103	ＬＱ51	略楕円形	53	27	20	32.73	１暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	—	—	—	—
							２褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	弱	—	—	—	—
105	ＬＰ52 ＬＰ53	略円形	35	34	19	32.63	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—	—	—
106	ＬＲ53	略円形	23	23	4	33.00	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—		—
107	ＬＳ53	略円形	29	26	52	32.67	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	内黒土師器	第27図62
108	ＬＳ52	略円形	28	26	20	32.99	１褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—	土師器甕	—
							２褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	弱				
109	ＬＴ52	円形	23	22	38	32.88	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱		—	—	—
110	ＭＢ52	略楕円形	30	26	27	32.98	１暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	無	炭粒:φ３～５㎜３％	—	—	
							２褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	無				
113	ＭＣ51	略楕円形	19	16	6	32.88	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
114	ＭＢ50	略楕円形	32	28	31	32.76	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—	—	—
115	ＭＢ50	略円形	22	20	56	32.39	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
118	ＭＣ56	略楕円形	26	21	33	32.65	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
119	ＭＢ51	略円形	24	22	25	32.72	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
121	ＭＢ51	略円形	21	21	33	32.71	褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	土師器甕	—
122	ＭＤ46	略円形	34	32	33	32.61	褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	＞ＳＫＰ129	土師器甕	—
123	ＭＤ46	略楕円形	27	19	30	32.68	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—	—	—
124	ＭＢ52	略楕円形	15	13	13	32.97	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜３％	—	—	—
125	ＭＢ52	略円形	25	23	21	32.94	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
126	ＭＢ52	円形	19	18	21	32.94	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
127	ＭＡ52	略楕円形	22	17	28	32.95	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
128	ＭＡ52	略円形	21	21	16	33.06	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
129	ＭＤ46	略円形	25	20	11	32.87	褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	＜ＳＫＰ122	土師器甕	—
131	ＬＲ51	略円形	22	12	56	32.47	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱		＜ＳＫＰ133	—	—
132	ＬＲ51	略円形	28	27	44	32.56	褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	弱	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
133	ＬＲ51	略楕円形	36	31	21	32.84	にぶい黄褐色(10ＹＲ４/３)	SiL	強	無		＞ＳＫＰ131	—	—
134	ＬＲ51	略円形	32	30	49	32.58	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	無	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
135	ＭＢ53	略円形	19	19	12	33.10	にぶい黄褐色(10ＹＲ４/３)	SiL	強	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
137	ＭＢ49	円形	34	33	60	32.22	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜１％	—	土師器甕	—
138	ＭＢ49	略円形	26	25	44	32.38	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜１％	—	土師器甕	—
139	ＭＢ49	略円形	25	24	26	32.50	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜２％	—	土師器甕	—
140	ＭＡ49	円形	22	21	39	32.25	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	土師器甕	—
141	ＭＢ49	略楕円形	28	28	25	31.79	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
142	ＬＳ49	略円形	25	24	29	32.11	１暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
							２黒褐色(2.5ＹＲ３/２)	SiL	中	中				
143	ＬＳ49	略楕円形	25	22	35	32.02	１暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
							２黒褐色(2.5ＹＲ３/２)	SiL	中	中				
144	ＬＳ49	略円形	27	26	38	31.94	１黒褐色(10ＹＲ３/２)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
							２褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中				
145	ＬＳ49	略円形	34	33	34	31.99	１黒褐色(10ＹＲ３/1)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜３％	—	内黒土師器 土師器甕	—
							２褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中				
146	ＬＳ49	略円形	31	31	24	32.17	１暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	中	無	炭粒:φ１～３㎜３％	—	土師器杯	—
							２褐色(7.5ＹＲ４/４)	SiL	中	中				
147	ＬＲ49 ＬＳ49	略円形	33	30	50	31.97	１暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
							２暗灰黄色(2.5ＹＲ５/２)	SiL	中	中				
148	ＬＲ49	略円形	28	28	46	32.05	１暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１㎜２％	—	—	—
							２暗灰黄色(2.5ＹＲ５/２)	SiL	中	中				

第４表　柱穴一覧表（２）

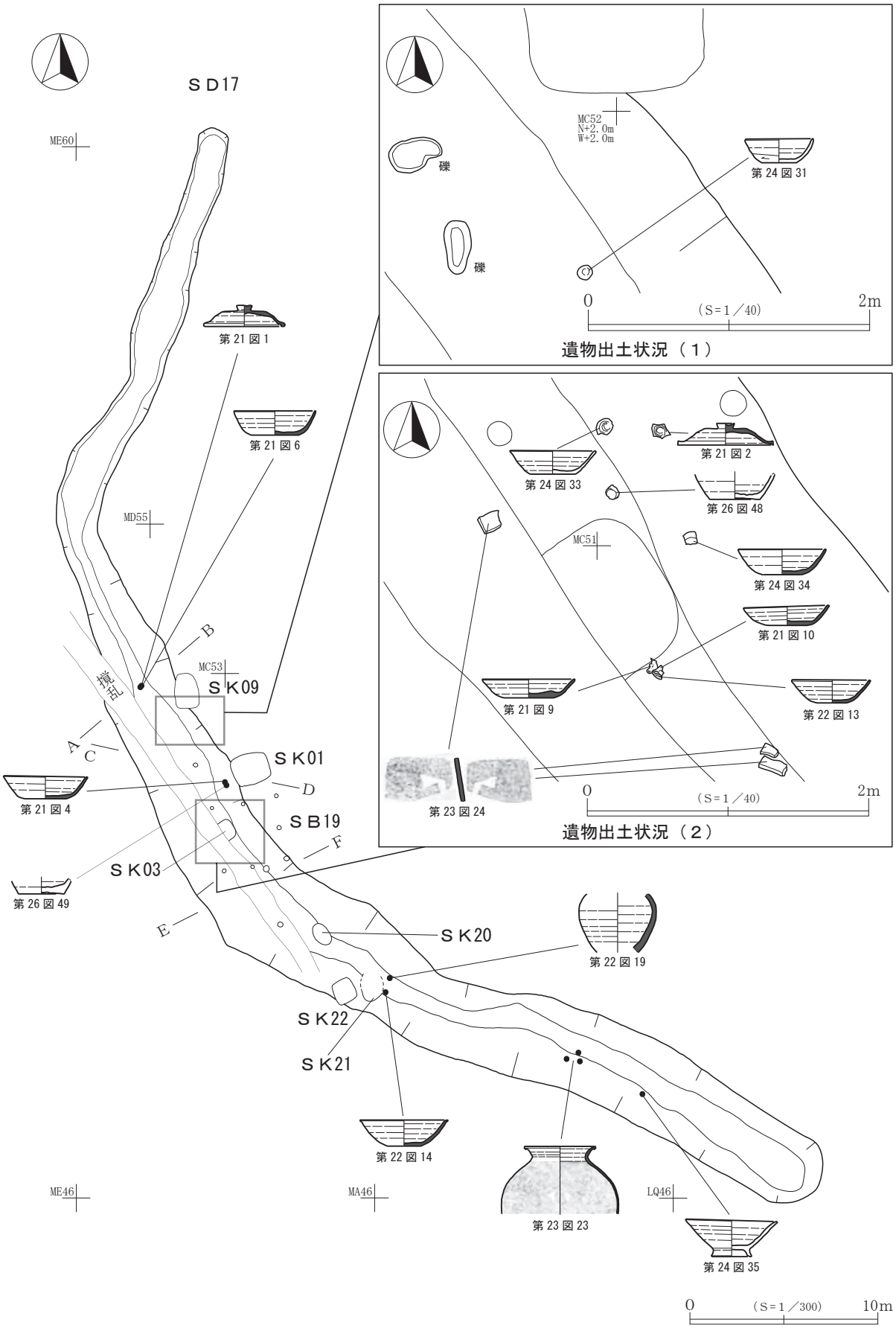
番号	グリッド	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	土色	土性	しまり	粘性	混入物	重複関係 新＞旧	出土遺物	挿図
149	ＬＳ50	略円形	25	25	43	32.05	１暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜１％	—	土師器甕	—
							２褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中				
150	ＬＲ49 ＬＳ49	略楕円形	36	32	49	32.09	１褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
							２明褐色(7.5ＹＲ５/６)	SiL	中	中				
151	ＬＲ49	略円形	26	23	20	32.11	１褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜３％	—	—	—
							２灰黄褐色(10ＹＲ４/２)	SiL	弱	強				
152	ＬＴ49	略円形	33	30	34	32.12	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
153	ＬＳ49	略円形	29	25	28	32.18	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
154	ＬＳ49	略円形	26	25	10	32.24	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	土師器杯	—
155	ＬＳ49	円形	25	24	37	32.00	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—	—	—
156	ＬＴ49	円形	26	25	27	32.17	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１㎜２％	—	—	—
157	ＬＴ49	略円形	21	19	32	32.05	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
158	ＬＴ49	略円形	24	23	42	31.84	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
159	ＬＴ49	円形	25	25	22	31.98	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
160	ＬＴ49	円形	29	28	43	31.73	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	第27図63
161	ＬＴ49	略円形	25	25	39	31.80	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器杯	—
162	ＬＴ49	略円形	28	28	49	31.83	暗灰黄色(2.5ＹＲ５/２)	SiL	中	中	炭粒:φ３～５㎜１％	—	土師器甕	—
163	ＬＳ53	略円形	24	21	26	32.95	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
164	ＬＲ53	略楕円形	33	31	28	33.03	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
165	ＬＲ54	略楕円形	29	28	29	33.04	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器杯	—
166	ＬＲ54	略楕円形	28	24	20	33.17	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	土師器杯	—
167	ＬＲ53	略円形	24	23	39	32.92	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
168	ＬＲ53	円形	23	22	47	32.85	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	内黒土師器	—
169	ＬＲ53	略楕円形	40	26	52	32.80	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
170	ＬＲ53	略円形	22	22	48	32.84	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
171	ＬＱ53	略円形	25	25	45	32.87	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
172	ＬＲ54	略円形	20	20	33	33.00	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
173	ＬＲ54	円形	21	21	34	32.96	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
174	ＬＱ53	略円形	28	27	41	32.76	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
175	ＬＱ53	略円形	30	30	53	32.69	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
176	ＬＱ53	円形	17	16	34	32.84	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
177	ＬＱ54	略楕円形	38	29	43	32.84	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
178	ＬＱ54	円形	18	18	15	33.08	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
179	ＬＱ54	略円形	23	22	25	32.96	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
180	ＬＱ53	略円形	30	29	41	32.79	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
181	ＬＱ53	円形	19	19	52	32.63	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
182	ＬＱ54	略円形	35	34	70	32.57	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
183	ＬＱ53	略楕円形	96	56	40	32.77	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
184	ＬＱ53	略楕円形	28	23	44	32.72	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
185	ＬＱ53	略円形	29	28	57	32.59	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
186	ＬＱ53	略円形	37	35	10	33.08	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
187	ＬＱ53	略円形	32	31	38	32.80	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
188	ＬＱ53	円形	44	42	41	32.75	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
189	ＬＱ53	略楕円形	35	29	27	32.87	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
190	ＬＱ54	略円形	23	22	53	32.69	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
192	ＬＱ54	円形	32	30	27	32.89	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
193	ＬＱ53	略楕円形	30	26	33	32.84	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
194	ＬＱ53	略円形	25	23	23	32.83	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
195	ＬＱ53	略円形	31	29	35	32.80	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
196	ＬＱ54	円形	20	20	37	32.74	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
197	ＬＰ54 ＬＱ54	略楕円形	19	17	39	32.71	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
198	ＬＰ54	円形	19	17	34	32.74	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
199	ＬＰ54	略円形	25	21	35	32.72	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
200	ＬＰ53	略楕円形	26	21	45	32.59	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	土師器甕	—
201	ＬＰ53	略円形	28	26	36	32.63	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—

第５表　柱穴一覧表（３）

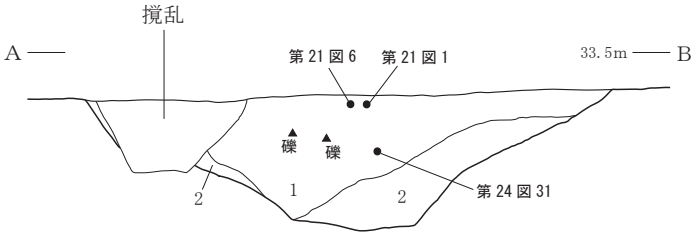
番号	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	底面標高	土色	土性	しまり	粘性	混入物	重複関係	出土遺物	挿図
			(cm)	(cm)	(cm)	(m)						新＞旧		
202	ＬＰ53	略円形	21	20	33	32.62	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
203	ＬＰ53	円形	21	21	19	32.80	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
204	ＬＰ53	円形	25	25	33	32.61	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
205	ＬＰ53	略楕円形	46	22	41	32.53	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
206	ＬＰ53	略楕円形	29	24	33	32.64	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
207	ＬＰ53	略楕円形	49	18	43	32.62	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
208	ＬＰ53	略円形	28	27	38	32.71	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
209	ＬＰ53	略楕円形	22	21	42	32.68	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
210	ＬＰ53	略円形	35	34	39	32.63	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
211	ＬＰ53	円形	25	25	35	32.65	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
213	ＬＳ52	円形	25	24	35	32.95	褐色(10ＹＲ４/６)	SiL	強	弱		—	—	—
214	ＬＲ52	略楕円形	36	25	44	32.88	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
215	ＬＲ52	略円形	26	25	77	32.54	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
217	ＬＲ52	円形	22	22	40	32.84	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
218	ＬＲ52	略楕円形	29	20	47	32.76	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
219	ＬＱ52	円形	19	18	56	32.57	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	土師器坏甕	—
220	ＬＱ52	略円形	25	23	28	32.79	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
221	ＬＱ52	略円形	21	19	34	32.64	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
222	ＬＱ52	略楕円形	26	20	28	32.70	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
223	ＬＱ51	略円形	28	25	40	32.54	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
224	ＬＲ53	略円形	19	19	41	32.78	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
225	ＬＰ52	円形	18	18	19	32.85	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
226	ＬＰ52	略楕円形	29	27	31	32.71	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
227	ＬＰ52	略円形	22	21	23	32.56	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
228	ＬＰ52	円形	26	24	22	32.63	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
229	ＬＱ51	円形	25	25	41	32.54	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
230	ＬＰ51 ＬＱ51	略円形	24	23	22	32.70	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
231	ＬＰ51	略円形	28	26	18	32.76	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
232	ＬＰ51	略円形	34	34	35	32.34	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
233	ＬＰ51	略円形	38	37	27	32.38	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
234	ＬＰ51	略楕円形	54	49	30	32.33	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
235	ＬＯ51	円形	24	23	38	32.27	にぶい黄褐色(10ＹＲ５/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
236	ＬＯ51	円形	27	26	32	32.35	にぶい黄褐色(10ＹＲ５/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
237	ＬＯ51	略円形	26	24	23	32.36	にぶい黄褐色(10ＹＲ５/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
238	ＬＯ51	略楕円形	23	19	41	32.20	にぶい黄褐色(10ＹＲ５/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
239	ＬＯ51	略円形	30	29	29	32.33	にぶい黄褐色(10ＹＲ５/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
240	ＬＯ51	略円形	33	31	43	32.31	にぶい黄褐色(10ＹＲ５/４)	SiL	中	中	炭粒:φ１㎜１％	—	—	—
241	ＬＲ53	略楕円形	61	45	58	32.67	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
242	ＬＱ54	円形	28	28	53	32.74	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
243	ＬＱ54	略楕円形	48	30	53	32.73	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
244	ＬＲ54	略円形	15	13	20	33.09	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
245	ＬＱ54	略円形	24	24	57	32.70	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
246	ＬＱ53	略円形	19	17	44	32.75	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
247	ＬＱ53	円形	20	18	47	32.71	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
248	ＬＱ53	略円形	19	19	58	32.63	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
249	ＬＲ54	略円形	19	17	55	32.70	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
250	ＬＱ53	略円形	20	19	56	32.62	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
251	ＬＱ54	略楕円形	22	19	61	32.63	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
252	ＬＱ54	略楕円形	15	13	21	33.05	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
253	ＬＱ53	略円形	26	25	23	32.92	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
254	ＬＱ53	円形	17	17	53	32.63	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
255	ＬＲ54	略楕円形	23	16	56	32.67	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
256	ＬＰ51	略円形	17	16	22	32.56	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
257	ＬＰ51	略円形	26	25	55	32.25	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—

第６表　柱穴一覧表（４）

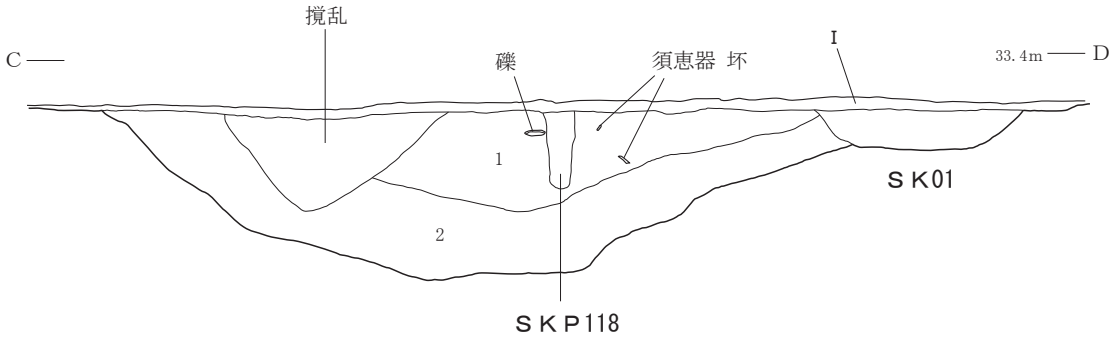
番号	グリッド	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	土色	土性	しまり	粘性	混入物	重複関係 新＞旧	出土遺物	挿図
258	ＬＰ51	略円形	33	32	50	32.32	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜２％	—	—	—
259	ＭＢ49	円形	19	18	35	32.43	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜２％	—	—	—
260	ＬＱ52	円形	26	26	52	32.52	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
261	ＬＲ51	略円形	42	31	68	32.32	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
262	ＬＰ51	略円形	24	23	46	32.65	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
263	ＬＲ52	略円形	30	30	15	33.19	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
264	ＬＳ52	円形	38	37	30	32.89	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
265	ＬＴ49	略楕円形	26	26	42	32.03	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
266	ＬＴ49	略円形	27	26	31	32.09	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
267	ＬＴ49	略楕円形	33	33	32	31.98	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
268	ＬＴ49	略楕円形	41	24	37	31.94	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
269	ＬＱ52	略円形	17	15	29	31.99	—	—	—	—	—	—	—	—
270	ＬＴ50	略楕円形	39	36	29	32.29	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	＜ＳＫＰ271	土師器甕	—
271	ＬＴ49 ＬＴ50	略楕円形	62	58	27	32.31	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	＞ＳＫＰ270	須恵器坏	第27図64
272	ＬＴ49	略円形	27	24	12	32.29	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
273	ＬＴ49	円形	28	28	11	32.22	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
274	ＬＳ49	略円形	19	18	19	32.23	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
275	ＬＳ49	略円形	17	17	16	32.24	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
276	ＬＳ50	略楕円形	37	26	38	32.52	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
277	ＬＳ50	略円形	24	23	29	32.54	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
278	ＬＳ50	略円形	27	26	22	32.50	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
279	ＬＳ50	略円形	23	20	32	32.25	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
280	ＬＳ50	円形	19	19	46	32.33	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
281	ＬＳ50	略円形	28	27	43	32.38	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
282	ＬＳ50	略円形	24	22	28	32.50	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
283	ＬＳ50	略円形	22	21	25	32.45	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
284	ＬＳ50	略円形	26	24	40	32.28	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
285	ＬＳ50	略円形	23	20	25	32.26	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
286	ＬＳ49	略円形	36	34	17	32.27	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
287	ＬＳ49	略楕円形	24	20	23	32.11	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
288	ＬＳ49	略円形	26	25	43	31.93	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
290	ＬＰ55	略楕円形	34	30	42	32.78	褐色(10ＹＲ４/４)	SiL	中	弱	炭粒:φ１㎜２％	—	土師器甕	—
291	ＬＰ54	略円形	23	20	26	32.89	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器杯	—
292	ＬＰ54	略円形	22	20	32	32.80	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	須恵器杯	—
293	ＬＰ54	略円形	25	22	45	32.59	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
294	ＬＰ54	略楕円形	34	24	37	32.66	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
295	ＬＰ54	円形	20	19	35	32.63	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
296	ＬＰ54	略円形	36	31	53	32.45	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
297	ＬＯ53	略円形	33	32	30	32.32	にぶい黄褐色(10ＹＲ４/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
298	ＬＰ54	略楕円形	20	18	40	32.58	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
299	ＬＰ54	円形	20	19	37	32.58	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
300	ＬＱ54	略円形	22	17	21	32.89	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ１～３㎜１％	—	土師器甕	—
311	ＬＮ48	円形	19	19	37	31.73	にぶい黄褐色(10ＹＲ４/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜３％	—	—	—
318	ＬＮ48	円形	25	25	43	31.94	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	弱	中	炭粒:φ１～３㎜１％	—	—	—
319	ＬＮ48	略楕円形	18	16	48	31.52	灰黄褐色(10ＹＲ４/２)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—
320	ＬＲ52	略円形	24	21	54	32.58	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—	—	—
321	ＬＲ52	略円形	21	21	55	32.55	暗褐色(10ＹＲ３/４)	SiL	強	弱	炭粒:φ３～５㎜１％	—	—	—
322	ＬＴ49	略円形	16	16	39	31.85	暗褐色(10ＹＲ３/３)	SiL	中	中	炭粒:φ１～３㎜２％	—	—	—

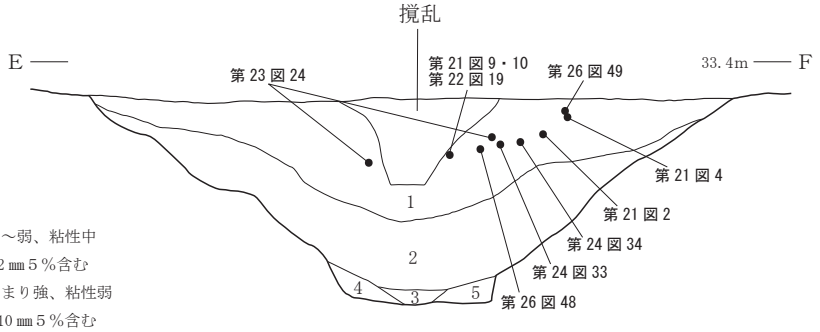


第 10 図　ＳＤ17 大溝跡



遺物点は、遺物レベルを
投影したものである。



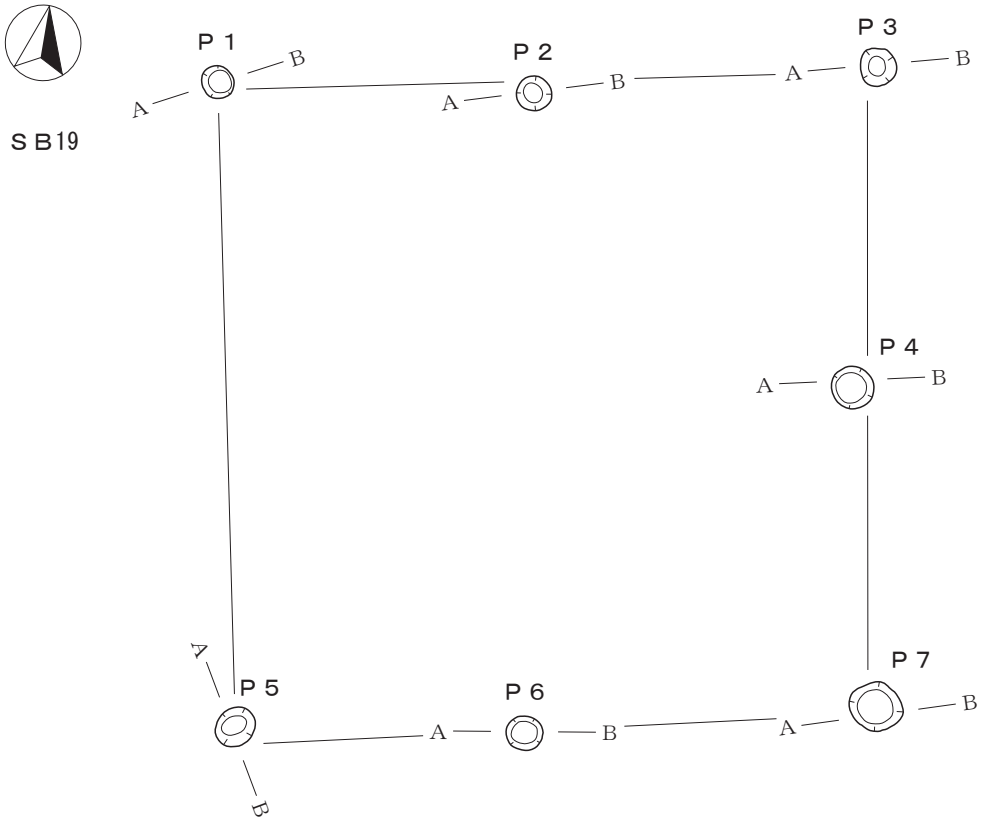


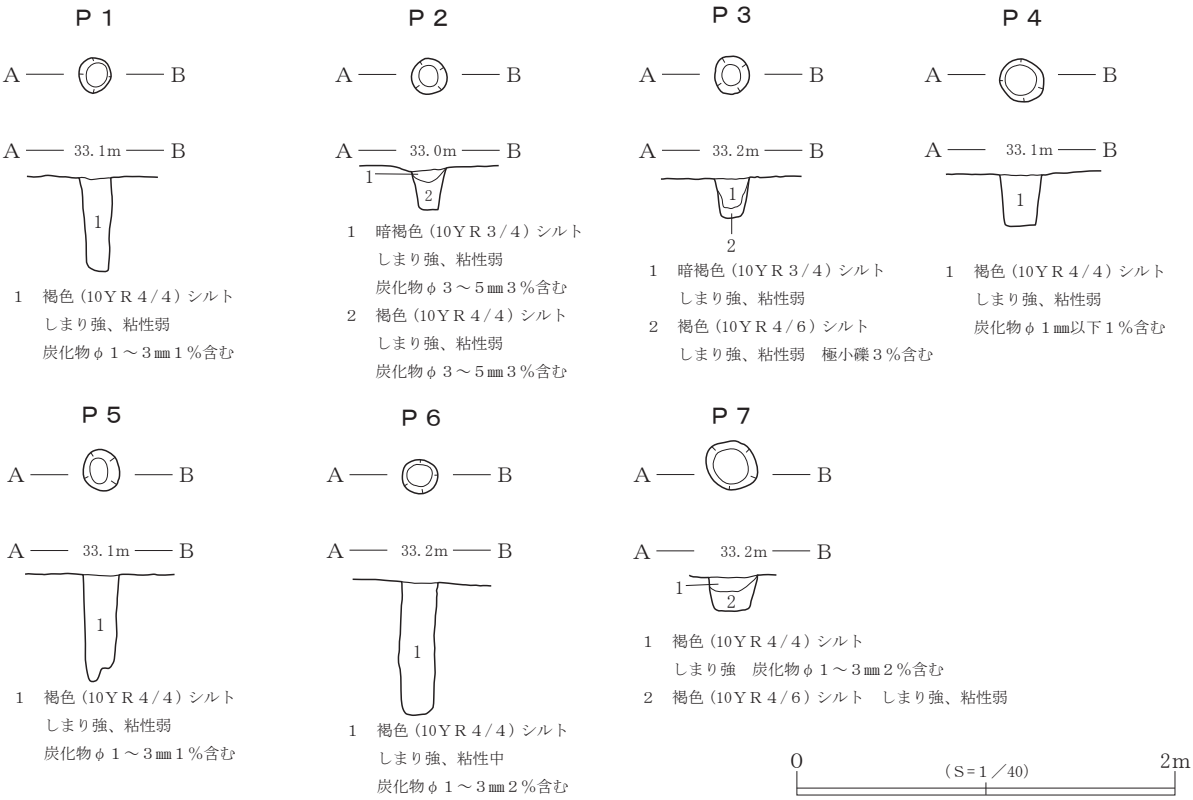
1　暗褐色（10ＹＲ３/４）シルト　しまり中～弱、粘性中
　地山塊φ５～８㎜３％　炭化物φ５～12㎜５％含む
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ５/４）シルト　しまり強、粘性弱
　地山塊φ５～10㎜２％　炭化物φ５～10㎜５％含む
3　褐色（10ＹＲ４/４）シルト　しまり中、粘性中～強
　地山塊φ５～15㎜３％　炭化物φ５～８㎜３％含む
4　灰黄色（2.5Ｙ６/２）シルト　しまり中、粘性中～強
　地山塊φ15～30㎜５％　炭化物φ３～５㎜２％含む
5　暗灰黄色（2.5Ｙ５/２）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ10～15㎜３％　炭化物φ３～５㎜２％　砂礫φ15～30㎜５％含む

遺物点は、遺物レベルを
投影したものである。

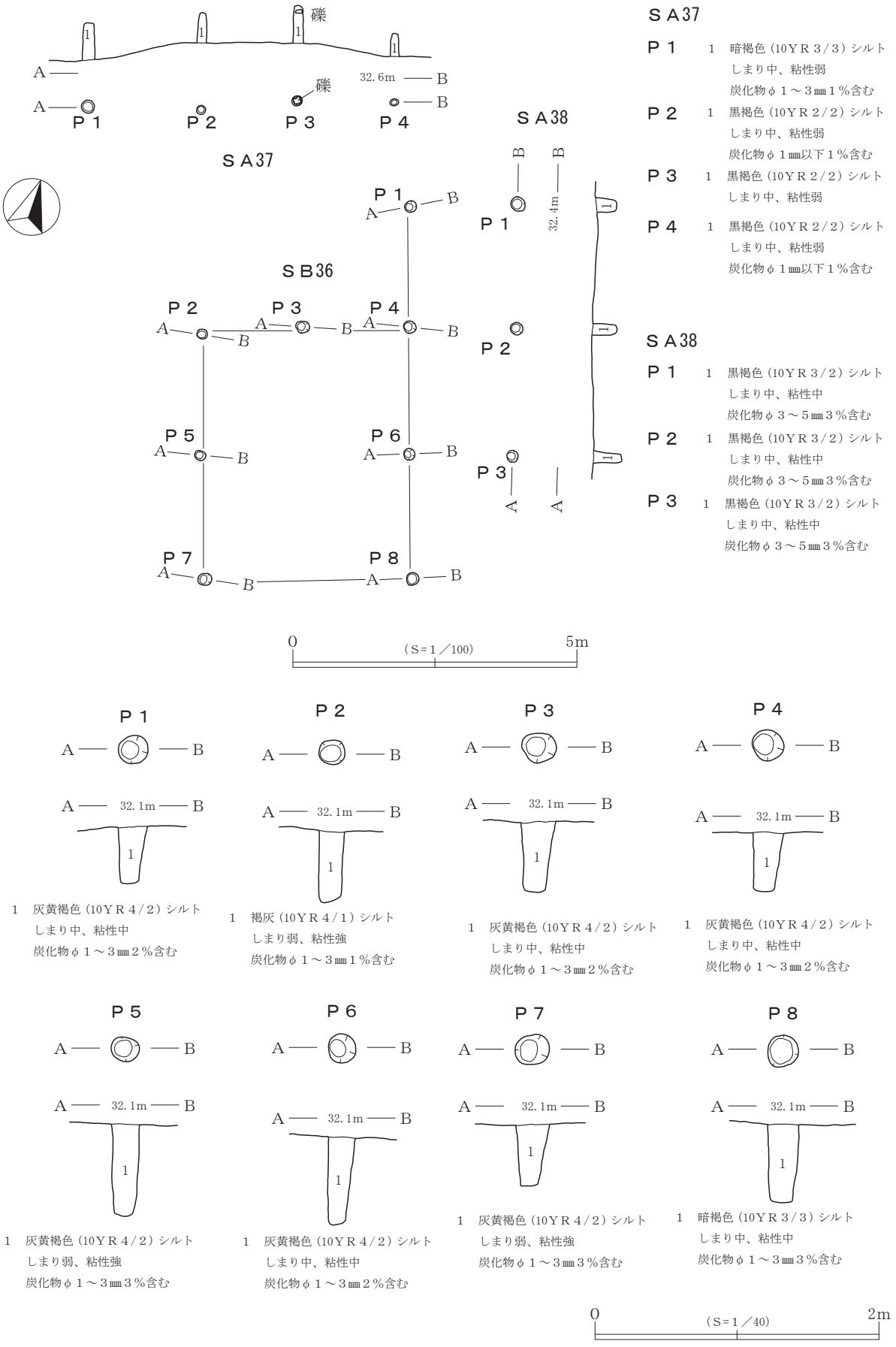
0　（S＝1／60）　2m

第 11 図　ＳＤ17 大溝跡断面図





第 12 図　ＳＢ19 掘立柱建物跡



ＳＡ37

Ｐ１　1　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト
しまり中、粘性弱
炭化物φ１～３㎜１％含む

Ｐ２　1　黒褐色（10ＹＲ２/２）シルト
しまり中、粘性弱
炭化物φ１㎜以下１％含む

Ｐ３　1　黒褐色（10ＹＲ２/２）シルト
しまり中、粘性弱

Ｐ４　1　黒褐色（10ＹＲ２/２）シルト
しまり中、粘性弱
炭化物φ１㎜以下１％含む

ＳＡ38

Ｐ１　1　黒褐色（10ＹＲ３/２）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ３～５㎜３％含む

Ｐ２　1　黒褐色（10ＹＲ３/２）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ３～５㎜３％含む

Ｐ３　1　黒褐色（10ＹＲ３/２）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ３～５㎜３％含む

Ｐ１　1　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ１～３㎜２％含む

Ｐ２　1　褐灰（10ＹＲ４/１）シルト
しまり弱、粘性強
炭化物φ１～３㎜１％含む

Ｐ３　1　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ１～３㎜２％含む

Ｐ４　1　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ１～３㎜２％含む

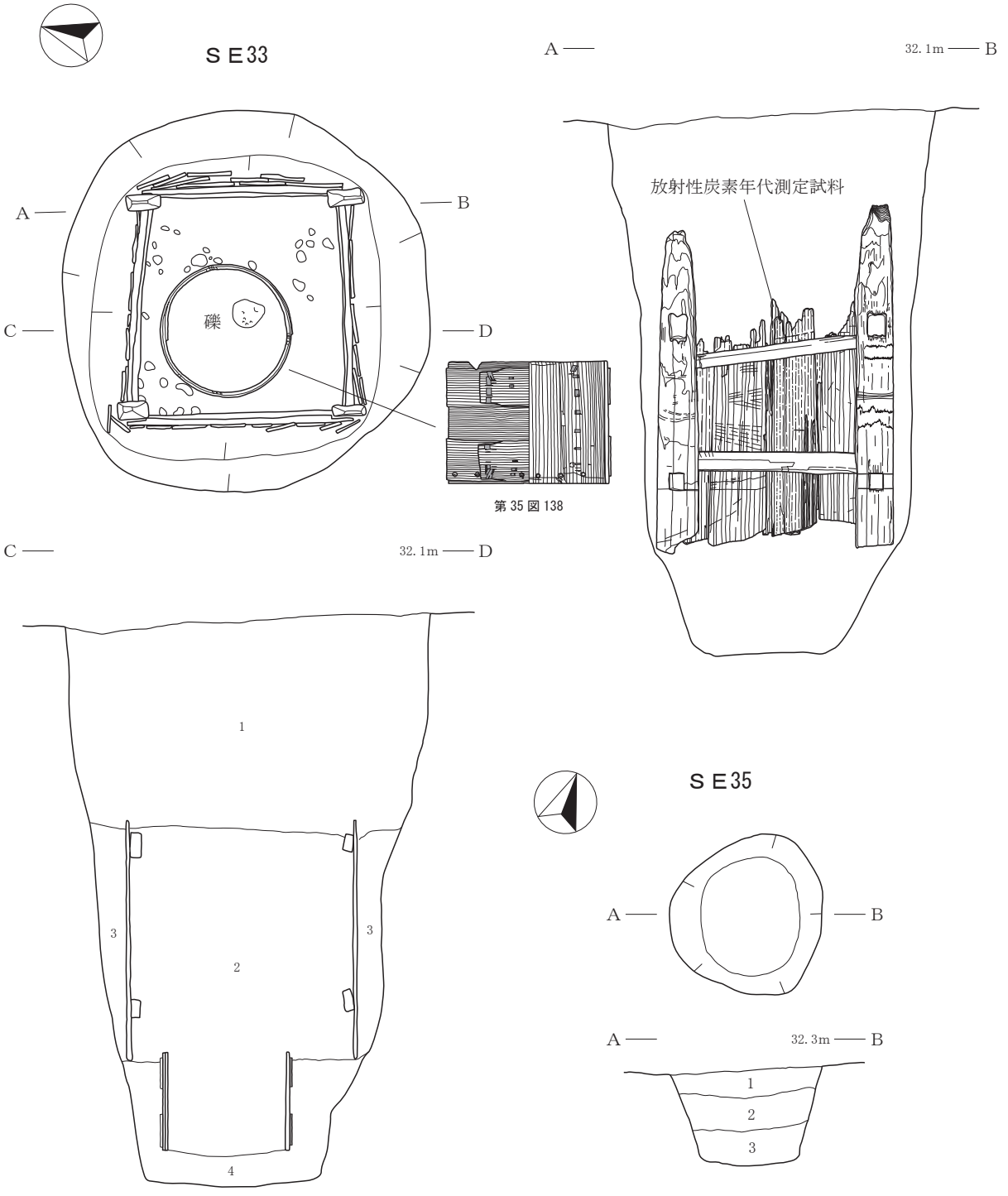
Ｐ５　1　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
しまり弱、粘性強
炭化物φ１～３㎜３％含む

Ｐ６　1　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ１～３㎜２％含む

Ｐ７　1　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
しまり弱、粘性強
炭化物φ１～３㎜３％含む

Ｐ８　1　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト
しまり中、粘性中
炭化物φ１～３㎜３％含む

第 13 図　ＳＢ36 掘立柱建物跡、ＳＡ37・38 柱穴列

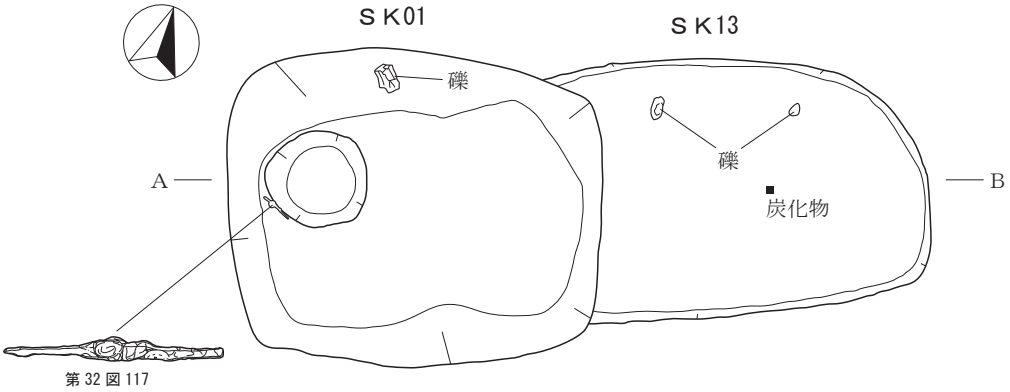


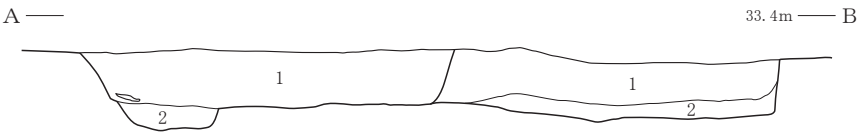
1　灰色（7.5ＹＲ４/１）シルト～クレイ　しまり中、粘性中
　炭化物φ10 ～ 15 ㎜５％含む
2　暗オリーブ灰（2.5Ｇ Ｙ４/１）シルト　しまり弱、粘性弱
3　褐灰色（10Ｙ Ｒ４/１）シルト～サンド　しまり中、粘性弱
　黒褐色（10Ｙ Ｒ３/１）シルト塊φ13 ～ 20 ㎜５％
4　暗オリーブ灰（2.5Ｇ Ｙ４/１）サンド　しまり弱

1　にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ４/３）シルト　しまり弱、粘性中
　地山塊φ８～ 15 ㎜５％　炭化物φ５～８㎜３％含む
2　灰黄褐色（10Ｙ Ｒ４/２）シルト　しまり弱、粘性中　地山塊φ８～ 18 ㎜５％
3　褐灰色（10Ｙ Ｒ４/３）シルト～サンド　しまり弱、粘性弱　地山塊φ８～ 13 ㎜３％

ＳＥ33　0　（S＝1／20）　1m
ＳＥ35　0　（S＝1／40）　2m

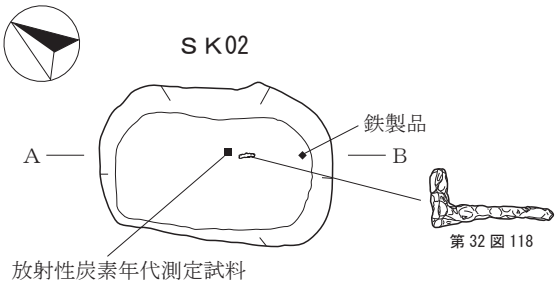
第 14 図　ＳＥ33・35 井戸跡

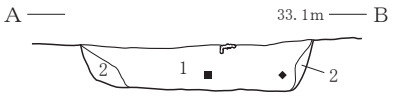




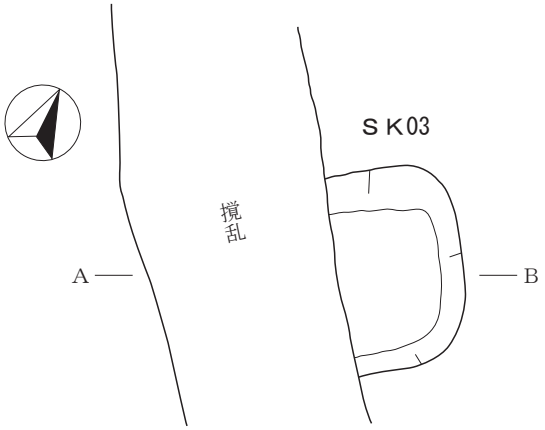
ＳＫ01
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ５～ 13 ㎜ 30%　炭化物φ 10 ～ 15 ㎜３%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４）シルト　しまり強、粘性中
　地山塊φ８～ 14 ㎜ 10%　炭化物φ５～８㎜３%含む

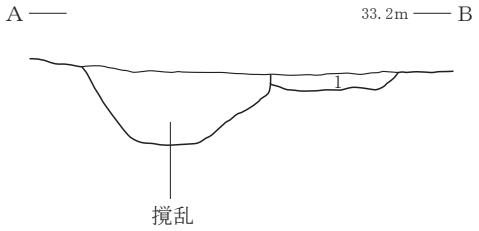
ＳＫ13
1　灰黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり強、粘性中
　地山塊φ 13 ～ 25 ㎜ 30%　炭化物φ８～ 15 ㎜５%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ８～ 12 ㎜５%　炭化物φ５～８㎜２%含む



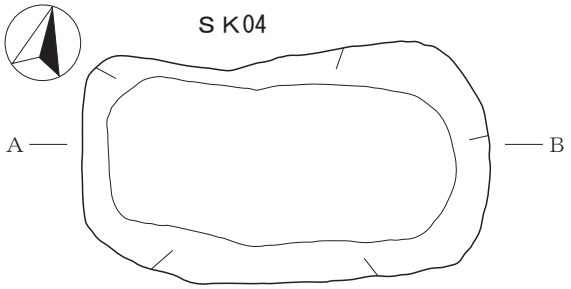


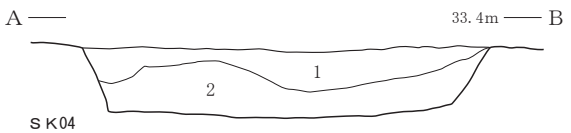
ＳＫ02
1　暗褐色（10ＹＲ３/４）シルト　しまり中、粘性弱
　地山塊φ 10 ～ 13 ㎜ 30%　炭化物φ８～ 15 ㎜５%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４）シルト　しまり中、粘性弱



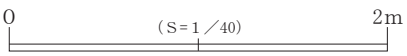


ＳＫ03
1　暗褐色（10ＹＲ３/４）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ８～ 12 ㎜５%　炭化物φ５～８㎜３%含む

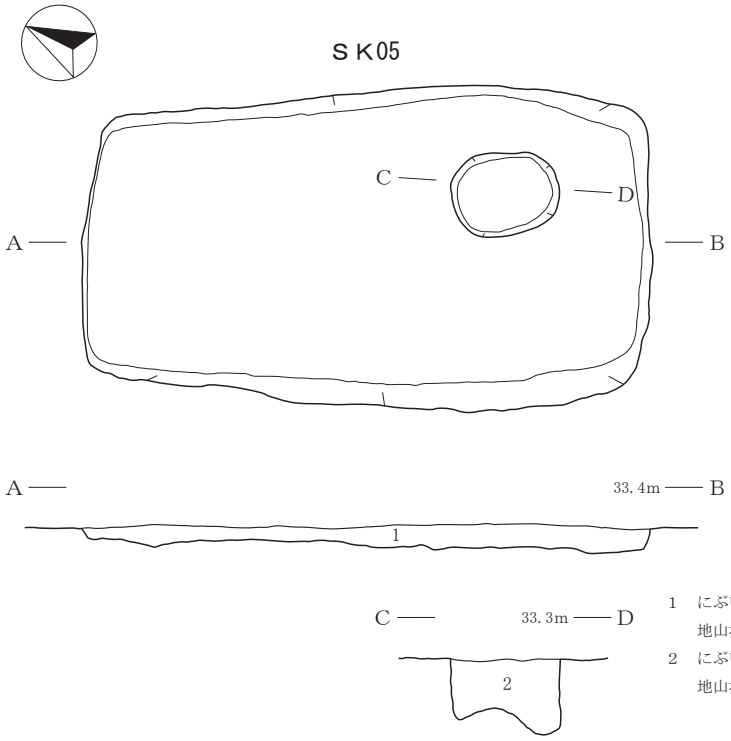




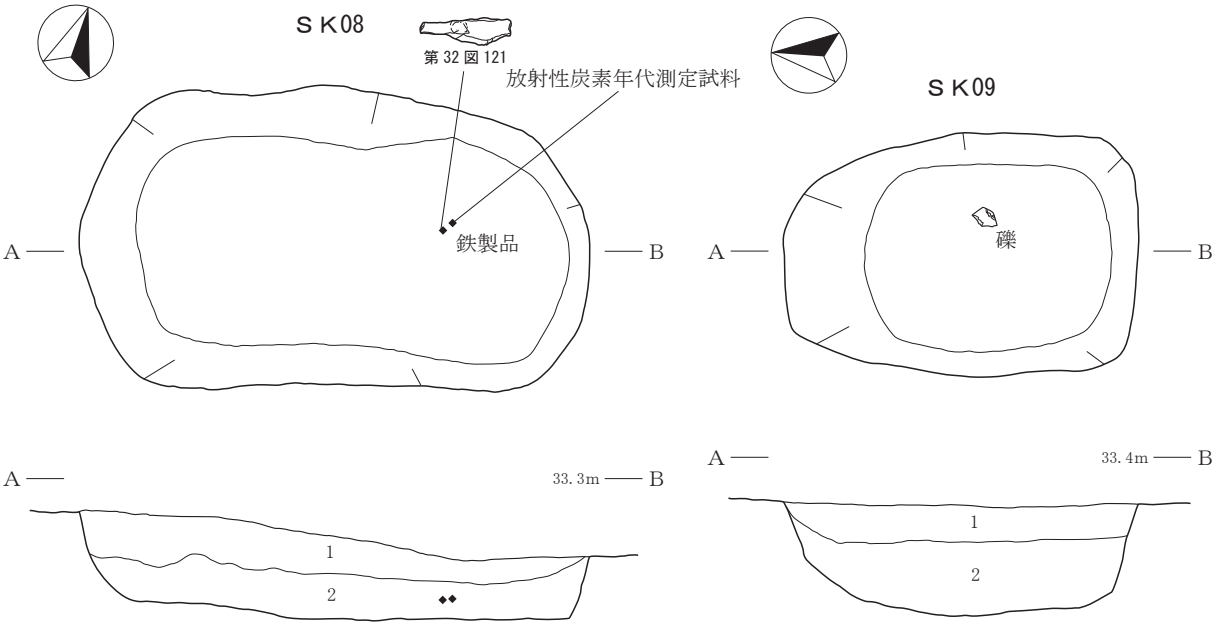
ＳＫ04
1　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト　しまり強、粘性弱
　地山塊φ 10 ～ 23 ㎜ 15%　炭化物φ８～ 20 ㎜５%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ 15 ～ 35 ㎜ 30%　炭化物φ８～ 10 ㎜３%含む



第 15 図　ＳＫ 01・02・03・04・13 土坑



1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ８～ 45 ㎜ 30%　炭化物φ５～ 13 ㎜５%含む
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ５～ 13 ㎜ 10%　炭化物φ３～５㎜３%含む

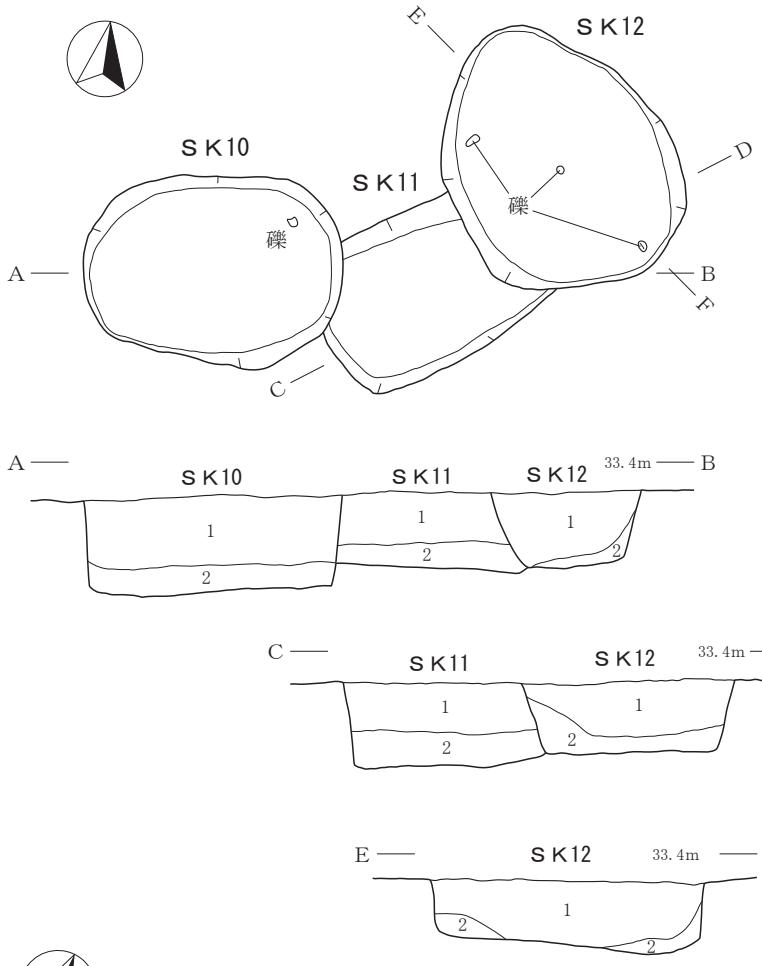


1　暗褐色（10ＹＲ３/４）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ５～ 18 ㎜ 30%　炭化物φ５～ 12 ㎜５%含む
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ５～ 13 ㎜ 15%　炭化物φ３～５㎜３%含む

1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり強、粘性中
　地山塊φ５～８㎜ 10%　炭化物φ３～５㎜３%含む
2　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト　しまり強、粘性中
　地山塊φ８～ 10 ㎜５%

0　（S＝1／40）　2m

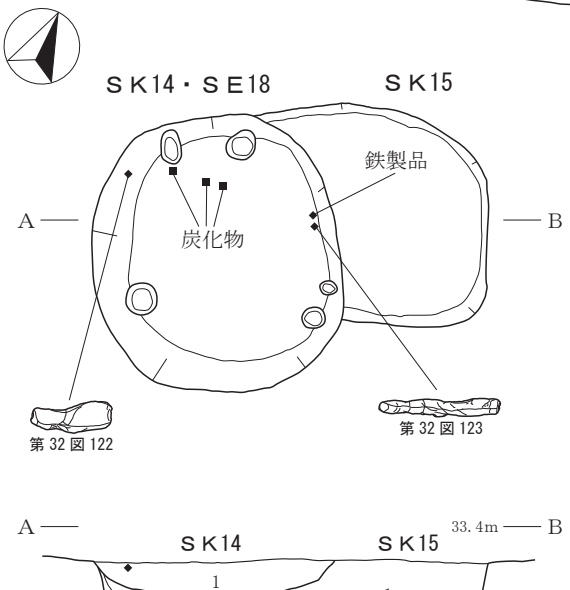
第 16 図　ＳＫ05・08・09 土坑

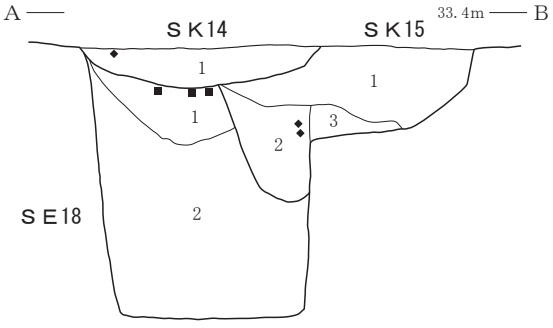


SK10
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト
　しまり強、粘性中　地山塊φ10 ～ 40㎜ 15%
　炭化物φ５～８㎜３%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４～４/６）シルト
　しまり中、粘性中　地山塊φ10 ～ 30㎜ 10%
　炭化物φ２～３㎜２%含む

SK11
1　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト
　しまり強、粘性弱　地山塊φ５～ 12㎜ 15%
　炭化物φ８～ 13㎜５%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４～４/６）シルト
　しまり中、粘性中　地山塊φ５～ 10㎜５%
　炭化物φ２～３㎜２%含む

SK12
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト
　しまり強、粘性中　地山塊φ10 ～ 35㎜ 30%
　炭化物φ５～ 10㎜５%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４）シルト
　しまり中、粘性中　地山塊φ５～８㎜５%
　炭化物φ３～５㎜２%含む

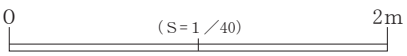




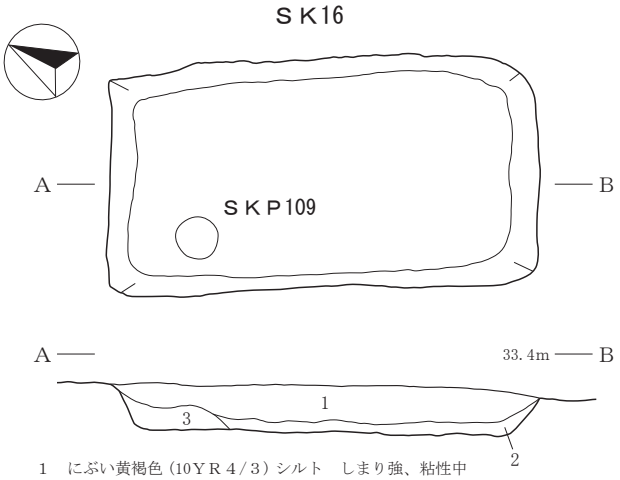
SK14
1　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト
　しまり強、粘性弱　地山塊φ５～ 11㎜３%
　炭化物φ３～５㎜２%含む

SK15
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト
　しまり中～強、粘性中　地山塊φ10 ～ 22㎜ 30%
　炭化物φ５～ 10㎜３%含む
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ５/３）シルト
　しまり弱、粘性中～強　地山塊φ10 ～ 35㎜ 35%
　炭化物φ５～ 10㎜２%含む
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ５/４）シルト～クレイ
　しまり弱、粘性強　地山塊φ35 ～ 50㎜ 50%
　炭化物φ３～５㎜２%含む

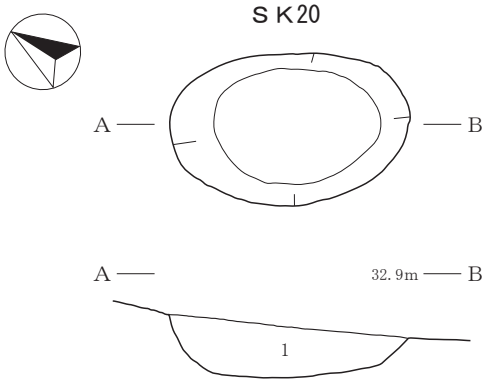
SE18
1　黒褐色（10ＹＲ３/２）シルト
　しまり中、粘性中　地山塊φ20 ～ 28㎜ 15%
　炭化物φ５～ 10㎜３%含む
2　暗褐色（10ＹＲ３/４）シルト
　しまり弱、粘性中　地山塊φ５～ 17㎜ 10%
　炭化物φ５～ 10㎜３%含む



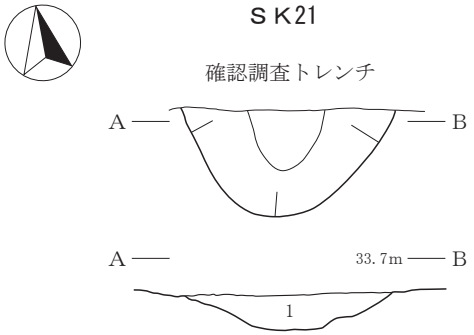
第 17 図　ＳＥ18 井戸跡、ＳＫ10・11・12・14・15 土坑



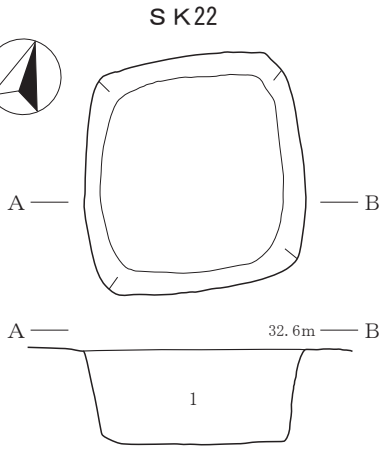
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり強、粘性中
　地山塊φ８～10㎜15%　炭化物φ３～５㎜３%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４）シルト～サンド　しまり弱、粘性中
　地山塊φ５～８㎜５%　炭化物φ３～５㎜２%含む
3　灰黄褐色（10ＹＲ４/２）シルト　しまり中、粘性中　地山塊φ８～23㎜５%



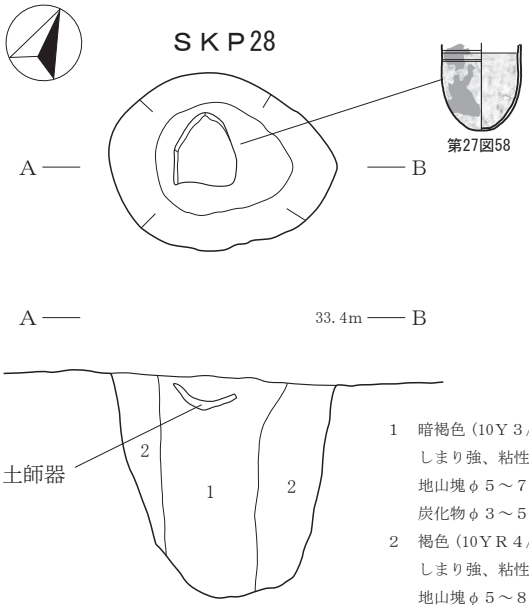
1　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト　しまり強、
　粘性弱　地山塊φ10～15㎜５%　炭化物φ２～５㎜２%含む



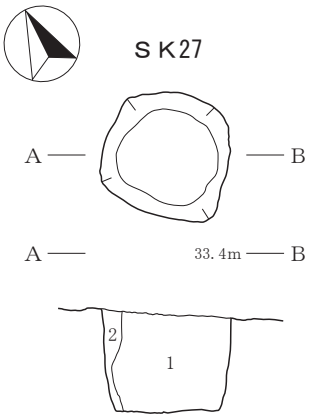
1　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト　しまり強
　地山塊φ８～10㎜５% 炭化物φ１～２㎜２%含む



1　暗褐色（10ＹＲ３/３）シルト　しまり中
　粘性弱　地山塊φ15～20㎜15%　炭化物φ２～５㎜３%含む



1　暗褐色（10Ｙ３/３）シルト
　しまり強、粘性中
　地山塊φ５～７㎜３%
　炭化物φ３～５㎜５%含む
2　褐色（10ＹＲ４/４～４/６）シルト
　しまり強、粘性弱
　地山塊φ５～８㎜５%

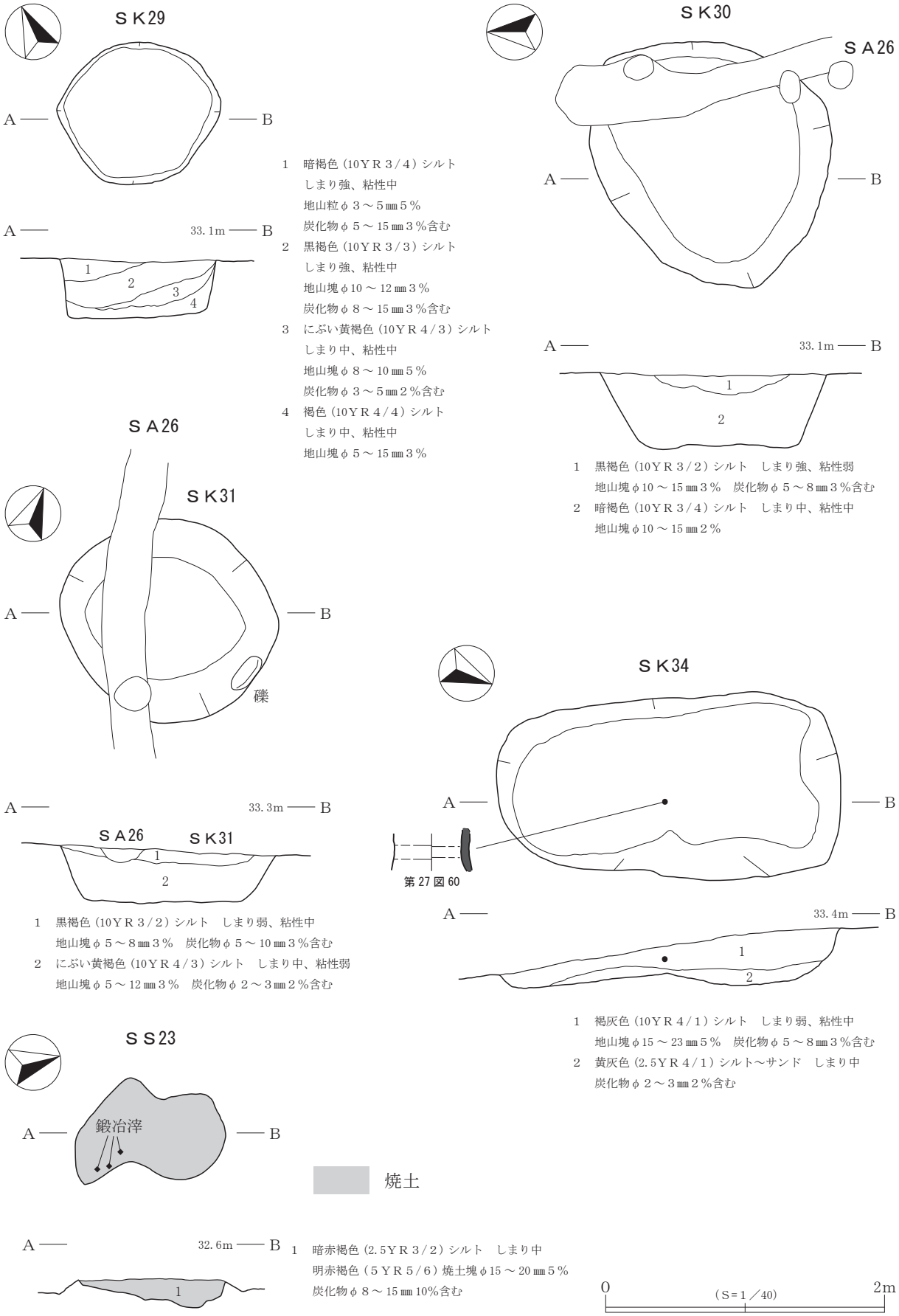


1　暗褐色（10ＹＲ３/４）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ10～15㎜５%　炭化物φ３～５㎜３%含む
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ10～13㎜８%　炭化物φ３～５㎜２%含む

ＳＫＰ28　0　（S＝1／20）　50cm

ＳＫ16・20・21・22・27　0　（S＝1／40）　2m

第18図　ＳＫ16・20・21・22・27土坑、ＳＫＰ28柱穴



1　暗褐色（10ＹＲ３／４）シルト
　しまり強、粘性中
　地山粒φ３～５㎜５％
　炭化物φ５～15㎜３％含む
2　黒褐色（10ＹＲ３／３）シルト
　しまり強、粘性中
　地山塊φ10～12㎜３％
　炭化物φ８～15㎜３％含む
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）シルト
　しまり中、粘性中
　地山塊φ８～10㎜５％
　炭化物φ３～５㎜２％含む
4　褐色（10ＹＲ４／４）シルト
　しまり中、粘性中
　地山塊φ５～15㎜３％

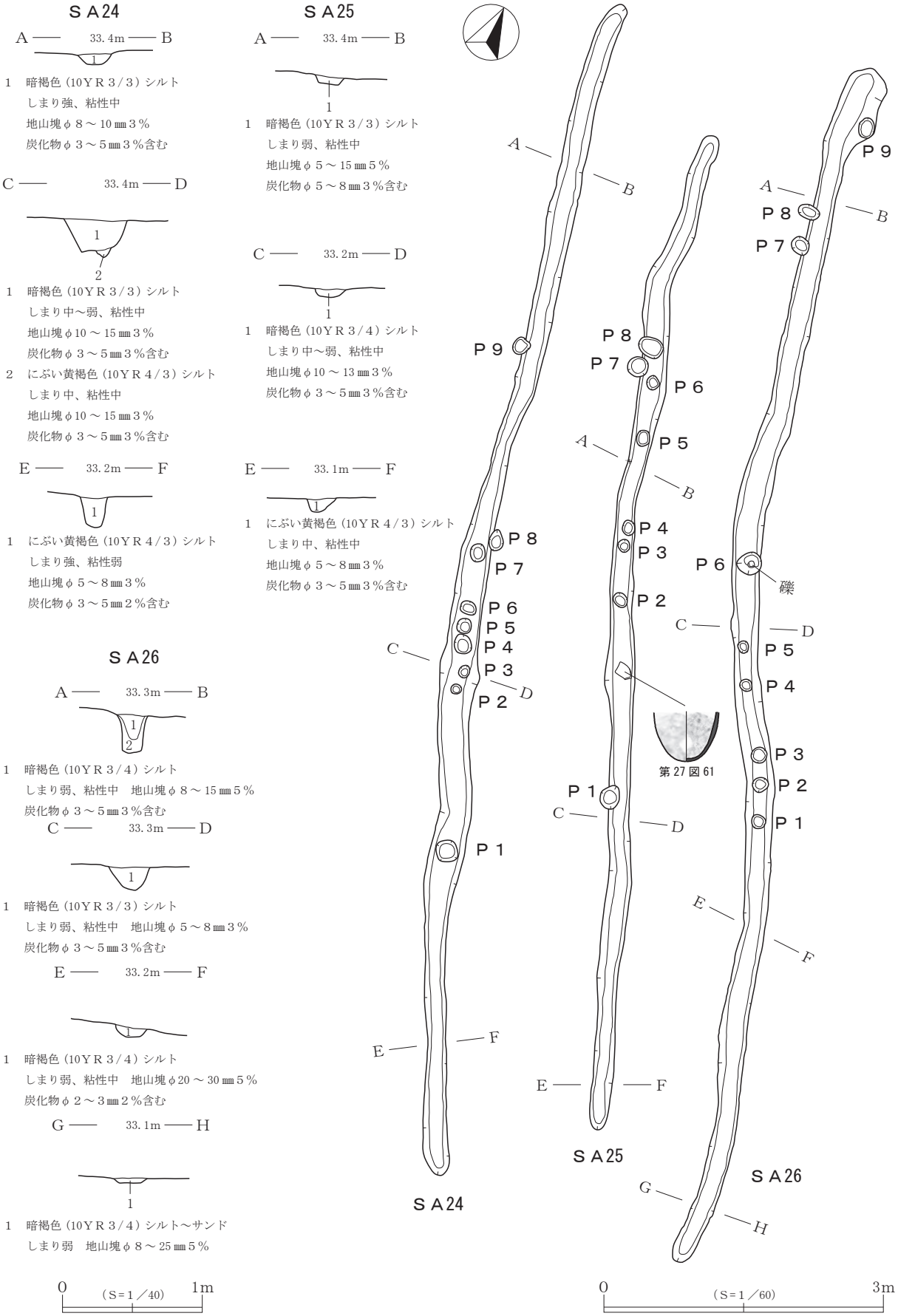
1　黒褐色（10ＹＲ３／２）シルト　しまり強、粘性弱
　地山塊φ10～15㎜３％　炭化物φ５～８㎜３％含む
2　暗褐色（10ＹＲ３／４）シルト　しまり中、粘性中
　地山塊φ10～15㎜２％

1　黒褐色（10ＹＲ３／２）シルト　しまり弱、粘性中
　地山塊φ５～８㎜３％　炭化物φ５～10㎜３％含む
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）シルト　しまり中、粘性弱
　地山塊φ５～12㎜３％　炭化物φ２～３㎜２％含む

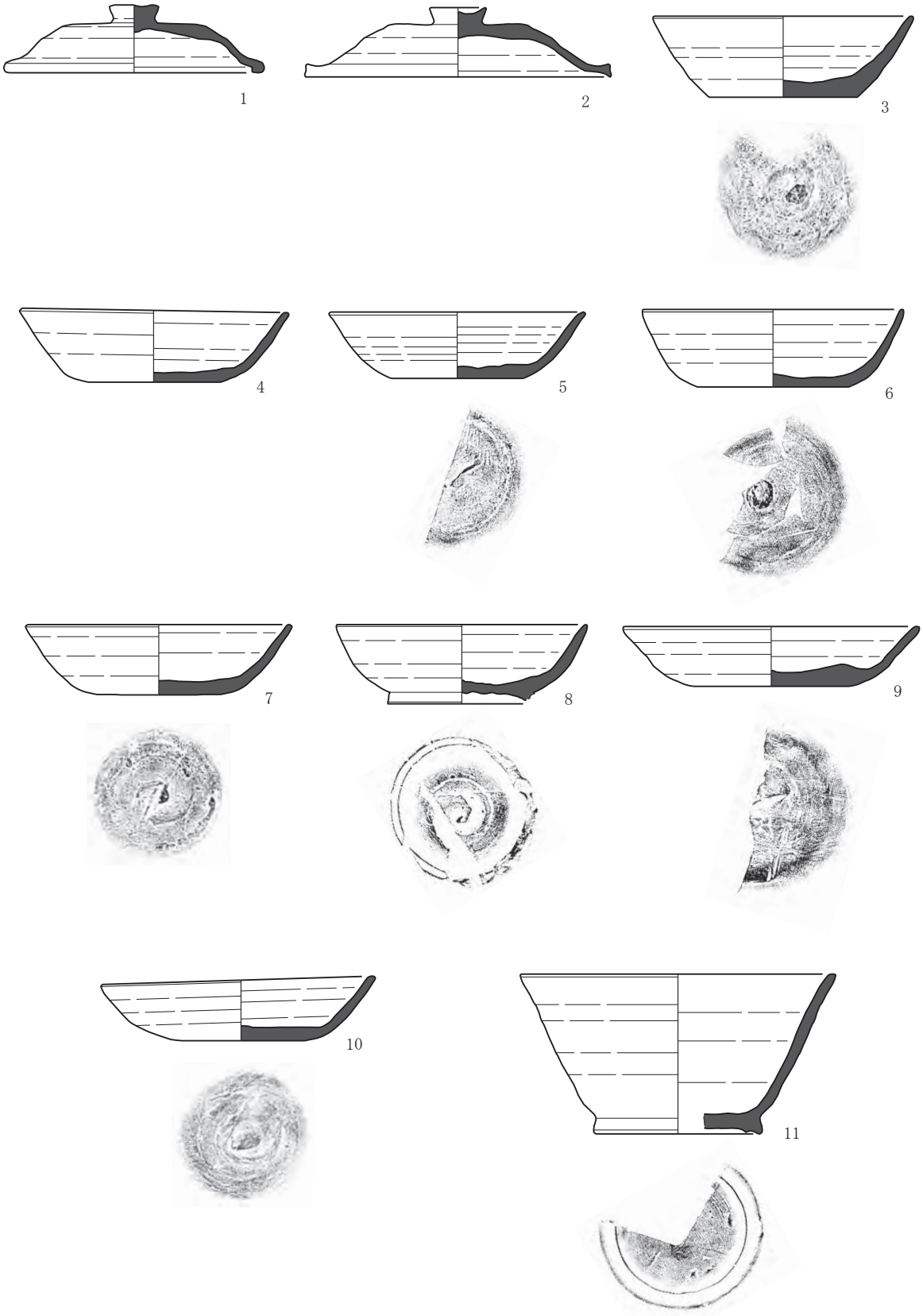
1　褐灰色（10ＹＲ４／１）シルト　しまり弱、粘性中
　地山塊φ15～23㎜５％　炭化物φ５～８㎜３％含む
2　黄灰色（2.5ＹＲ４／１）シルト～サンド　しまり中
　炭化物φ２～３㎜２％含む

1　暗赤褐色（2.5ＹＲ３／２）シルト　しまり中
　明赤褐色（５ＹＲ５／６）焼土塊φ15～20㎜５％
　炭化物φ８～15㎜10％含む

第 19 図　ＳＫ29・30・31・34 土坑、ＳＳ23 鍛冶関連遺構

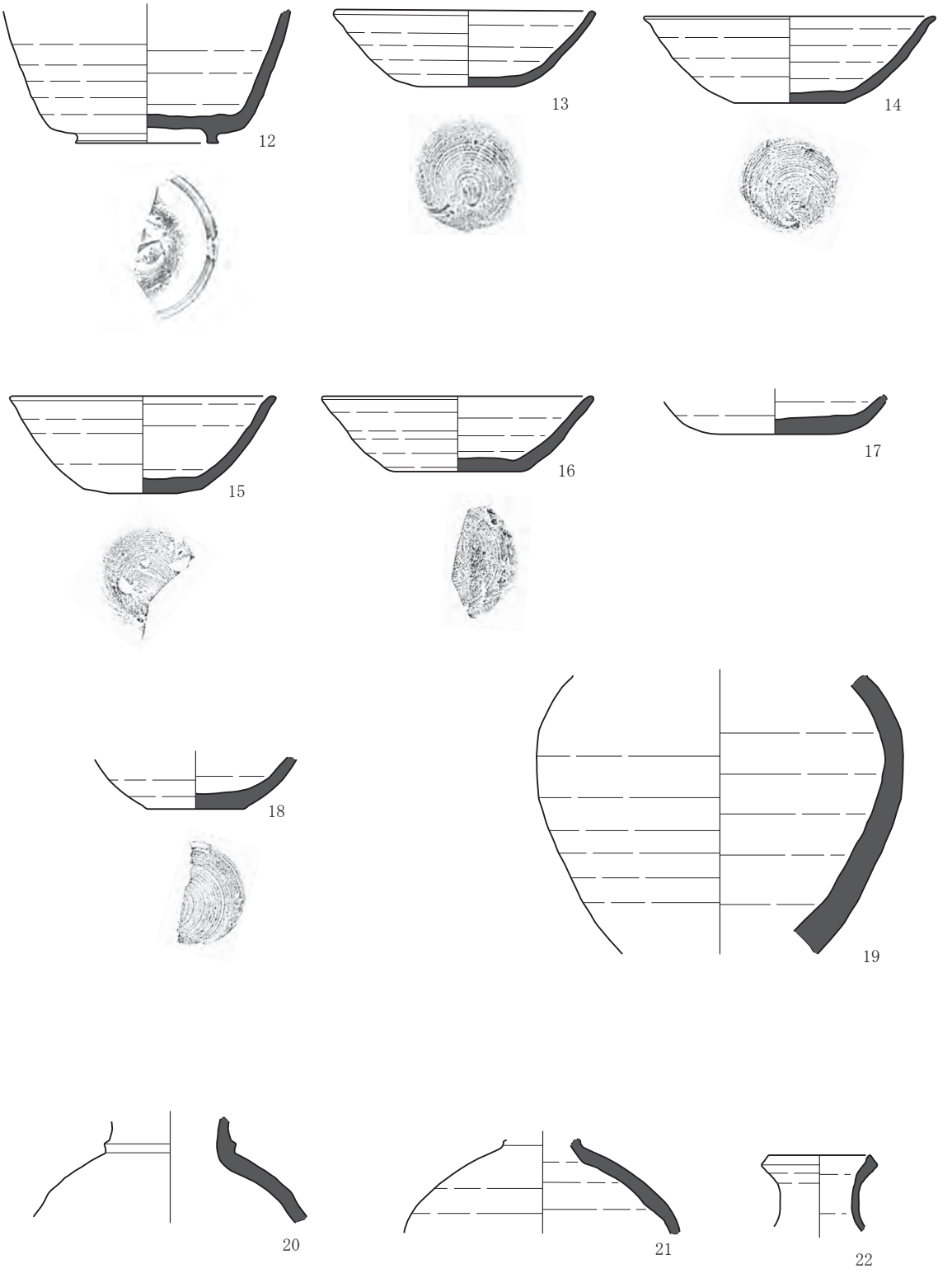


第20図　ＳＡ24・25・26柵跡



１～８・１１：ＳＤ１７
９：ＳＤ１７・ＳＫ０３　１０：ＳＤ１７・ＳＫ２２

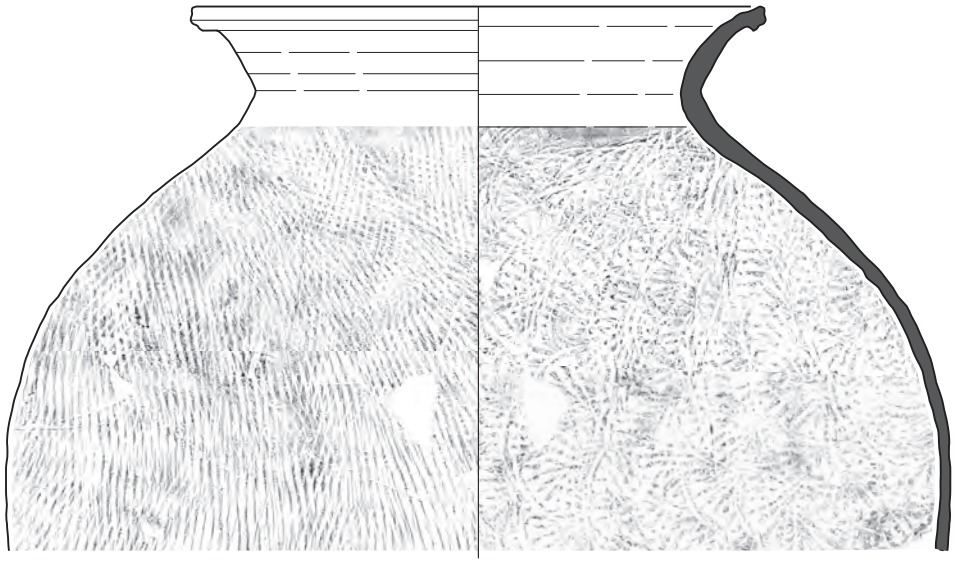
第 21 図　遺構内土器（１）



１２～２２：ＳＤ１７

0　(S=1/3)　10cm

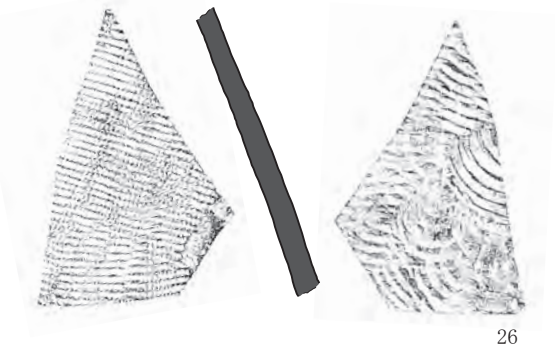
第 22 図　遺構内土器（２）



23

24

25

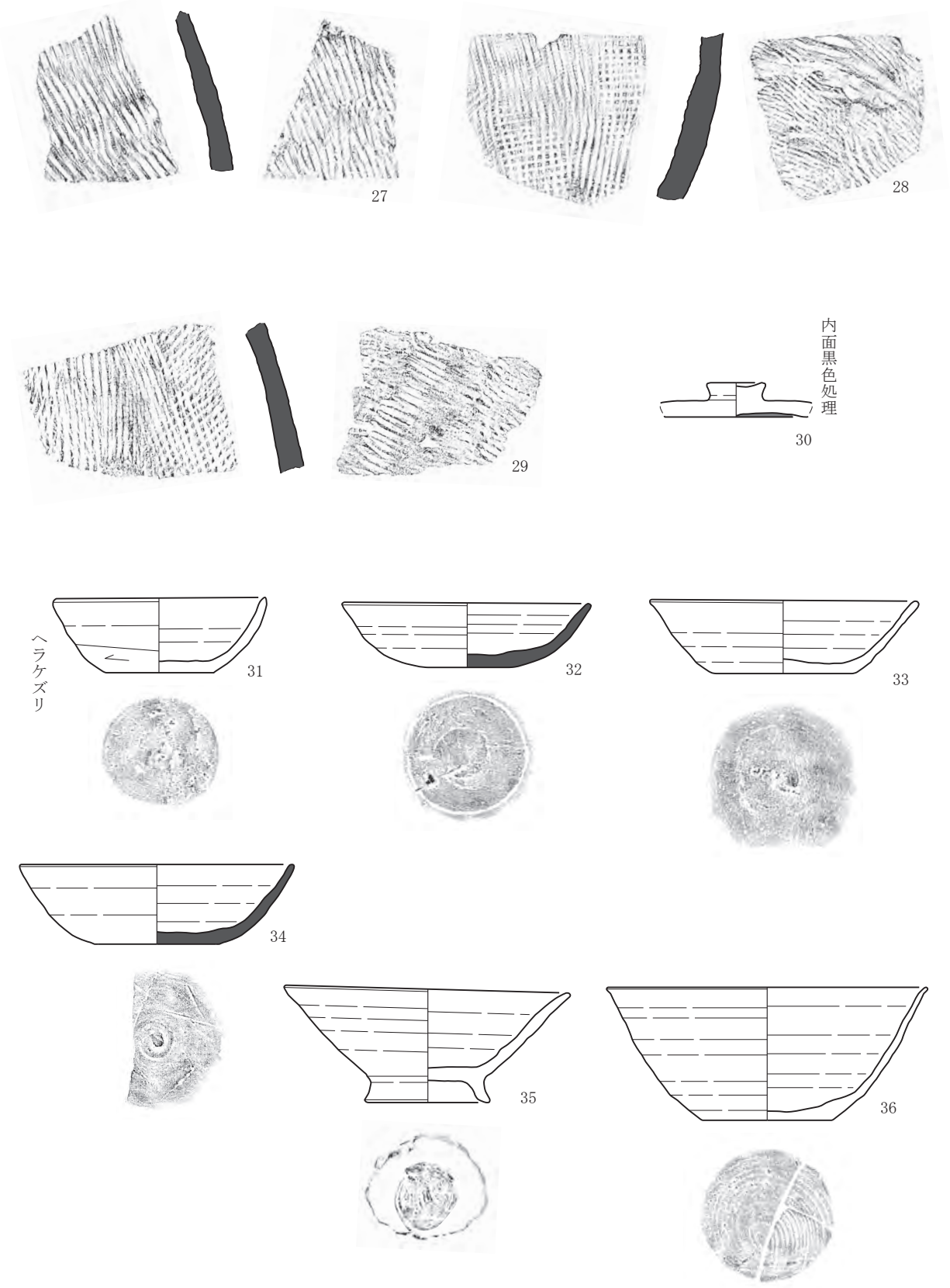


26

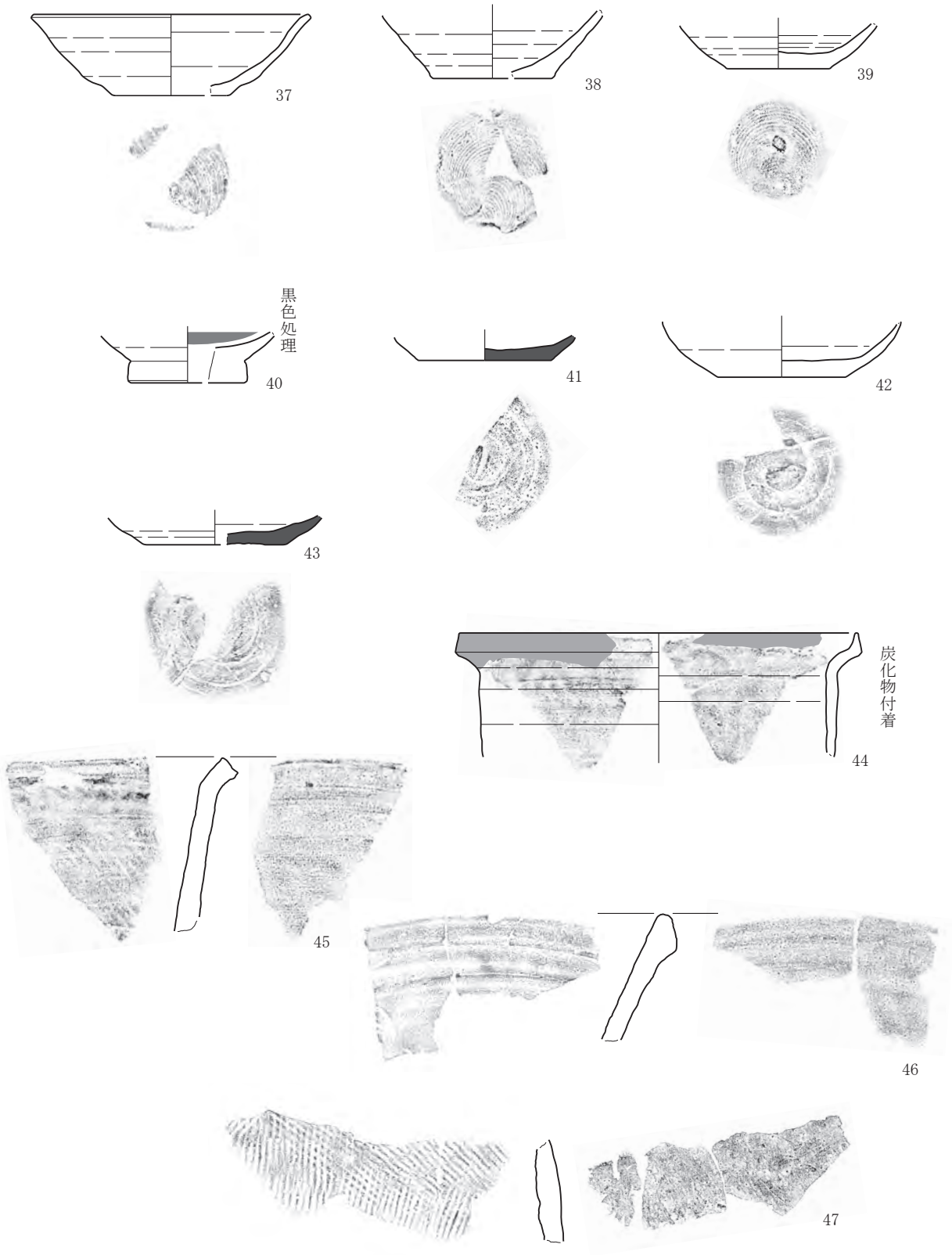
２３：ＳＤ１７・ＳＥ３５　２４：ＳＤ１７・ＳＥ３３
２５・２６：ＳＤ１７

23、24：0　（S=1/4）　10cm
25、26：0　（S=1/3）　10cm

第 23 図　遺構内土器（３）


27
28
29
内面黒色処理
30
ヘラケズリ
31
32
33
34
35
36
０２７～２９・３１・３２・３５・３６：ＳＤ１７
３０・３３・３４：ＳＤ１７・ＳＫ０３
0
(S=1/3)
10cm

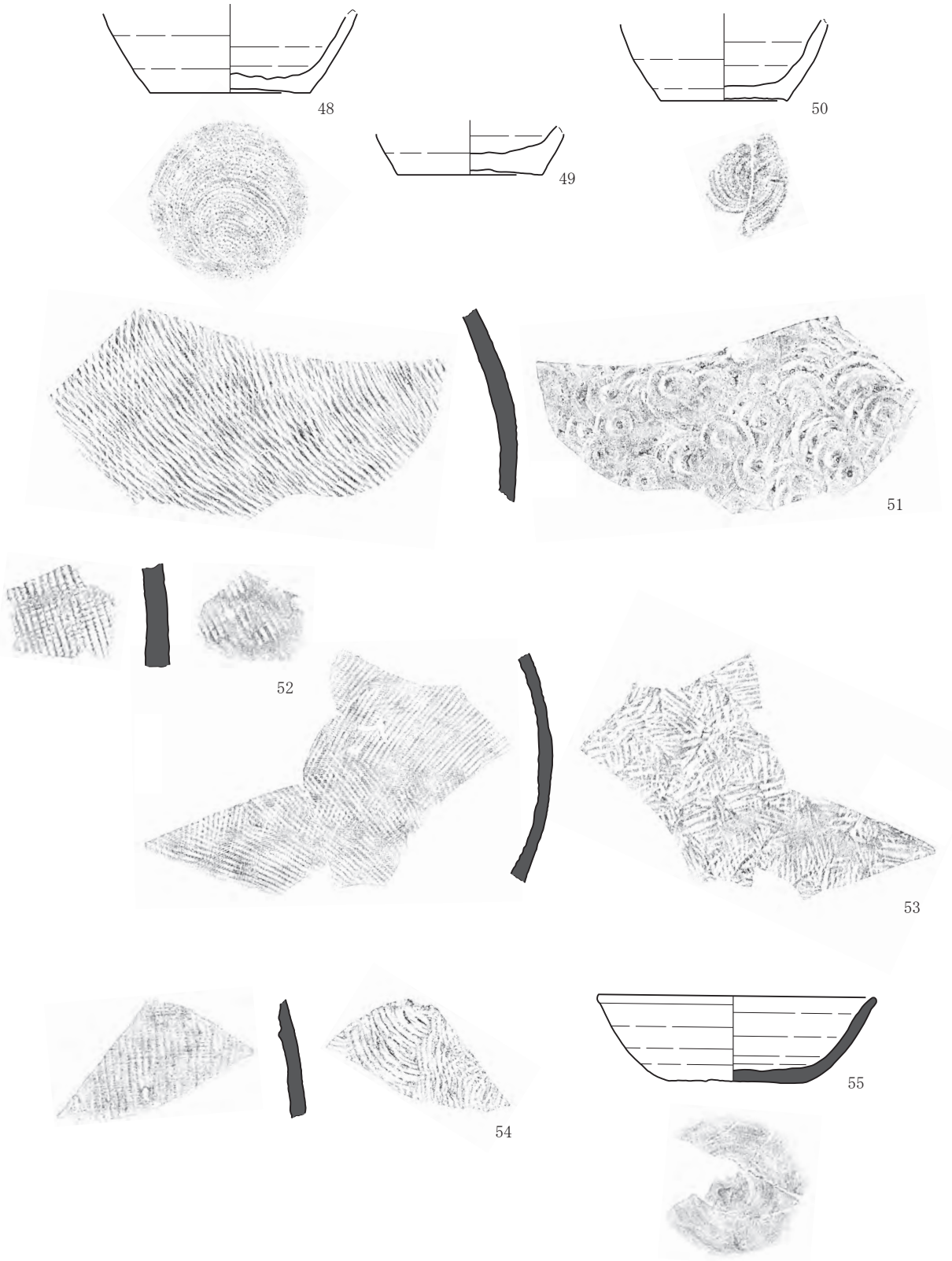
第 24 図　遺構内土器（４）



３７・３９～４２・４４～４７：ＳＤ１７
３８・４３：ＳＤ１７・ＳＫ０３

0　（S=1/3）　10cm

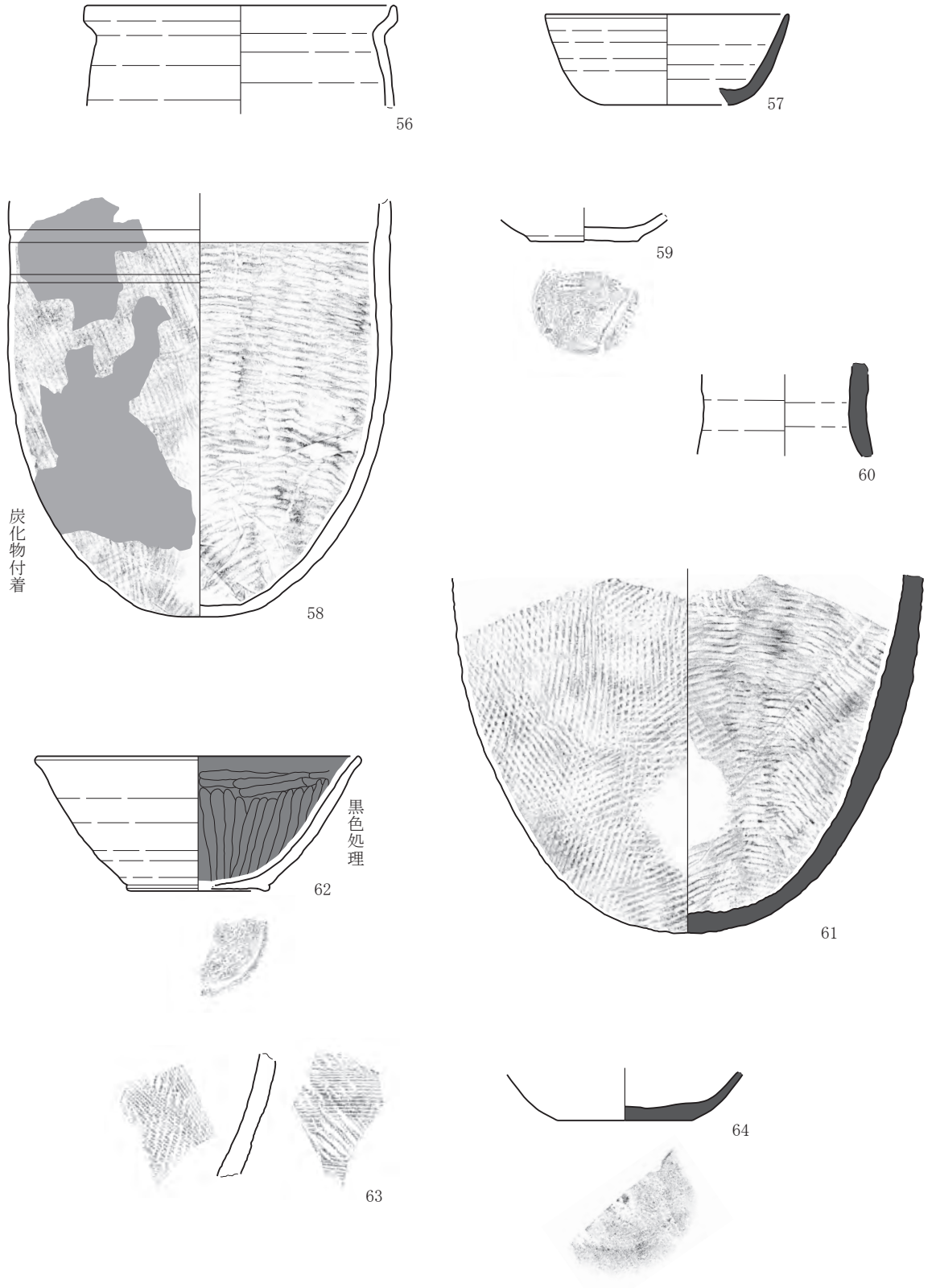
第 25 図　遺構内土器（５）



４８～５０：ＳＤ１７　５１・５２：ＳＥ３３
５３・５４：ＳＫ０３　５５：ＳＤ１７・ＳＫ０３

0　(S=1/3)　10cm

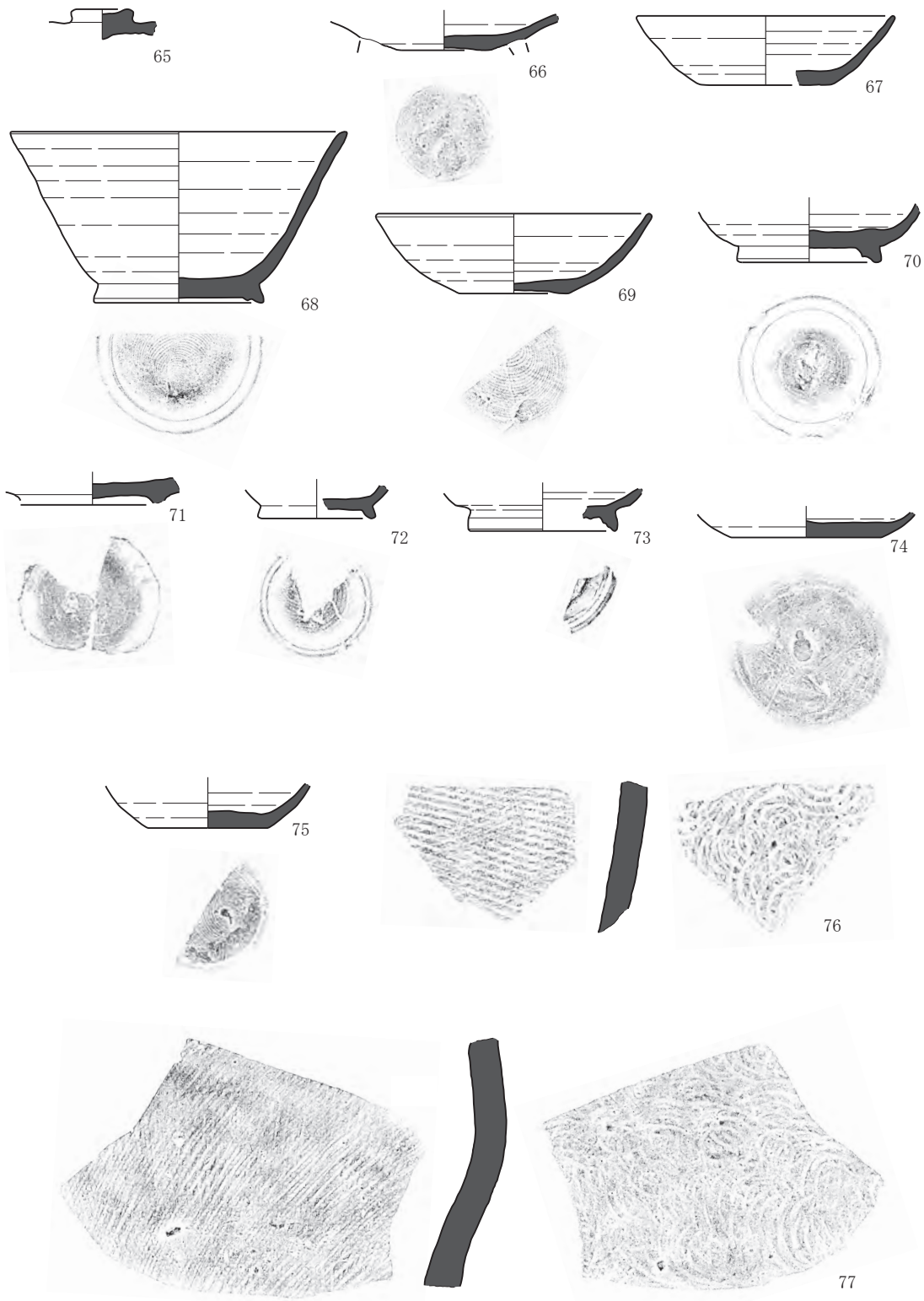
第 26 図　遺構内土器（６）



５６：ＳＫ０３　５７：ＳＫ０８　５８：ＳＫＰ２８　５９：ＳＫ２９　６０：ＳＫ３４
６１：ＳＡ２５　６２：ＳＫＰ１０７　６３：ＳＫＰ１６０　６４：ＳＫＰ２７１

0　(S=1/3)　10cm

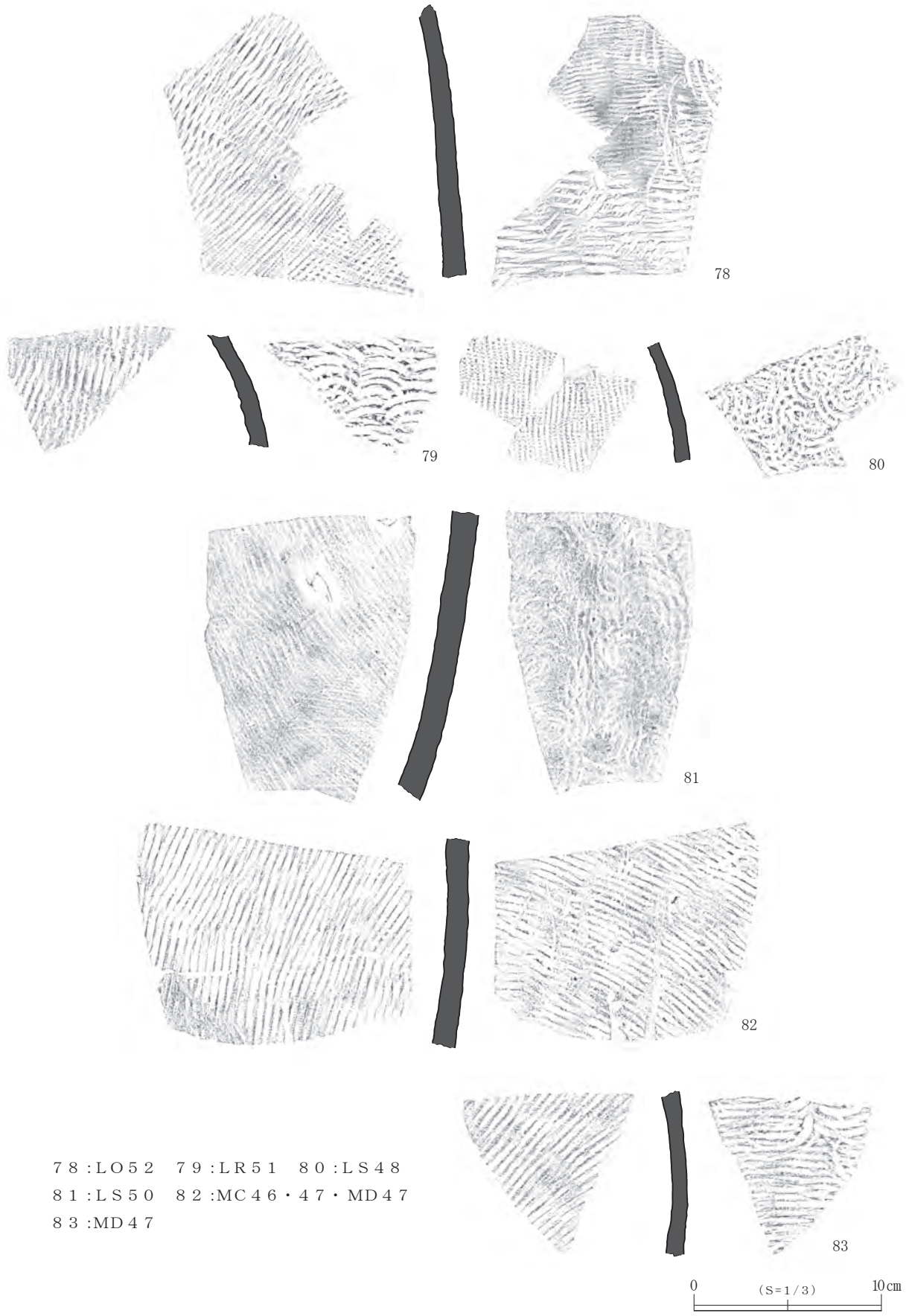
第 27 図　遺構内土器（７）



６５：ＬＱ４９　６６：ＭＥ４６　６７：ＬＴ５０　６８：ＭＤ４６・ＭＤ４７　６９：ＭＤ４７　７０：ＭＣ５１
７１：ＭＤ４９　７２：ＬＴ４７　７３：ＭＢ４６　７４：ＬＴ４９　７５：ＭＤ５７　７６：ＬＭ５０
７７：ＬＮ４６

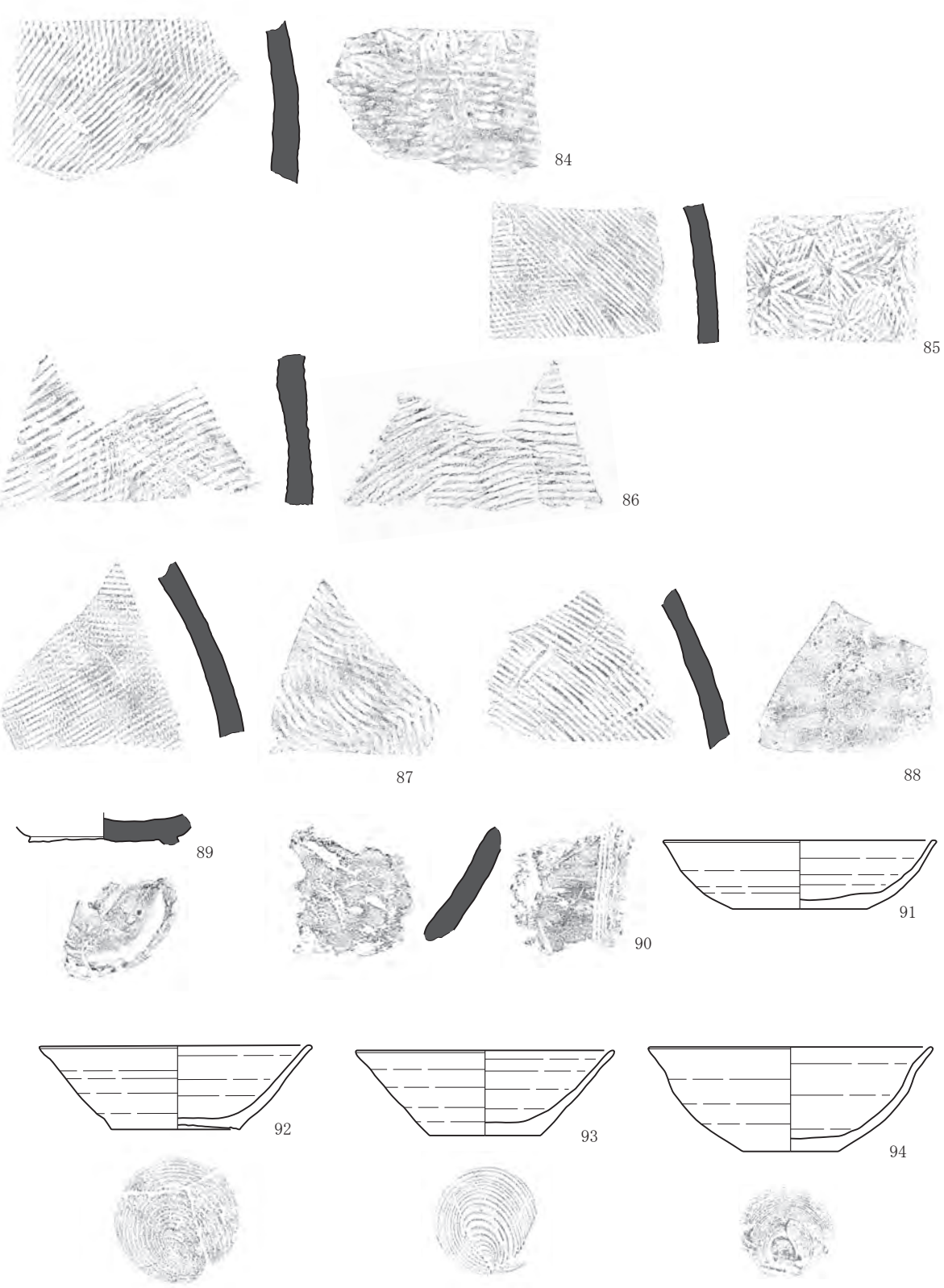
0　(S=1/3)　10cm

第 28 図　遺構外土器（１）



７８:ＬＯ５２　７９:ＬＲ５１　８０:ＬＳ４８
８１:ＬＳ５０　８２:ＭＣ４６・４７・ＭＤ４７
８３:ＭＤ４７

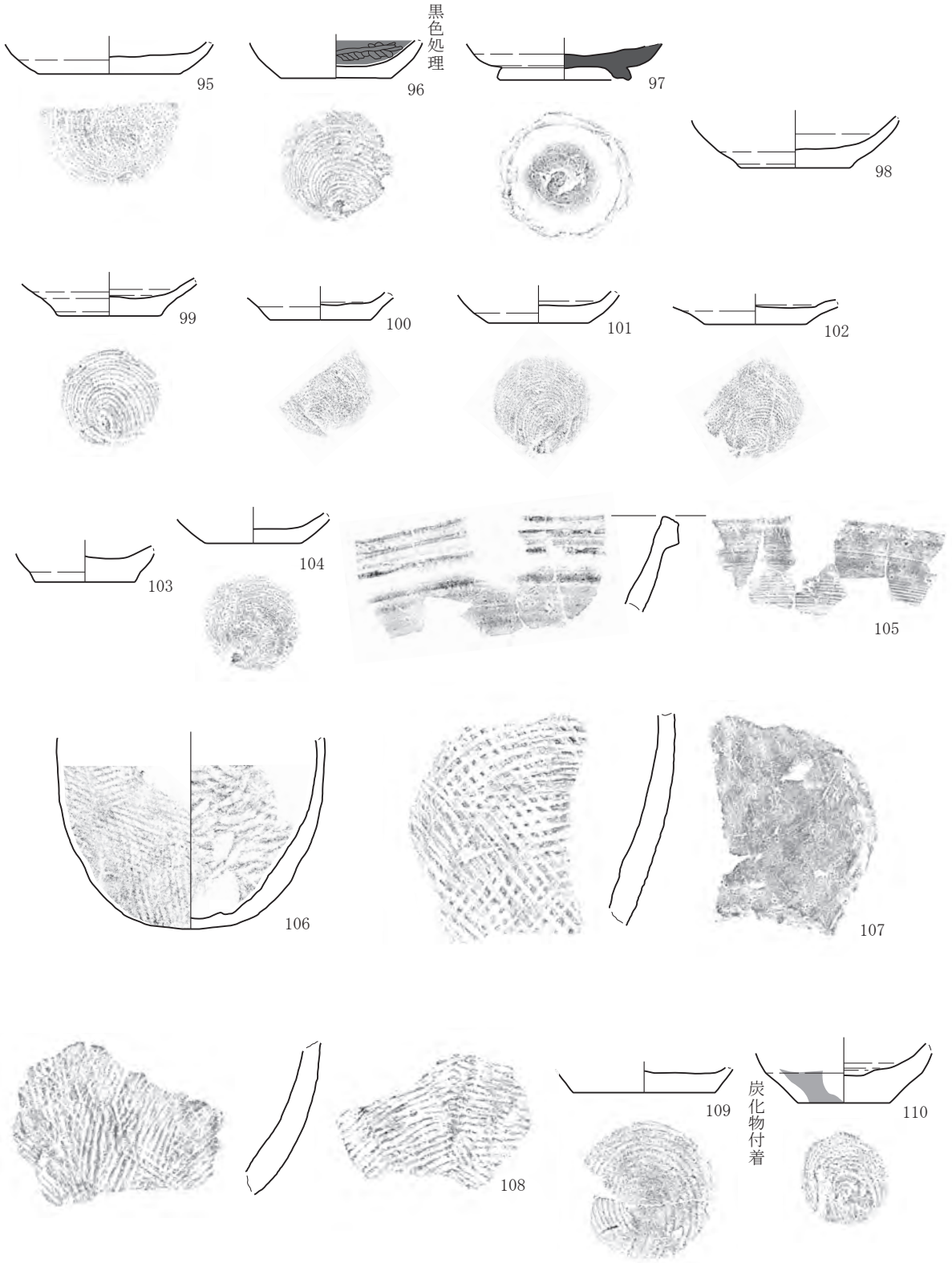
第 29 図　遺構外土器（２）



８４:MC５０　８５・８７:MD４７　８６:MC４７・MD４７　８８:LP４９　８９:LM５０
９０:LT４８　９１:MC４７　９２:LN４７　９３:LS５０　９４:LN５１

0　(S=1/3)　10cm

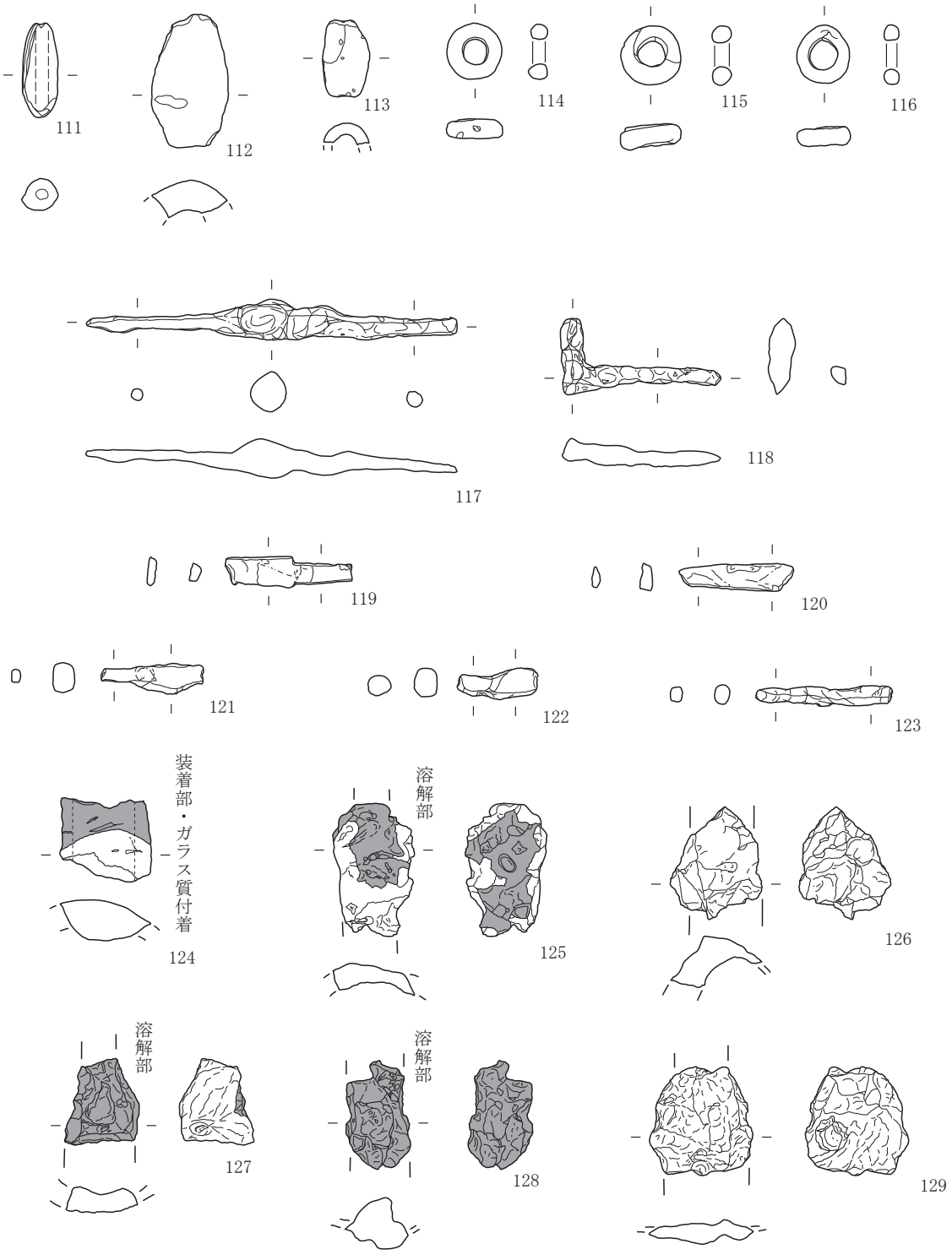
第 30 図　遺構外土器（３）



９５:ＬＴ５０　９６・１１０:ＭＣ４７　９７:ＭＢ４９　９８:ＬＳ５３　９９:ＬＮ４９　１００:ＭＣ５１
１０１・１０２:ＬＴ４９　１０３:ＬＭ５０　１０４・１０９:ＭＡ４９　１０５:ＬＲ４９・ＬＳ４９
１０６:ＬＳ５０・ＬＴ５０　１０７:ＭＤ４５　１０８:ＭＤ４７

0　(S=1/3)　10cm

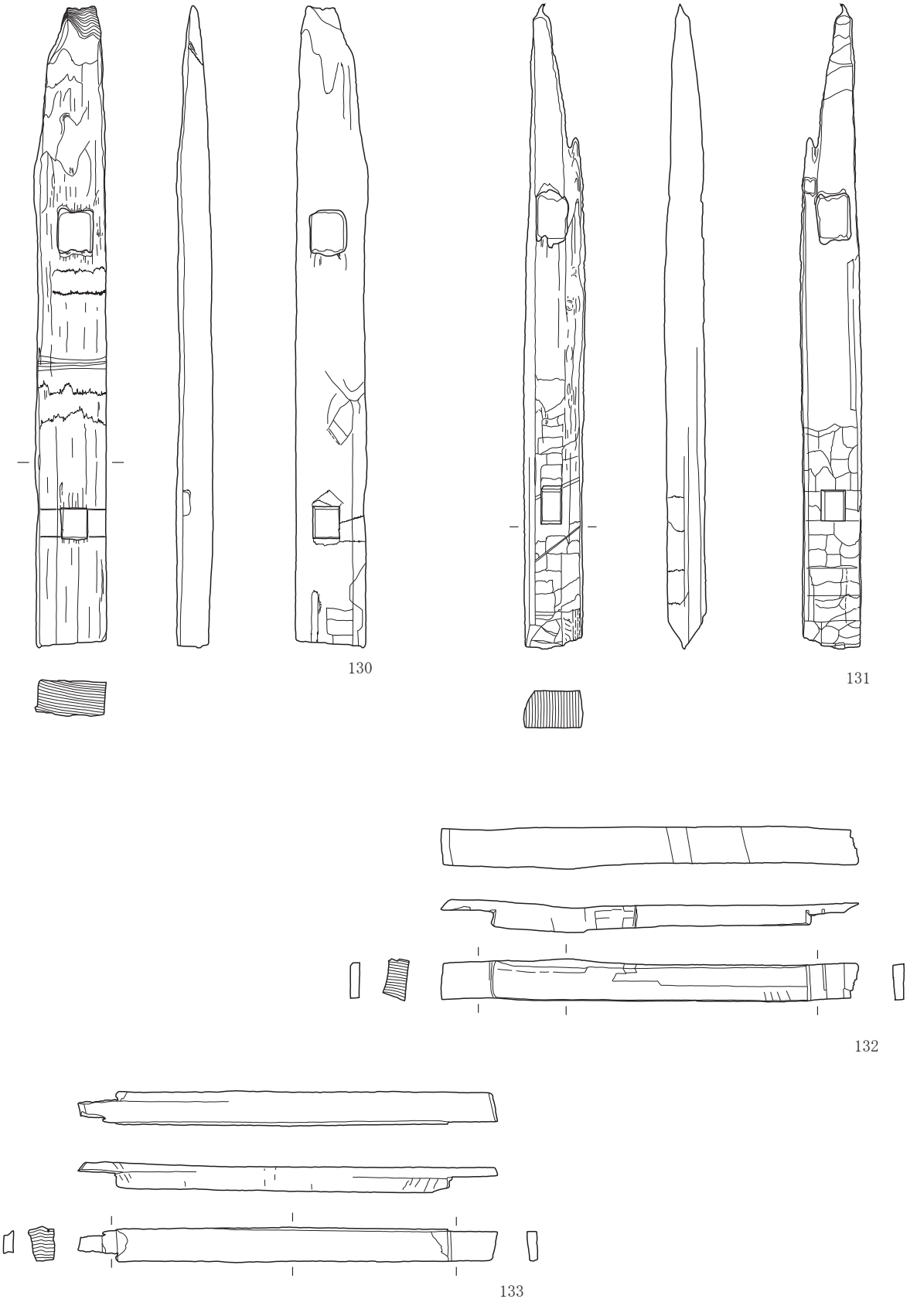
第 31 図　遺構外土器（４）



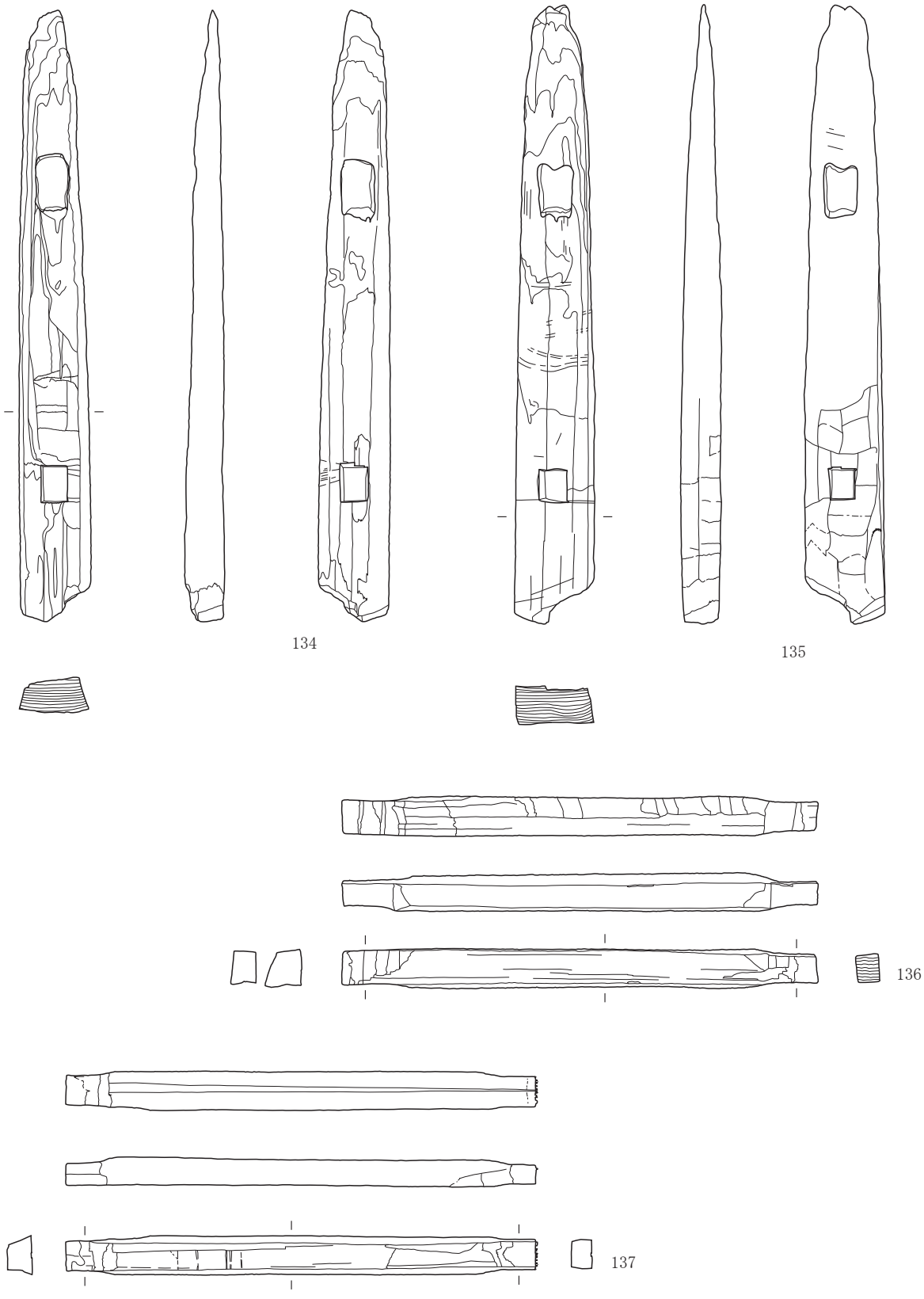
１１１:ＳＤ１７(ＭＢ５０)　１１２:ＭＣ４５　１１３:ＬＰ４９　１１４:ＳＤ１７(ＭＢ４９)
１１５:ＬＰ５２　１１６:ＭＢ４５　１１７:ＳＫ０１　１１８:ＳＫ０２　１１９・１２０・１２８:ＳＫ０３
１２１:ＳＫ０８　１２２:ＳＫ１４　１２３:ＳＫ１５　１２４:ＳＤ１７(ＭＤ５３)　１２５:ＳＤ１７(ＬＱ４７)
１２６・１２７・１２９:ＳＤ１７(ＭＢ５０)

0　(S=1/3)　10cm

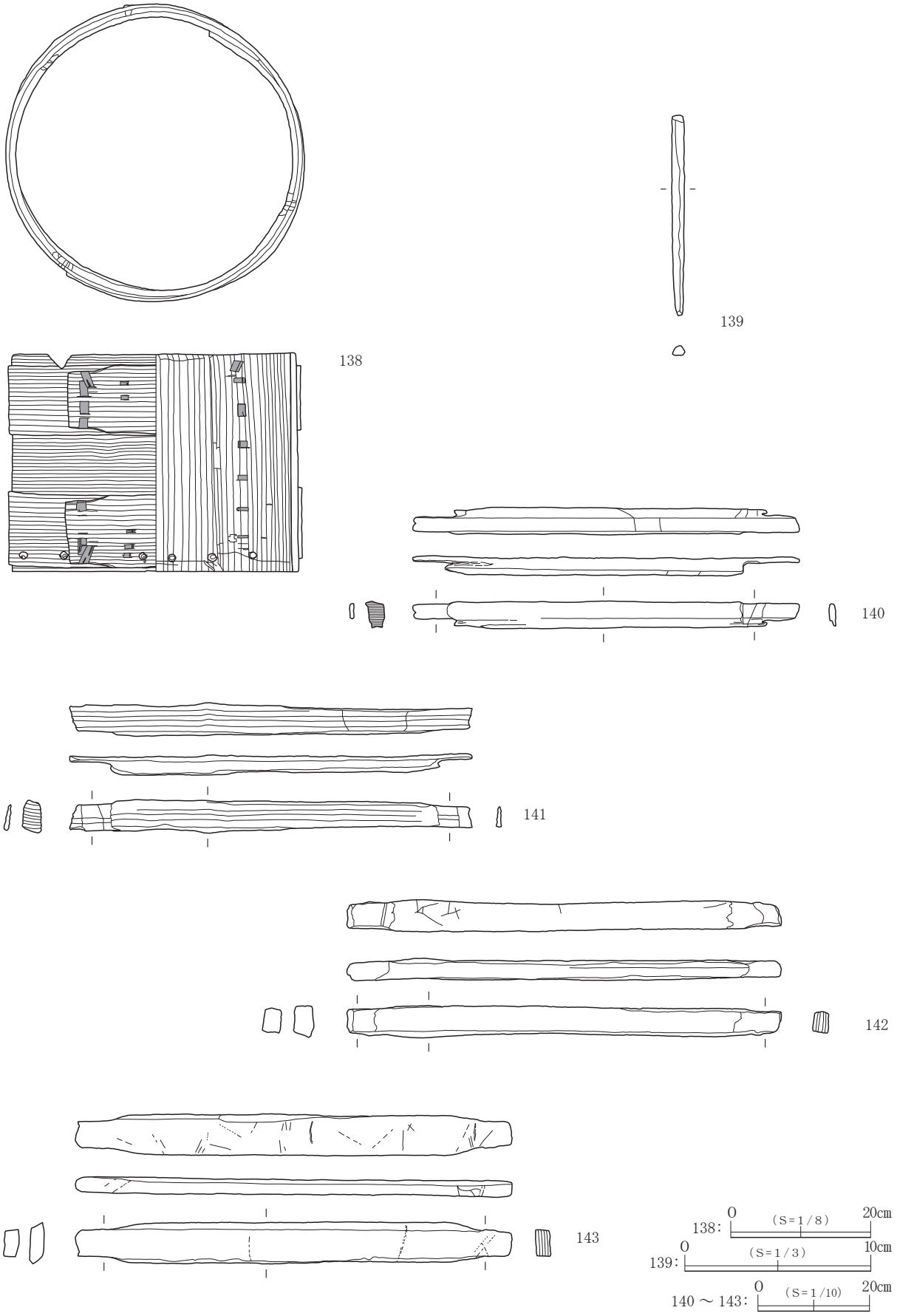
第 32 図　土製品・鉄製品・鉄関連遺物・天然アスファルト



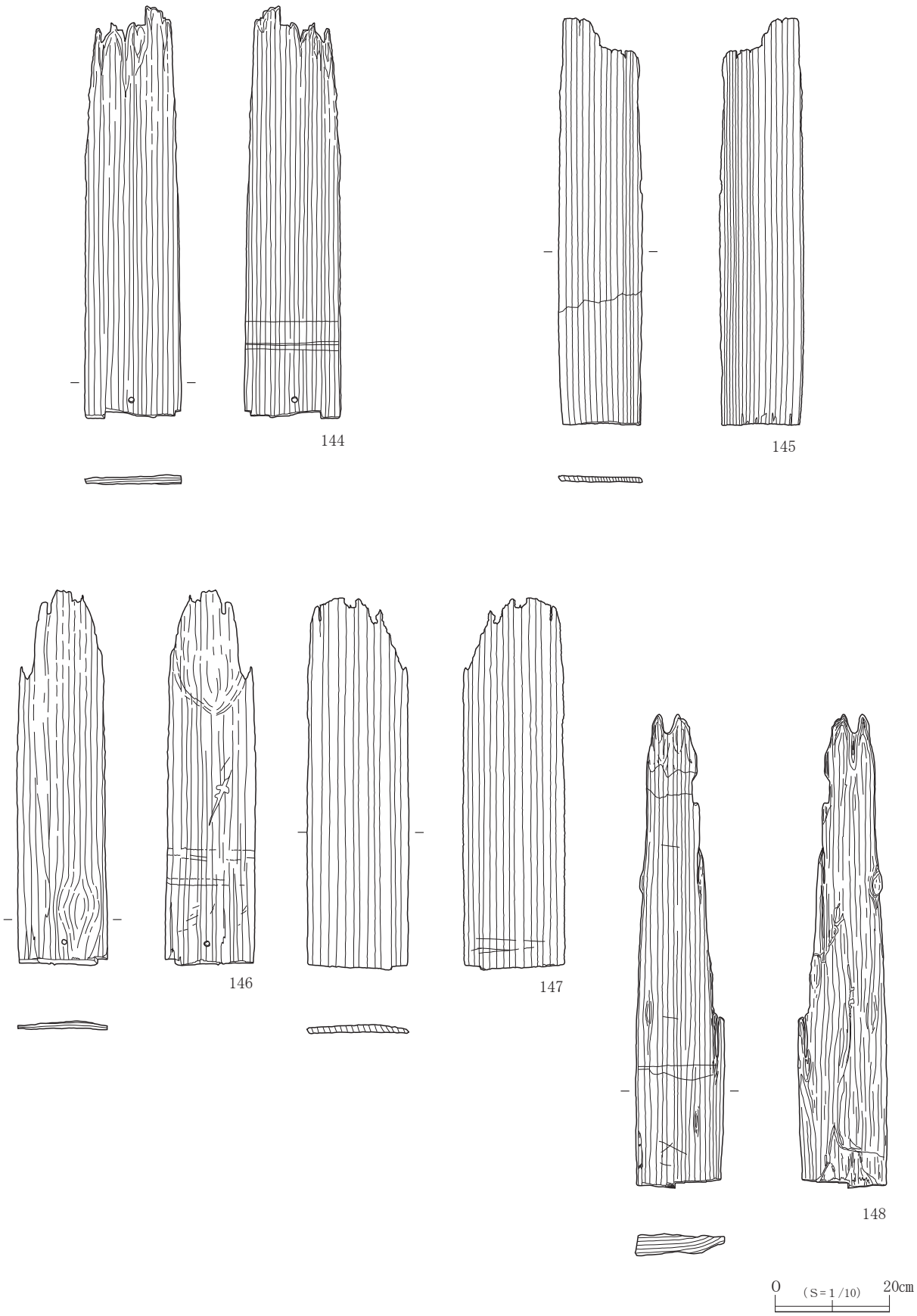
第 33 図　ＳＥ33 井戸跡隅柱・横桟（１）



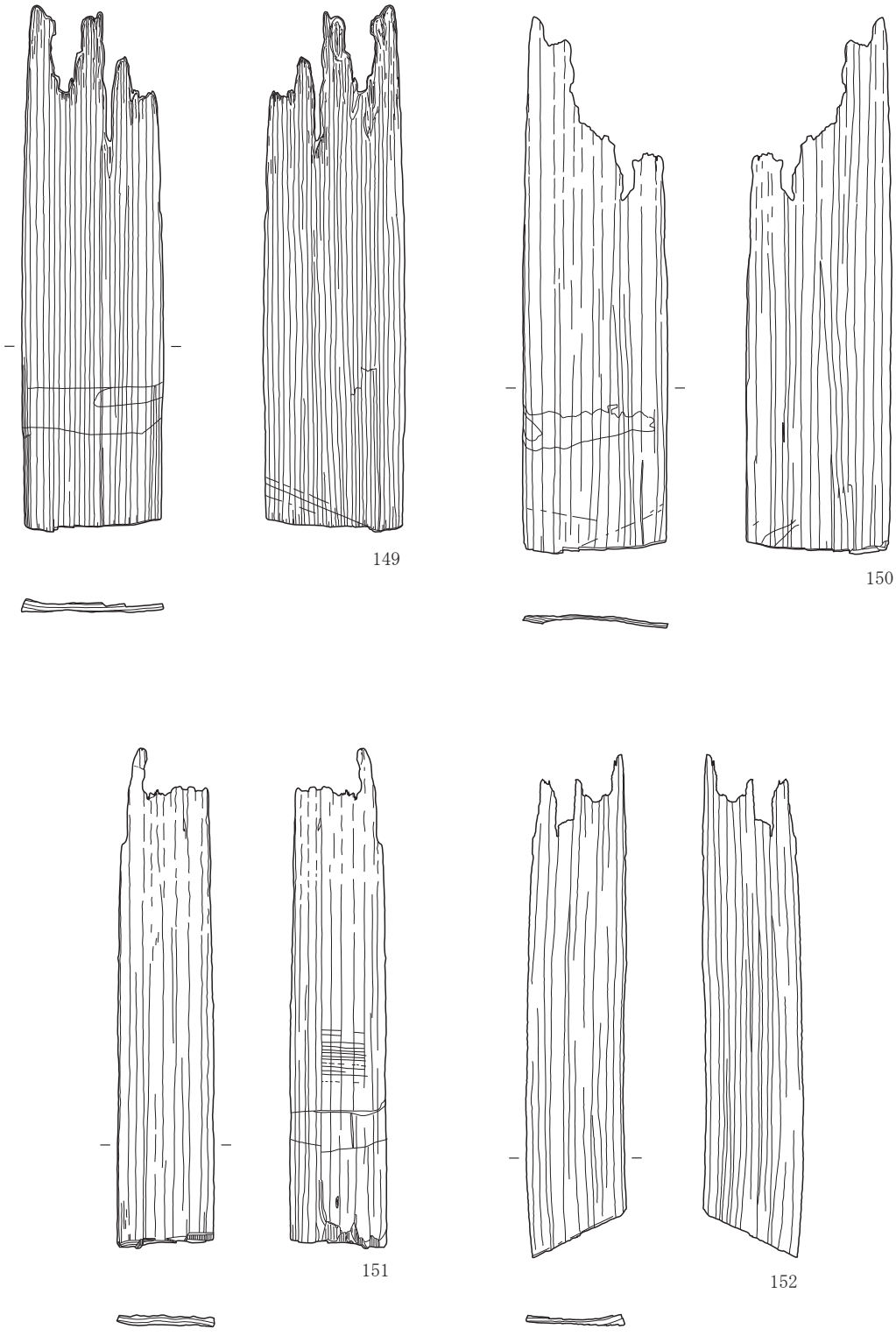
第 34 図　ＳＥ33 井戸跡隅柱・横桟（２）



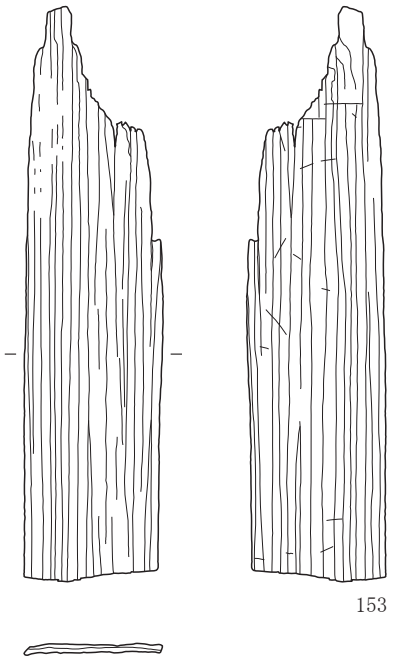
第 35 図　ＳＥ33 井戸跡曲物・箸・横桟

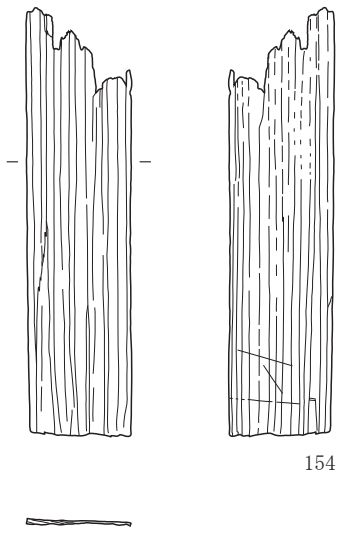


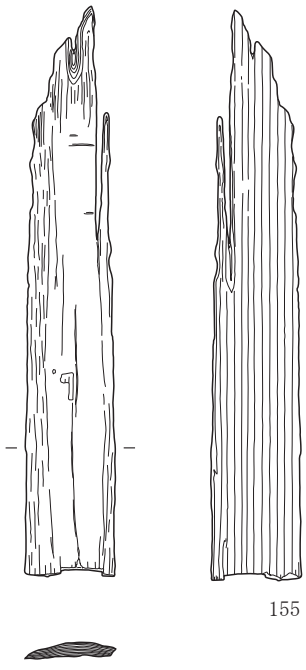
第 36 図　ＳＥ33 井戸跡縦板（１）

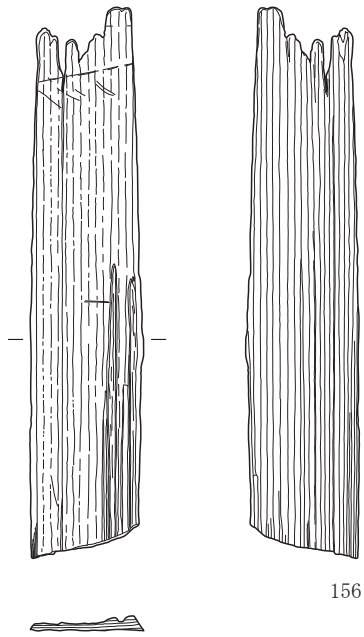


第 37 図　ＳＥ33 井戸跡縦板（２）



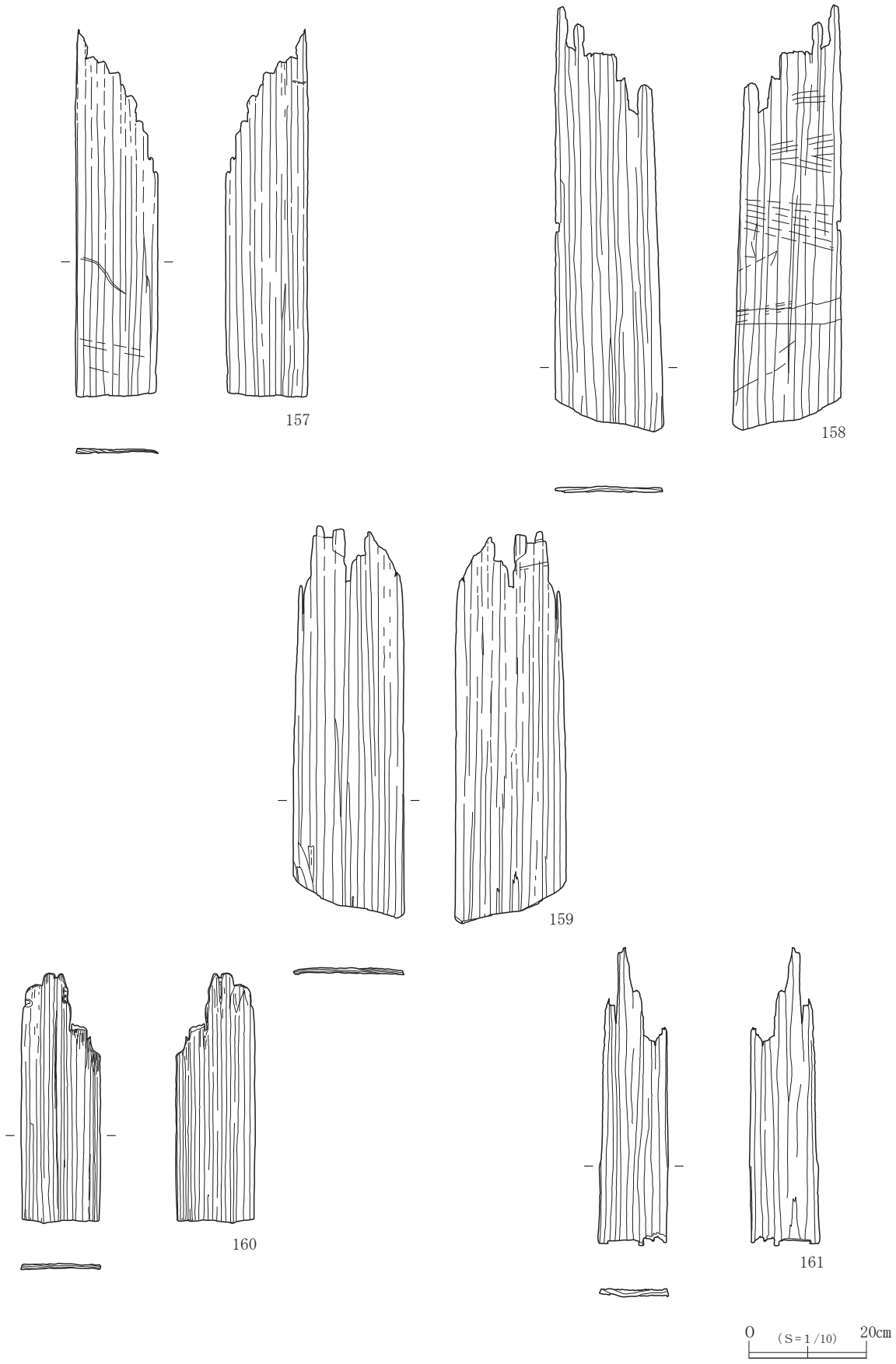






0　（S＝1／10）　20cm

第 38 図　ＳＥ33 井戸跡縦板（３）



第 39 図　ＳＥ33 井戸跡縦板（４）

第７表　土器観察表（１）

挿図番号	図版番号	種類	器種	出土位置	出土層位	部位	調　整	切り離し	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考
21−1	5	須恵器	蓋	ＳＤ17	２層	完形	ロクロ調整→ヘラケズリ	—	13.0	—	3.4	外面端部に自然釉　内面に炭化物付着
21−2	5	須恵器	蓋	ＳＤ17	１～２層	完形	ロクロ調整	—	15.3	—	3.5	外面端部に自然釉
21−3	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	13.0	7.4	4.1	
21−4	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	—	13.5	7.0	3.7	
21−5	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整→ヘラケズリ	回転ヘラ	12.8	6.6	3.3	
21−6	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	13.0	7.6	3.9	外面口縁部に自然釉
21−7	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	(13.4)	6.4	3.5	
21−8	5	須恵器	高台付坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	12.6	(7.4)	4.0	底部外面に墨書（山、出、由？）
21−9	5	須恵器	坏	ＳＤ17 ＳＫ03	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	(14.8)	(8.4)	3.0	
21−10	5	須恵器	坏	ＳＤ17 ＳＫ22	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	13.7	6.6	3.3	生焼け
21−11	5	須恵器	高台付坏	ＳＤ17	１層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	15.8	(8.4)	8.0	
22−12	5	須恵器	高台付坏	ＳＤ17	１～２層	底部～胴部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	(7.0)	—	
22−13	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	12.6	4.8	3.7	
22−14	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	14.0	5.4	4.2	
22−15	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	12.8	4.4	4.7	生焼け
22−16	—	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	13.0	6.0	3.7	
22−17	—	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	7.0	—	
22−18	5	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	4.8	—	内外面に黒色物質付着
22−19	5	須恵器	壺	ＳＤ17	２層	胴	外面：平行叩→ロクロナデ 内面：ロクロ調整	—	—	17.6	—	外面に自然釉
22−20	6	須恵器	壺	ＳＤ17	２層	口縁	ロクロ調整	—	—	—	—	外面に自然釉
22−21	6	須恵器	壺	ＳＤ17	２層	頸部	ロクロ調整	—	—	—	—	外面に自然釉
22−22	6	須恵器	壺	ＳＤ17	１層	頸～口縁	ロクロ調整	—	4.8	—	—	内外面に自然釉
23−23	6	須恵器	甕	ＳＤ17 ＳＥ35	２層	胴～口縁	外面：格子状平行叩 内面：青海波・円文アテ具	—	(30.1)	—	—	
23−24	6	須恵器	甕	ＳＤ17 ＳＥ33	２層 ４層	胴部	外面：格子状平行叩 内面：同心円文・青海波アテ具	—	—	—	—	外面に自然釉
23−25	6	須恵器	甕	ＳＤ17	２層	頸部	外面：格子状叩、刺突文 内面：円文・青海波アテ具	—	—	—	—	内外面自然釉
23−26	6	須恵器	甕	ＳＤ17	２層	胴部	外面：横位平行叩 内面：平行・青海波アテ具	—	—	—	—	
24−27	6	須恵器	甕	ＳＤ17	２層	胴部	外面：斜位平行叩 内面：斜位平行→青海波アテ具	—	—	—	—	
24−28	6	須恵器	甕	ＳＤ17	２層	胴部	外面：格子状平行叩 内面：平行アテ具	—	—	—	—	
24−29	6	須恵器	甕	ＳＤ17	２層	胴部	外面：格子状平行叩 内面：横位平行→青海波アテ具	—	—	—	—	
24−30	7	土師器	蓋	ＳＤ17 ＳＫ03	１層	つまみ	外面：ロクロ 内面：黒色処理	—	—	—	—	内面黒色処理
24−31	7	土師器	坏	ＳＤ17	２層	完形	ロクロ調整→ヘラケズリ	回転ヘラ	10.9	5.6	3.9	
24−32	7	須恵器	坏	ＳＤ17	２～３層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	12.7	5.4	3.4	
24−33	7	土師器	坏	ＳＤ17 ＳＫ03	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	13.8	7.6	3.8	酸化炎焼成須恵器？

第８表　土器観察表（２）

挿図番号	図版番号	種類	器種	出土位置	出土層位	部位	調　整	切り離し	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考
24−34	7	須恵器	坏	ＳＤ17 ＳＫ03	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	14.0	6.4	4.1	生焼け
24−35	7	土師器	高台付坏	ＳＤ17	２層	完形	ロクロ調整	—	14.7	6.4	6.0	
24−36	7	土師器	坏	ＳＤ17	１層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	(16.4)	6.8	6.9	
25−37	7	土師器	坏	ＳＤ17	２層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	14.2	(5.6)	4.2	
25−38	—	土師器	坏	ＳＤ17 ＳＫ03	１層	底部～胴部	ロクロ調整	回転糸	—	(6.5)	—	
25−39	—	土師器	坏	ＳＤ17	２層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.2	—	
25−40	7	土師器	坏	ＳＤ17	２層	底部	内面：黒色処理	—	—	(6.0)	—	底部突出
25−41	—	須恵器	坏	ＳＤ17	２層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	6.8	—	生焼け
25−42	—	土師器	坏	ＳＤ17	２層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	6.4	—	酸化炎焼成須恵器？
25−43	—	須恵器	坏	ＳＤ17 ＳＫ03	１層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	7.2	—	生焼け
25−44	—	土師器	甕	ＳＤ17	２層	口縁	ロクロ調整	—	(20.0)	—	—	内外面に炭化物付着
25−45	—	土師器	甕	ＳＤ17	２層	口縁	ロクロ調整	—	—	—	—	内外面に炭化物付着
25−46	—	土師器	甕	ＳＤ17	２層	口縁	ロクロ調整	—	—	—	—	
25−47	—	土師器	甕	ＳＤ17	２層	胴部	外面：平行叩 内面：ナデ	—	—	—	—	
26−48	—	土師器	甕	ＳＤ17	２層	底部	外面：ロクロ、ケズリ 内面：ロクロ	回転糸	—	8.1	—	内外面に炭化物付着
26−49	—	土師器	甕	ＳＤ17	２層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	7.2	—	
26−50	—	土師器	甕	ＳＤ17	１～２層	底部～胴部	ロクロ調整	回転糸	—	6.4	—	
26−51	7	須恵器	甕	ＳＥ33	４層	胴部	外面：斜位平行叩→ハケメ 内面：同心円文アテ具	—	—	—	—	
26−52	7	須恵器	甕	ＳＥ33	１層	胴部	外面：格子状平行叩 内面：横位平行アテ具	—	—	—	—	
26−53	7	須恵器	甕	ＳＫ03	１層	胴部	外面：格子状平行叩→ハケメ 内面：車輪文アテ具	—	—	—	—	
26−54	7	須恵器	甕	ＳＫ03	１層	胴部	外面：格子状平行叩 内面：青海波アテ具	—	—	—	—	
26−55	7	須恵器	坏	ＳＤ17 ＳＫ03	１層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	14.1	7.4	4.5	生焼け
27−56	7	土師器	甕	ＳＫ03	１層	口縁	ロクロ調整	—	(15.1)	—	—	
27−57	7	須恵器	坏	ＳＫ08	１層	底部～口縁	ロクロ調整	—	12.0	(6.0)	(4.5)	外面自然釉
27−58	8	土師器	甕	ＳＫＰ28	１層	底部～口縁	外面：平行叩→ヘラケズリ 内面：平行アテ具	—	(19.0)	2.4	(20.7)	底部砲弾形 外面に炭化物付着
27−59	—	土師器	坏	ＳＫ29	１層	底部	ロクロ調整	—	—	5.3	—	
27−60	—	須恵器	壺	ＳＫ34	１～２層	頸部	ロクロ調整	—	—	—	—	外面に自然釉
27−61	—	須恵器	甕	ＳＡ25	１層	底部～胴部	外面：格子状平行叩 内面：平行アテ具	—	—	2.6	—	底部砲弾形
27−62	8	土師器	坏	ＳＫＰ107	１層	底部～口縁	内面：黒色処理→ヘラミガキ	—	16.0	(7.0)	6.7	
27−63	—	土師器	甕	ＳＫＰ160	１層	胴部	外面：斜位平行叩→ハケメ 内面：斜位平行アテ具→ハケメ	—	—	—	—	
27−64	—	須恵器	坏	ＳＫＰ271	１層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	6.6	—	
28−65	—	須恵器	蓋	ＬＱ49	Ⅱ層	破片	ロクロ調整	—	—	—	—	
28−66	—	須恵器	皿？	ＭＥ46	Ⅱ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	4.5	—	高台剥落
28−67	8	須恵器	坏	ＬＴ50	Ⅲ層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	12.1	6.4	3.2	
28−68	8	須恵器	高台付坏	ＭＤ46 ＭＤ47	Ⅱ層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	15.8	8.0	8.1	外面に自然釉

第９表　土器観察表（３）

挿図番号	図版番号	種類	器種	出土位置	出土層位	部位	調　整	切り離し	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考
28−69	8	須恵器	坏	ＭＤ47	Ⅲ層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	13.0	5.1	3.8	外面口縁部に自然釉
28−70	8	須恵器	高台付坏	ＭＣ51	Ⅱ層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	6.8	—	
28−71	—	須恵器	高台付坏	ＭＤ49	Ⅱ層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	—	—	
28−72	8	須恵器	高台付坏	ＬＴ47	Ⅱ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	(5.2)	—	
28−73	—	須恵器	高台付坏	ＭＢ46	Ⅰ層	底部	ロクロ調整	—	—	(7.0)	—	
28−74	—	須恵器	坏	ＬＴ49	Ⅲ層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	7.0	—	
28−75	—	須恵器	坏	ＭＤ57	Ⅳ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.6	—	
28−76	8	須恵器	甕	ＬＭ50	Ⅳ層	胴部	外面：平行叩 内面：円文・青海波アテ具	—	—	—	—	内面に自然釉
28−77	8	須恵器	甕	ＬＮ46	Ⅲ層	胴部	外面：綾杉状平行叩 内面：同心円文アテ具	—	—	—	—	外面に自然釉
29−78	8	須恵器	甕	ＬＯ52	Ⅲ層	胴部	外面：斜位の平行叩 内面：平行→車輪文アテ具	—	—	—	—	外面に自然釉
29−79	8	須恵器	甕	ＬＲ51	Ⅲ層	胴部	外面：平行叩 内面：青海波・円文アテ具	—	—	—	—	
29−80	8	須恵器	甕	ＬＳ48	Ⅲ層	胴部	外面：平行叩 内面：同心円文アテ具	—	—	—	—	外面に自然釉
29−81	8	須恵器	甕	ＬＳ50	Ⅳ層	胴部	外面：綾杉状平行叩 内面：同心円文アテ具	—	—	—	—	外面に自然釉
29−82	9	須恵器	甕	ＭＣ46・47 ＭＤ47	Ⅳ層	胴部	外面：斜位平行叩→ヘラケズリ 内面：円文・平行アテ具→ヘラケズリ	—	—	—	—	外面に自然釉
29−83	9	須恵器	甕	ＭＤ47	Ⅲ層	胴部	外面：斜位平行叩 内面：平行・円文アテ具	—	—	—	—	
30−84	9	須恵器	甕	ＭＣ50	Ⅲ層	胴部	外面：格子状平行叩→ヘラケズリ 内面：平行・車輪文アテ具	—	—	—	—	外面に自然釉
30−85	9	須恵器	甕	ＭＤ47	Ⅳ層	胴部	外面：格子状平行叩→ハケメ 内面：車輪文アテ具	—	—	—	—	
30−86	9	須恵器	甕	ＭＣ47 ＭＤ47	Ⅳ層	胴部	外面：斜位平行叩 内面：横位平行アテ具	—	—	—	—	
30−87	9	須恵器	甕	ＭＤ47	Ⅳ層	胴部	外面：格子状平行叩 内面：平行アテ具	—	—	—	—	
30−88	9	須恵器	甕	ＬＰ49	Ⅳ層	胴部	外面：長方形状平行叩 内面：指によるオサエ	—	—	—	—	
30−89	—	須恵器	甕	ＬＭ50	Ⅳ層	底部	ロクロ調整	—	—	7.4	—	
30−90	8	須恵器系陶器	擂鉢	ＬＴ48	Ⅱ層	胴部	内面：５条の御目	—	—	—	—	13～14世紀か
30−91	—	土師器	坏	ＭＣ47	Ⅲ層	底部～口縁	ロクロ調整	回転ヘラ	13.4	6.6	3.4	酸化炎焼成須恵器？
30−92	9	土師器	坏	ＬＮ47	Ⅳ層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	13.4	6.4	4.2	
30−93	9	土師器	坏	ＬＳ50	Ⅳ層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	12.6	5.4	4.2	
30−94	9	土師器	坏	ＬＮ51	Ⅲ層	底部～口縁	ロクロ調整	回転糸	14.0	4.8	5.2	
31−95	—	土師器	坏	ＬＴ50	Ⅱ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	7.0	—	
31−96	—	土師器	坏	ＭＣ47	Ⅳ層	底部	内面：黒色処理→ヘラミガキ	回転糸	—	5.4	—	
31−97	—	須恵器	高台付坏	ＭＢ49	Ⅲ層	底部	ロクロ調整	回転ヘラ	—	6.6	—	生焼け
31−98	—	土師器	坏	ＬＳ53	Ⅲ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.4	—	
31−99	—	土師器	坏	ＬＮ49	Ⅳ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.2	—	
31−100	—	土師器	坏	ＭＣ51	Ⅰ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.0	—	
31−101	—	土師器	坏	ＬＴ49	Ⅲ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.0	—	

第 10 表　土器観察表（４）

挿図番号	図版番号	種類	器種	出土位置	出土層位	部位	調　整	切り離し	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考
31−102	—	土師器	坏	ＬＴ49	Ⅲ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.0	—	
31−103	—	土師器	坏	ＬＭ50	Ⅳ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	5.0	—	
31−104	—	土師器	坏	ＭＡ49	Ⅲ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	4.8	—	
31−105	9	土師器	鍋	ＬＲ49 ＬＳ49	Ⅲ層	口縁	外面：ロクロ 内面：ロクロ→ヘラナデ	—	—	—	—	表面還元
31−106	9	土師器	甕	ＬＳ50 ＬＴ50	Ⅲ層	底部～胴部	外面：格子状平行叩 内面：円文アテ具	—	—	1.4	—	底部砲弾形 内面に炭化物付着
31−107	9	土師器	甕	ＭＤ45	Ⅳ層	胴部	外面：格子状平行叩 内面：ヘラケズリ、ヘラナデ	—	—	—	—	
31−108	9	土師器	甕	ＭＤ47	Ⅳ層	胴部	外面：斜位の平行叩 内面：横位平行アテ具	—	—	—	—	
31−109	—	土師器	甕	ＭＡ49	Ⅲ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	7.0	—	
31−110	—	土師器	甕	ＭＣ47	Ⅳ層	底部	ロクロ調整	回転糸	—	4.6	—	外面に煤状炭化物付着

第 11 表　土製品一覧表

挿図番号	図版番号	遺物名	出土位置	出土層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
32−111	10	土錘	ＳＤ17(ＭＢ50)	１層	4.5	1.7	1.5	8.5	
32−112	10	土錘	ＭＣ45	Ⅳ層	6.3	3.6	—	(32.0)	
32−113	10	土錘	ＬＰ49	Ⅲ層	3.6	2.3	—	(6.0)	
32−114	10	環状土製品	ＳＤ17(ＭＢ49)	２層	2.7	2.6	0.8	4.0	
32−115	10	環状土製品	ＬＰ52	Ⅲ層	2.8	2.8	0.9	6.5	
32−116	10	環状土製品	ＭＢ45	Ⅲ層	2.8	2.5	0.7	4.5	

第 12 表　鉄製品・鉄関連遺物・天然アスファルト一覧表

挿図番号	図版番号	遺物名	出土位置	出土層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
32−117	10	鉄鏃	ＳＫ01	１層	17.4	1.7	1.9		
32−118	10	Ｌ字形鉄製品	ＳＫ02	１層	7.6	3.6	1.0		
32−119	10	刀子	ＳＫ03	２層	(6.1)	1.5	0.5		茎付　刃部先端欠損
32−120	10	刀子	ＳＫ03	１層	(5.4)	1.3	0.6		刃部先端欠損
32−121	10	刀子	ＳＫ08	１層	(4.3)	1.5	1.0		刃部欠損
32−122	10	刀子	ＳＫ14	１層	(3.8)	1.5	1.1		刃部欠損　長さは残存値
32−123	10	棒状鉄製品	ＳＫ15	２層	6.4	1.0	0.7		
32−124	10	フイゴ羽口	ＳＤ17(ＭＤ53)	１層	(4.0)	(4.3)	—	26.0	装着部　外面にガラス質付着
32−125	10	鍛冶滓	ＳＤ17(ＬＱ47)	１層	6.3	3.9	1.2	35.5	
32−126	10	鍛冶滓	ＳＤ17(ＭＢ50)	１層	5.4	4.3	2.4	53.0	
32−127	10	鍛冶滓	ＳＤ17(ＭＢ50)	１層	4.0	3.5	1.3	18.0	
32−128	—	鍛冶滓	ＳＫ03	２層	5.2	2.9	2.4	15.5	
32−129	10	天然アスファルト	ＳＤ17(ＭＢ50)	１層	5.2	4.9	1.0	13.5	

第 13 表　ＳＥ 33 井戸跡出土木製品・遺材一覧表

挿図番号	図版番号	遺物名	樹種	出土位置	出土層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考
33−130	11	南東隅柱	スギ	ＳＥ33	３層	109.7	12.2	6.2	角孔２　下部角孔両側に刃痕２条
33−131	11	北西隅柱	スギ	ＳＥ33	３層	110.2	10.2	6.4	角孔２　下部角孔両側に刃痕２条
33−132	12	東横桟下部	—	ＳＥ33	３層	71.4	7.2	4.5	両端部は仕口　仕口に刃痕１条
33−133	12	西横桟下部	—	ＳＥ33	３層	71.7	5.9	4.5	両端部は仕口　仕口に刃痕１条
34−134	11	南西隅柱	スギ	ＳＥ33	３層	102.1	11.5	5.9	角孔２　下部角孔両側に刃痕１条
34−135	11	北東隅柱	スギ	ＳＥ33	３層	103.3	13.1	6.4	角孔２　下部角孔両側に刃痕１条
34−136	12	南横桟下部	—	ＳＥ33	３層	79.5	6.3	6.1	両端部はホゾの加工
34−137	12	北横桟下部	—	ＳＥ33	３層	78.5	6.6	5.1	両端部はホゾの加工
35−138	巻頭図版４−２	曲物	スギ	ＳＥ33	４層	31.2	42.3	2.5	上下二段のまわし　穿孔17　上端部にＶ字状の切り込み３　側板内面に縦方向の平行線　山桜の帯
35−139	—	箸	—	ＳＥ33	２層	10.8	0.7	0.5	
35−140	—	東横桟上部	—	ＳＥ33	３層	69.2	4.9	3.5	両端部は仕口
35−141	—	西横桟上部	—	ＳＥ33	３層	72.0	5.8	3.4	両端部は仕口
35−142	—	南横桟上部	—	ＳＥ33	３層	77.8	5.7	3.6	両端部はホゾの加工
35−143	—	北横桟上部	—	ＳＥ33	３層	78.1	7.5	2.6	両端部はホゾの加工
36−144	13	西縦板１	—	ＳＥ33	３層	72.1	17.0	1.7	下部に穿孔１φ1.0cm
36−145	13	西縦板２	—	ＳＥ33	３層	71.1	14.6	1.2	柾目材
36−146	13	西縦板３	—	ＳＥ33	３層	65.5	15.7	1.2	下部に穿孔１φ1.0cm
36−147	13	西縦板７	—	ＳＥ33	３層	64.9	17.8	1.6	柾目材
36−148	14	南縦板３	—	ＳＥ33	３層	82.9	15.6	3.9	
37−149	13	北縦板８	—	ＳＥ33	３層	79.4	21.4	2.0	
37−150	13	北縦板３	—	ＳＥ33	３層	81.0	21.8	1.2	
37−151	14	南縦板７	—	ＳＥ33	３層	75.5	13.7	1.4	
37−152	14	南縦板２	—	ＳＥ33	３層	75.9	14.9	1.7	矢板片刃状
38−153	15	東縦板１	—	ＳＥ33	３層	76.0	18.2	1.5	
38−154	14	東縦板２	—	ＳＥ33	３層	56.7	13.8	0.7	
38−155	14	東縦板３−①	—	ＳＥ33	３層	75.4	12.0	2.2	放射性炭素年代測定試料
38−156	15	東縦板３−②	—	ＳＥ33	３層	73.0	15.0	2.0	
39−157	14	東縦板４	—	ＳＥ33	３層	62.5	14.9	0.8	矢板片刃状
39−158	15	東縦板５	—	ＳＥ33	３層	72.2	18.2	1.1	矢板片刃状
39−159	15	東縦板６	—	ＳＥ33	３層	66.7	18.7	0.8	矢板片刃状
39−160	15	東縦板７	—	ＳＥ33	３層	42.5	13.6	1.1	
39−161	15	東縦板８	—	ＳＥ33	３層	50.7	11.8	1.4	

第４章　理化学的分析

第１節　樹種同定（１）

株式会社吉田生物研究所

１　試料

試料は阿部舘遺跡ＳＥ33井戸跡から出土した曲物１点、隅柱４点の合計５点である。

２　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３　結果

第 14 表　ＳＥ 33 井戸跡出土木製品同定表

No.	試料名	樹種
1	曲物	スギ科スギ属スギ
2	ほぞ穴付柱材（南東隅柱）	スギ科スギ属スギ
3	ほぞ穴付柱材（北西隅柱）	スギ科スギ属スギ
4	ほぞ穴付柱材（南西隅柱）	スギ科スギ属スギ
5	ほぞ穴付柱材（北東隅柱）	スギ科スギ属スギ

（１）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica D.Don*）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

参考文献

林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所（1991）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

第２節　樹種同定（２）

パレオ・ラボ株式会社

１　はじめに

阿部舘遺跡は仁賀保丘陵西斜面中腹の平坦面上に立地する、平安時代の遺跡である。発掘調査では大溝跡や土坑などが検出され、炭化材や生材などの木材が出土した。ここでは、出土した木材の樹種同定を行なった。また、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行なわれている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２　試料と方法

試料は、ＳＥ33井戸跡から生材１点、ＳＫ02土坑から炭化材１点、ＳＤ17大溝跡から炭化材１点の、計３点の出土木材である。遺構の年代は、いずれも平安時代と考えられている。炭化材については、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料中に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を記録した。

生材の樹種同定は、試料の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールにて封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定は、試料をまず乾燥させ、材の３断面についてカミソリと手で割断面を作製し、試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

３　結果

同定の結果、針葉樹のスギと広葉樹のブナ属の計２分類群が産出した。ＳＥ33井戸跡から出土した側板の一部と考えられている生材とＳＫ02土坑から出土した炭化材はスギ、ＳＤ17大溝跡から出土した炭化材はブナ属であった。同定結果を第15表に示す。

第 15 表　樹種同定結果

番号	出土遺構	層位	種類	樹種	残存半径（㎝）	残存年輪数	遺物の状態	年代測定番号
1	SK02土坑	１層	炭化材	スギ	0.6	4	炭化材	PLD-19697
3	SD17大溝跡	２層	炭化材	ブナ属	0.8	12	炭化材	PLD-19699
4	SE33井戸跡	１層	井戸側板？	スギ	－	－	生材	PLD-19700

次に、同定された材の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版16に示す。

（１）スギ　*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　スギ科　図版16　1a－1c（№１）、2a－2c（№４）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。放射組織は単列で、高さ２～ 11列となる。分野壁

孔は大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布では東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切削などの加工が容易な材である。

（２）ブナ属　Fagus　ブナ科　図版16　2a−2c（№３）

小型の道管が単独ないし２～３個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、大きなものは10列以上となる。

ブナ属にはブナやイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難でない。

４　考察

ＳＥ33井戸跡で出土した№４はスギであった。スギは木理通直で素直に成長する樹種であり、軽軟で加工性が良いという材質を持つため、№４が井戸の側板であったとすれば、井戸側に適した樹種選択が行なわれていたと考えられる。阿部舘遺跡と同様に日本海側に近い遺跡では、八峰町に所在する中田面遺跡で平安時代から鎌倉時代の井戸枠が出土し、いずれもスギと同定されている（山田，1993）。スギは、現在の植生でも東日本の日本海側に多く（伊東ほか，2011）、遺跡周辺にも多く生育していた可能性が高い。阿部舘遺跡でも、遺跡周辺に生育していたスギを選択的に利用していた可能性が考えられる。

土坑墓と考えられているＳＫ02土坑でもスギが産出した。またＳＤ17大溝跡からはブナ属が産出した。いずれの材も燃料材の残渣や焼けた木製品などの可能性が考えられる。ブナ属は重硬だが加工性は比較的良いという材質を持ち、燃料材としても現在でも普通に用いられる樹種である。またスギは加工性の良い樹種であると同時に、燃焼性が比較的高い樹種でもある。いずれの試料も破片で原形を留めておらず、形状や材質から用途の推定を行なうことはできなかった。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，青海社.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間･植物関係史．242p，植生史研究　特別第１号.

第３節　放射性炭素年代測定（１）

パレオ・ラボ株式会社

１　はじめに

秋田県にかほ市両前寺字阿部舘に位置する平安時代の阿部舘遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報、調製データは第16表のとおりである。

試料は、大溝跡や土坑、井戸から出土した炭化材、生材、鉄製品、計４点である。各試料は次のとおりである。平安時代の土坑墓と考えられているＳＫ02土坑から出土した炭化材（試料№１：PLD-19697）、同じく平安時代の土坑墓と考えられているＳＫ08土坑からは副葬品と考えられる鉄製品（試料№２：PLD-19698）、９世紀半ば過ぎに埋没したと推定されるＳＤ17大溝跡から出土した炭化材（試料№３：PLD-19699）、９世紀中頃の須恵器甕片が出土するＳＥ33井戸跡から出土した生材（試料№４：PLD-19700）。ＳＥ33井戸跡では一辺70㎝の方形の井戸側と底面に曲物が検出されており、試料№４は井戸側を構成する縦板の破片と考えられている。

第 16 表　測定試料及び処理（１）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-19697	試料No.1 グリッド：MB51 遺構：SK02土坑 層位：1層	試料の種類：炭化材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 採取位置：外側−1年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.2N, 塩酸:1.2N） 900℃ 3h燃焼
PLD-19698	試料No.2 グリッド：LT50 遺構：SK08土坑 層位：1層	試料の種類：鉄製品 状態：dry	超音波洗浄 アセトン処理 アルカリ・酸洗浄（水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N） 3.5㏖/L塩化銅水溶液洗浄 酸洗浄（塩酸:12N） 900℃ 5h燃焼
PLD-19699	試料No.3 遺構：SD17大溝跡 層位：2層	試料の種類：炭化材（ブナ属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 採取位置：外側−6年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.2N, 塩酸:1.2N） 900℃ 3h燃焼
PLD-19700	試料No.4 グリッド：LM48 遺構：SE33井戸跡 層位：1層	試料の種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 採取位置：外側−2年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.2N, 塩酸:1.2N） 900℃ 3h燃焼

試料№２の鉄製品については、次のような前処理を行った。錆の部分をカットしてメタル部分（約３ｇ）を取りだした後、アセトンと純水を用いて超音波洗浄を行った。その後、1.0Nの水酸化ナトリウムで洗浄、1.2Nの塩酸で洗浄後、3.5㏖/Lの塩化銅水溶液で処理し、さらに12Nの塩酸で処理を行った。ろ過後、純水で洗浄し、80℃で乾燥させ、酸化銅と一緒に900℃で５時間燃焼させた。ガス化した試料を精製してCO_2を回収し、水素還元法でグラファイト化を行った。試料№２以外の試料については、

超音波洗浄の後、通常どおりのＡＡＡ処理(酸・アルカリ・酸処理)を行い、酸化銅と一緒に900℃で３時間燃焼させてガス化、精製してCO_2を回収、水素還元法によるグラファイト化を行った。
試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３　結果

第17表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、第40図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はＡＤ1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代(yrBP)の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±１σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ：IntCal09)を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。第40図グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第 17 表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果（１）

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-19697 試料No.1	−22.74±0.14	1072±18	1070±20	904AD(12.0%)914AD 970AD(48.6%)996AD 1005AD(7.6%)1012AD	898AD(19.1%)920AD 945AD(76.3%)1019AD
PLD-19698 試料No.2	−23.78±0.14	2369±21	2370±20	485BC(14.7%)464BC 449BC(3.3%)442BC 417BC(50.2%)393BC	511BC(95.4%)392BC
PLD-19699 試料No.3	−25.32±0.14	1117±20	1115±20	895AD(10.0%)904AD 913AD(15.7%)927AD 935AD(42.4%)970AD	890AD(95.4%)980AD
PLD-19700 試料No.4	−25.10±0.14	784±19	785±20	1225AD(68.2%)1265AD	1220AD(95.4%)1272AD

４　考察

各試料の暦年較正結果のうち、２σ暦年代範囲(確率95.4％)に着目して結果を整理する。

土坑墓と考えられているＳＫ02土坑から出土した炭化材（試料№１：PLD-19697）は、898-920 cal AD（19.1％）および945-1019 cal AD（76.3％）の暦年代範囲を示した。これは９世紀末～ 11世紀前半で、平安時代に相当し、出土遺物から推定されている時期ともおおむね整合的である。

一方、同じく土坑墓と考えられているＳＫ08土坑から出土した鉄製品（試料№２：PLD-19698）は、511-392 cal BC（95.4％）の暦年代範囲を示した。これは紀元前６世紀後半～４世紀初頭で、縄文時代晩期末～弥生時代前期に相当する。遺構の推定時期である平安時代に対して、大幅に古い年代が得られたことになる。金属製品の年代測定をおこなう場合、測定対象となるのは、製品が作られた際に金属中に取り込まれた燃料材由来の炭素（煤）である。しかし、試料№２が縄文時代晩期末～弥生時代前期に製作された鉄製品である可能性は極めて低い。今回、大幅に古い年代が得られた原因の特定は難しいが、以下の可能性などが考えられる。鉄の原料が砂鉄であった場合、土壌中に含まれる古い炭素の影響を受ける可能性がある。また、製鉄時に亜炭など古い炭素を含んだ燃料材を混ぜた可能性も考えられる。

ＳＤ17大溝跡から出土した炭化材（試料№３：PLD-19699）は、890-980 cal AD（95.4％）の暦年代範囲を示した。これは、９世紀末～ 10世紀後半で平安時代に相当し、出土遺物から推定されている埋没時期ともおおむね整合的である。

ＳＥ33井戸跡から出土した、井戸側を構成する縦板の破片と考えられている生材（試料№４：PLD-19700）は、1220-1272 cal AD（95.4％）の暦年代範囲を示した。これは13世紀代で、鎌倉時代に相当する。

ＳＥ33井戸跡は底面から９世紀中頃の須恵器甕の破片が出土しており、９世紀中頃の井戸跡と考えられているが、今回の試料№４それよりも400年ほど新しい年代を示したことになる。ＳＥ33井戸跡が実は中世に掘削されたもので、底面の９世紀の遺物は掘削時か掘削後に入り込んだという可能性も否定はできない。しかし、阿部舘遺跡は平安時代の遺跡であり、中世の遺物はほとんど出土していないため、ＳＥ33井戸跡が中世に掘削された井戸であったとは考えにくい。試料№４は井戸側の上の方から出土した破片であり、発掘調査時には井戸側の破片であると判断されたが、井戸側の一部ではなかった可能性がある。ＳＥ33は井戸側や曲物が設けられている構造のしっかりした井戸跡で、掘り込みが後世まで残っていた可能性があり、試料№４は何らかの理由で13世紀以降に入り込んだ材であった可能性が考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」:3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S. Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

第４節　放射性炭素年代測定（２）

パレオ・ラボ株式会社

１　はじめに

秋田県にかほ市に位置する平安時代の阿部舘遺跡より検出された木材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報、調製データは第18表のとおりである。

試料は、９世紀中頃の須恵器甕片が出土しているＳＥ33井戸跡の井戸側を構成する縦板の一部である（PLD-20844）。ＳＥ33井戸跡では、４本の隅柱に上下二段８本の横桟とその周囲に立て並べた縦板で構成された、一辺70㎝の方形の井戸側が検出されており、井戸側底面には曲物が設置されていた。なお、ＳＥ33井戸跡の井戸側の上の方から出土した、井戸側を構成する縦板の一部と考えられる木片（PLD-19700）は、2σ暦年代範囲（確率95.4%）で1220-1272 cal AD（95.4%）という年代測定結果が得られている。ただし、この木片は井戸側の上の方から出土した破片であり、井戸側の縦板ではなく13世紀以降に混入した木片である可能性も考えられていた。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

第 18 表　測定試料及び処理（２）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-20844	遺構：SE33井戸跡 グリッド：LM48 層位：3層 試料No.1	試料の種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 採取位置：最終形成年輪－7年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N）

３　結果

第19表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、第41図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±

40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第19表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果（２）

測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±1σ）	^{14}C 年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-20844 試料No.1	−24.62±0.30	608±21	610±20	1304AD（28.3%）1328AD 1342AD（27.9%）1365AD 1384AD（12.0%）1395AD	1298AD（75.5%）1370AD 1379AD（19.9%）1402AD

４　考察

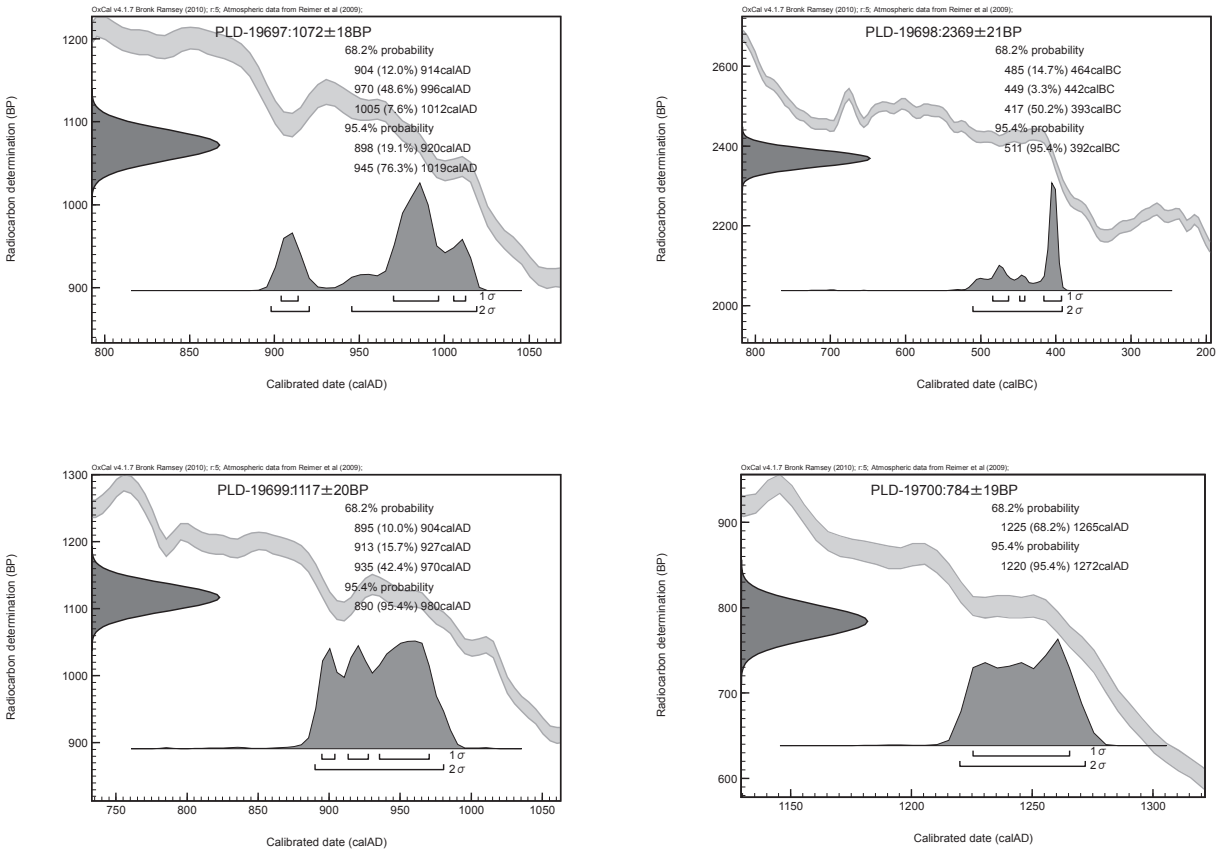
得られた暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目すると、ＳＥ33井戸跡の井戸側を構成する縦板は、1298-1370 cal AD（75.5%）および1379-1402 cal AD（19.9%）の暦年代範囲を示した。これは13世紀末から15世紀初頭で、鎌倉時代から室町時代に相当する。したがって、ＳＥ33井戸跡は13世紀末から15世紀初頭に構築された可能性が高く、９世紀中頃の須恵器甕片は混入した遺物と考えられる。

参考文献

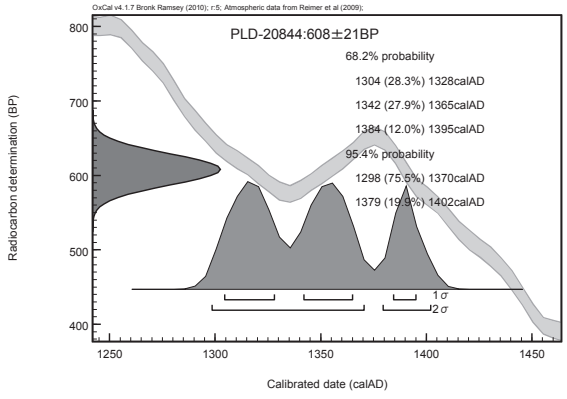
Bronk Ram S Ey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」:3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ram S　Ey, C., Buck, C.E., Burr, G. S Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kai S Er, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第 40 図　暦年較正結果（１）



第 41 図　暦年較正結果（２）

第５章　総括

はじめに

阿部舘遺跡の発掘調査では、平安時代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。詳細な時期が明確ではない遺構も多いが、現時点では遺跡の主な変遷は次のように想定される。

遺跡の初現は９世紀半ば過ぎを下限とする大溝（ＳＤ17）の開削と考えられる。大溝よりも西側には遺構はほとんど分布せず、大溝よりも南東側に分布する井戸跡（ＳＥ18・35）、柵跡（ＳＡ24 ～ 26）、土坑（ＳＫ30・31）及び柱穴群などが大溝と併存し、この溝により区画されていた可能性が想定される。この大溝は９世紀半ば過ぎには埋没する。その後、土坑墓群が集中して造営され、墓域を形成する。当該土坑墓群は、９世紀後半から10世紀前後に属する可能性が強いものと想定される。本遺跡出土遺物には、10世紀より後出のものはほとんど認められず、遺跡は一旦断絶するものと推定される。13世紀から14世紀前後になると、井戸（ＳＥ33）が構築される。調査では確実な根拠を得られなかったが、当該井戸には掘立柱建物（ＳＢ19）などが伴い、新たに集落が成立した可能性も想定できよう。(註１)

以下では平安時代の大溝跡及び土坑墓群について簡単にまとめ、総括に代えたい。

大溝跡

本遺跡の初現時期に属すると考えられる大溝跡ＳＤ17は、最大幅５ｍ以上、最大深さ1.6ｍ以上、総延長78ｍ以上の大規模なものである。溝は大きくは南西に突出する弧状に調査区中央部の平坦面を巡る。詳細に見ると、溝の中央部およそ26ｍ前後は北北西方向にほぼ直線的に延び、その北側は北北東方向に、南側は南東方向にそれぞれ屈曲し、全体は南西方向の中軸にほぼ線対称となる「〔」（亀甲括弧）状を呈する。溝中央部が幅、深さとも最大で、両端側が狭小で浅くなる。特に北東端側は幅１ｍ未満、深さ0.5ｍほどとなって消失する。当該部分は、ゴルフ練習場施設造成などによって上位が削平された可能性も想定される。大溝底面の標高は北東端部から中央部で32.1ｍ前後、南東端部で31.8ｍ前後で、大きな傾斜はない。また、大溝内の覆土は水成堆積ではなく、大溝は、本来、空堀状の施設であったと考えられる。大溝は、出土土器から最終的に９世紀半ば過ぎに人為的に完全に埋め戻されたものと判断される。この埋め戻し層からは当該期の完形もしくは大型破片状態の土師器坏及び須恵器坏、あるいは須恵器大甕破片などが比較的まとまって出土する。大溝廃絶に際しての意図的な廃棄行為であった可能性もあろう。なお、本溝跡出土土師器坏には、９世紀前半に属する秋田城跡出土坏（赤褐色土器坏Ｂ）に酷似する製品もある（第24図31）。(註２)大溝開削の契機、さらには阿部舘遺跡出現の経緯を検討する上で、注意すべきであろう。

この大溝跡が空堀状の区画施設であったと認めると、これによって区画された可能性がある遺構は、上述のように溝の南東側に分布する井戸跡（ＳＥ18・35）、柵跡（ＳＡ24 ～ 26）、土坑（ＳＫ30・31）及び柱穴群などが想定される。(註３)現状の遺構分布からは、大溝による区画の中央部から北側が遺構の空白域となる。阿部舘遺跡の初現期には、大溝区画の南東側に諸施設がまとまり、区画中央から北側は広く空閑地となる景観を呈していたものと考えられる。従来確認されている区画施設を伴う集落あるいは官衙関連施設などとは異なった特徴と捉えることも可能かもしれない。今後の検討課題としたい。(註４)

土坑墓群

土坑の形態と覆土の特徴及び副葬品の可能性ある遺物の出土などから古代の土坑墓と認定したものは全体で15基（ＳＫ01・02・03・04・05・08・09・10・11・12・13・14・15・16・34）である。これらのほとんどは調査区中央部（ＬＴ50区～ＭＣ53区周辺）のおよそ16m四方ほどの範囲にまとまって分布し、墓域を形成すると認めることができる。この他１基（ＳＫ34）のみが土坑墓の集中範囲から東へおよそ15m前後離れて位置している（第６図参照）。土坑墓には明確に副葬品と判断できる土器が伴わないため、詳細な時期は特定できない。しかし、既述のようにＳＤ17大溝跡を掘り込む例があること、また、ＳＫ02土坑墓出土炭化物の放射性炭素年代測定による暦年較正年代が概ね10世紀代に収まること、土坑墓覆土出土遺物には10世紀よりも後出のものが認められないことなどを勘案し、これらの土坑墓群の時期は、ＳＤ17大溝跡埋め立て以降、大勢として９世紀後半～ 10世紀頃と想定する。

土坑墓平面規模は全体では長軸1.2m～ 3.0m前後、短軸0.8 ～ 1.7m前後である。平面形は隅丸長方形、やや寸詰まりの隅丸方形、楕円形に大きくは分かれ、隅丸長方形のものはいずれも長軸２ｍを越えるのに対し、楕円形のものは長軸1.5m未満と小形であり、平面形により規模が異なる傾向が認められる。土坑墓には底面に柱穴状の小穴を伴うもの、鉄器などの副葬品を伴うものなどもある。また、土坑墓群は長軸方位が南南東方向のものとこれに直交する西南西方向のものとに大きくは二分される特徴的な配置を示す。このような特徴は造墓集団内の何らかの分節構造を反映しているものと想定される。土坑墓の規模や形態、副葬品の有無との相関は認め難いことから、集団内の優劣、序列などではなく、被葬者の出自、親族関係などと関連する可能性も検討すべきであろう。(註５)

おわりに

今回の阿部舘遺跡の発掘調査においては、９世紀代の空堀状の区画施設である大溝跡と大溝跡廃絶後に造営された墓域など注目すべき遺構群を検出した。大溝という大規模な区画施設が伴う遺跡の性格、大溝廃絶と墓域成立の経緯、墓域被葬者集団の性格など不明な問題は極めて多い。今後、家ノ浦遺跡を始めとした周辺遺跡や関連資料との比較検討を進めて解明していく必要があろう。

註１　ＳＢ19掘立柱建物跡は、本遺跡の北西隣に広がる家ノ浦遺跡において中世集落を構成する２間×２間総柱の掘立柱建物群と共通した構造であった可能性が強い。ＳＢ19掘立柱建物跡とＳＥ33井戸跡は、家ノ浦遺跡から阿部舘遺跡にかけて形成された中世集落の一部を共に構成していたと考えることもできよう。なお、ＳＢ19東側のＬＴ48区からは13 ～ 14世紀前後の須恵器系陶器擂鉢破片（第30図90）が出土している。

秋田県教育委員会『家ノ浦遺跡――一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―』秋田県文化財調査報告書第473集　2012（平成24）年

註２　小松正夫氏の御教示による。なお、本例は底部切り離しが、回転糸切りではなく、回転ヘラ切りである。

註３　柱穴群は調査では確認できなかったが、本来、掘立柱建物跡を構成した可能性があろう。なお、ＳＡ24･25･26柵跡の方向は、大溝跡中央部分の走向とほぼ平行する。これを同時併存に起因する有意な現象と認めるならば、ＳＢ36掘立柱建物跡桁行方向及びＳＡ37・38柱穴列方向もこれらと平行もしくは直交することから、これらの建物なども大溝と併存したとする想定もあり得よう。

註４　大溝区画内に広い空閑地が存在する景観からは、農地、放牧地なども想起されるが、現状では具体的根拠を欠く。

註５　家ノ浦遺跡でも古代の土坑墓の可能性ある遺構群（ＳＫ16・21・41など）が認められる。

註１文献。

1　ＳＤ17 大溝跡現況（南東→）

2　ＳＤ17 大溝跡断面（南→）

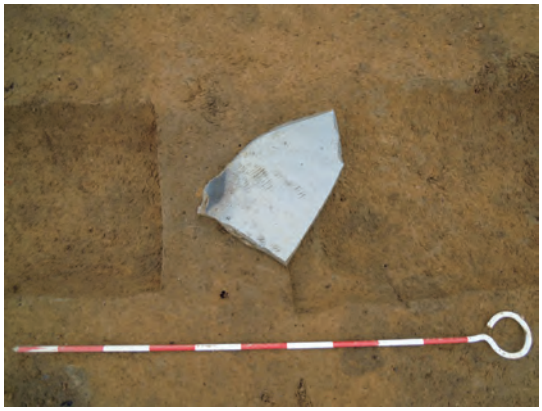
3　ＳＤ17 大溝跡断面（南→）

4　ＳＤ17 大溝跡遺物出土状況（南西→）

5　ＳＤ17 大溝跡出土土師器坏（南西→）

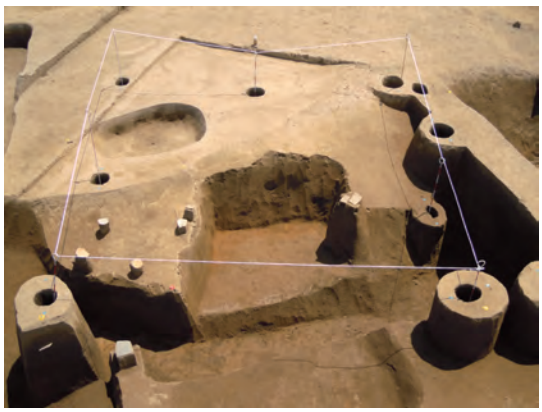
6　ＳＤ17 大溝跡出土土師器高台付坏（北西→）

7　ＳＡ24・25・26 柵跡完掘（南東→）



8　ＳＡ25 柵跡出土須恵器甕 (西→）

図版2



1　ＳＢ19 掘立柱建物跡完掘（西→）

2　ＳＢ36 掘立柱建物跡完掘（南東→）

3　ＳＥ33 井戸跡井戸側（西→）

4　ＳＥ33 井戸跡井戸側内面（南西→）

5　ＳＥ33 井戸跡曲物周囲の川原石（西→）

6　ＳＥ33 井戸跡下部の曲物・礫（西→）

7　ＳＥ18 井戸跡完掘（東→）

8　ＳＥ35 井戸跡完掘（南東→）

1　ＳＫ01 土坑完掘（南東→）

2　ＳＫ01 土坑出土鉄鏃（南→）

3　ＳＫ02 土坑完掘（南西→）

4　ＳＫ03 土坑断面（南東→）

5　ＳＫ04 土坑完掘（南東→）

6　ＳＫ05 土坑完掘（南西→）

7　ＳＫ08 土坑断面（西→）

8　ＳＫ09・10・11・12 土坑完掘（南東→）

図版4

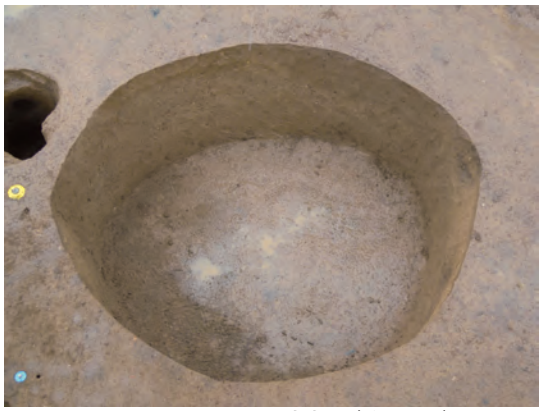
1　ＳＫ01・13・04 土坑完掘（南東→）

2　ＳＫ14・15 土坑完掘（南東→）

3　ＳＫ16 土坑断面（南西→）

4　ＳＫ20 土坑断面（南西→）

5　ＳＫ22 土坑断面（北→）



6　ＳＫ29 土坑完掘（南西→）

7　ＳＫ31 土坑完掘（南→）

8　ＳＫＰ28 柱穴出土土師器甕（南東→）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

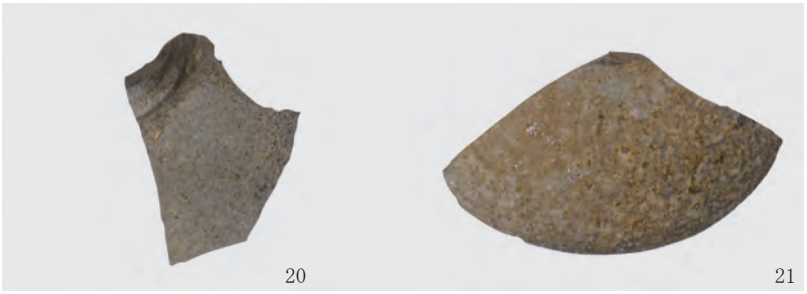
14

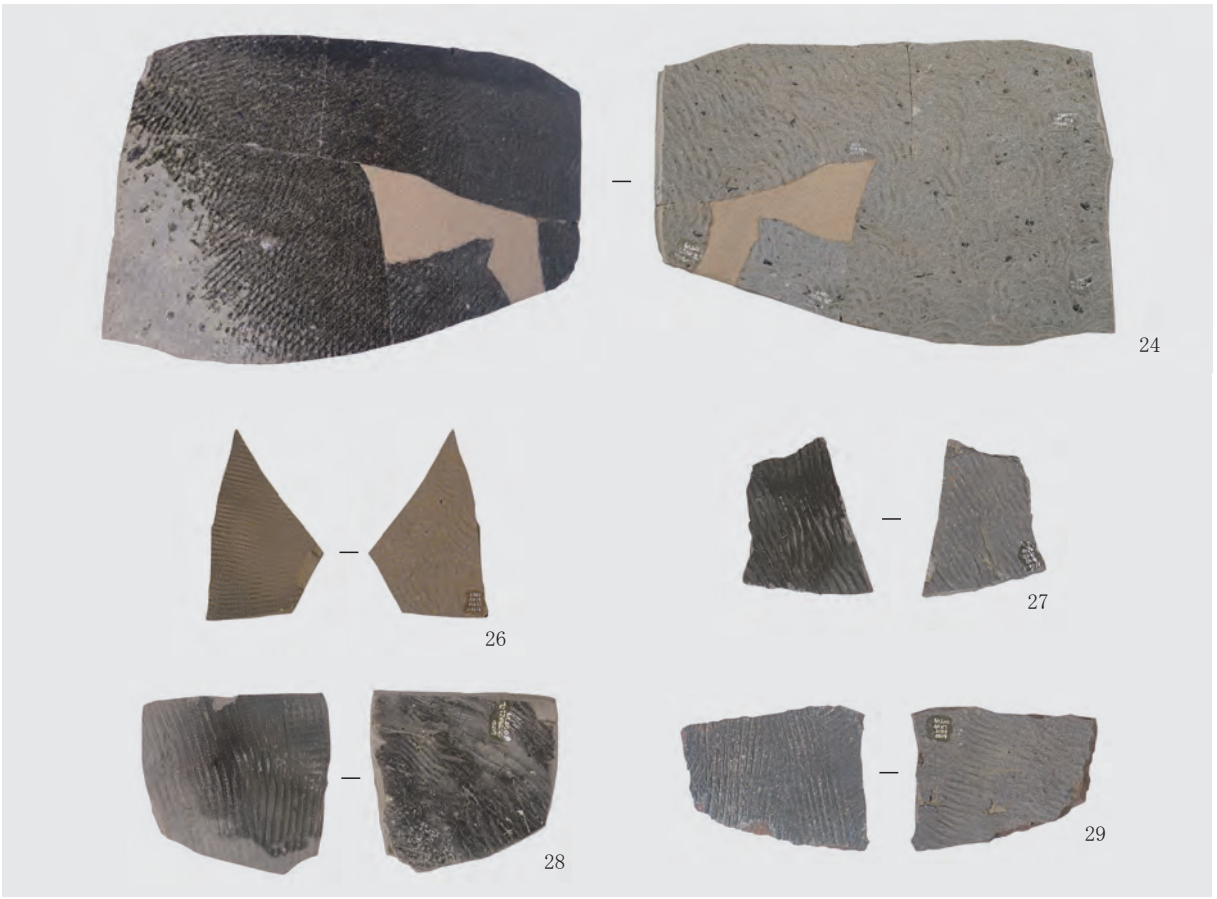
19

15

18

出土土器（1）





出土土器（2）

30

31

32

33

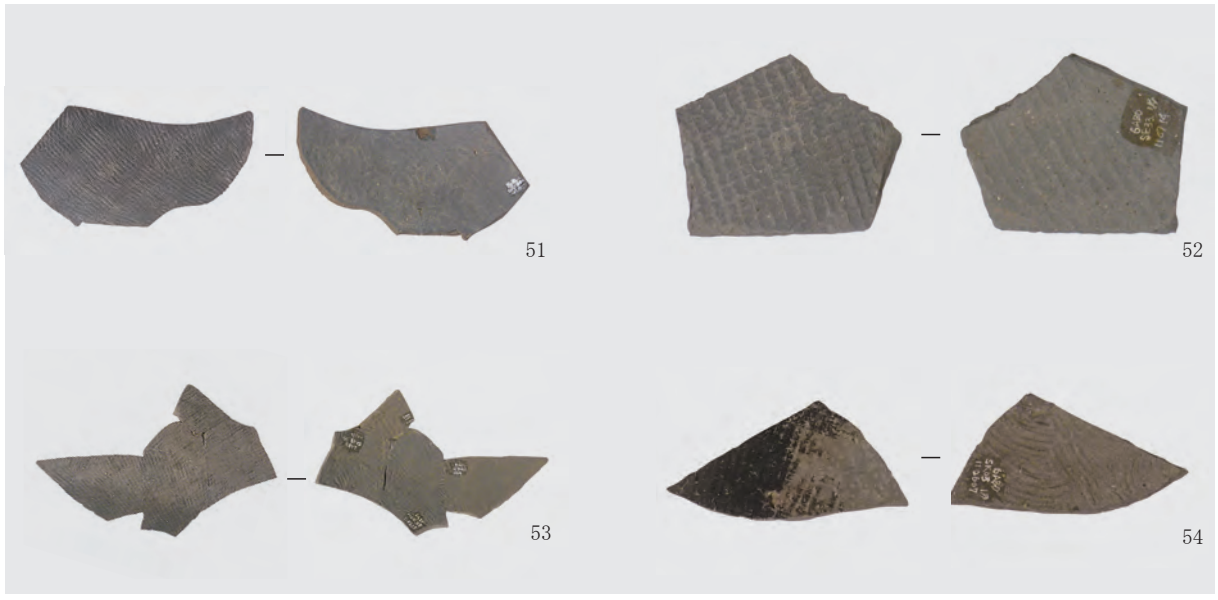
34

35

36

37

40


51 52 53 54

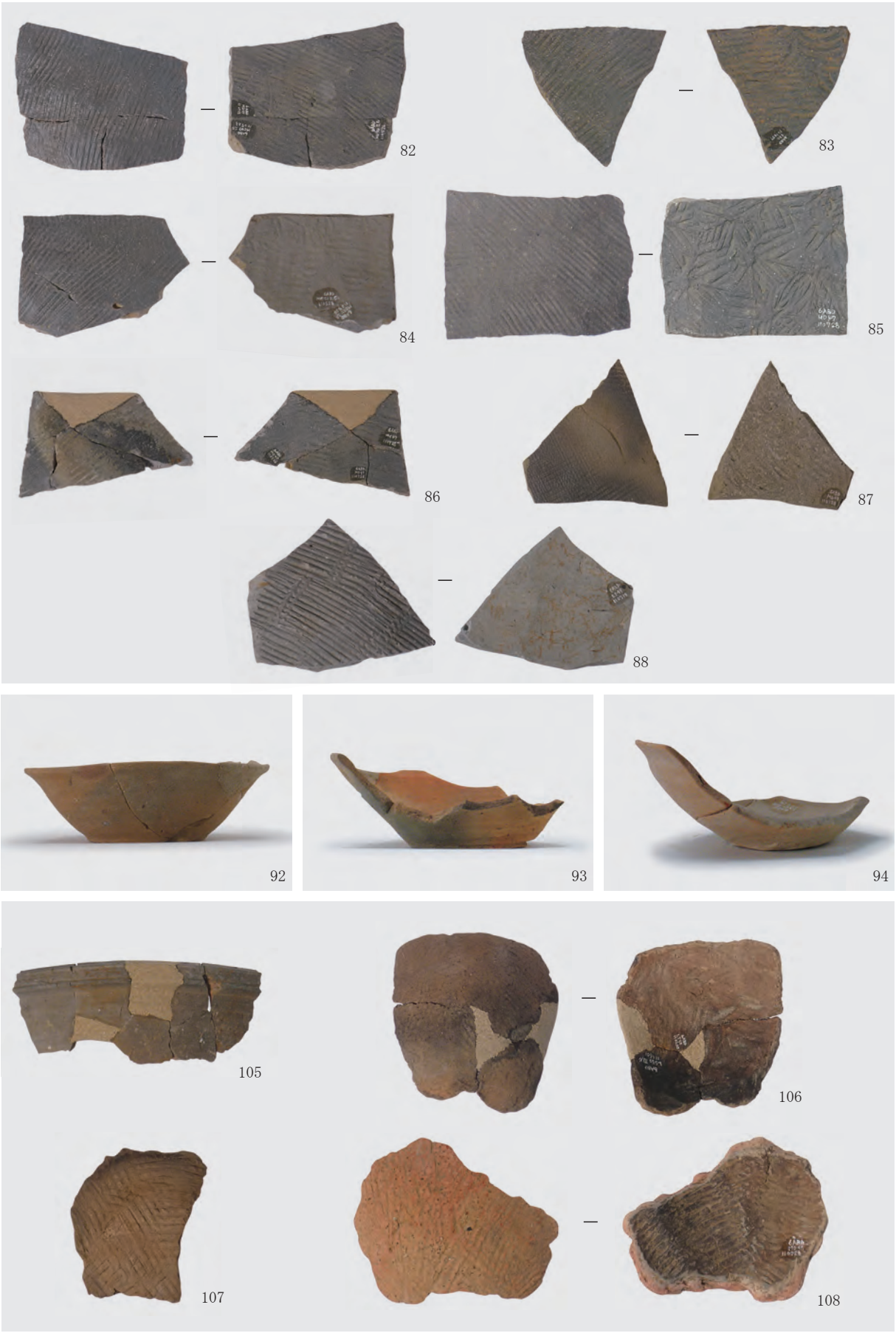
55

56

57

出土土器（3）

出土土器（4）



出土土器（5）

図版10

土製品・鉄製品・鉄関連遺物・天然アスファルト

130

131

134

135

S E 33 井戸跡隅柱

132

133

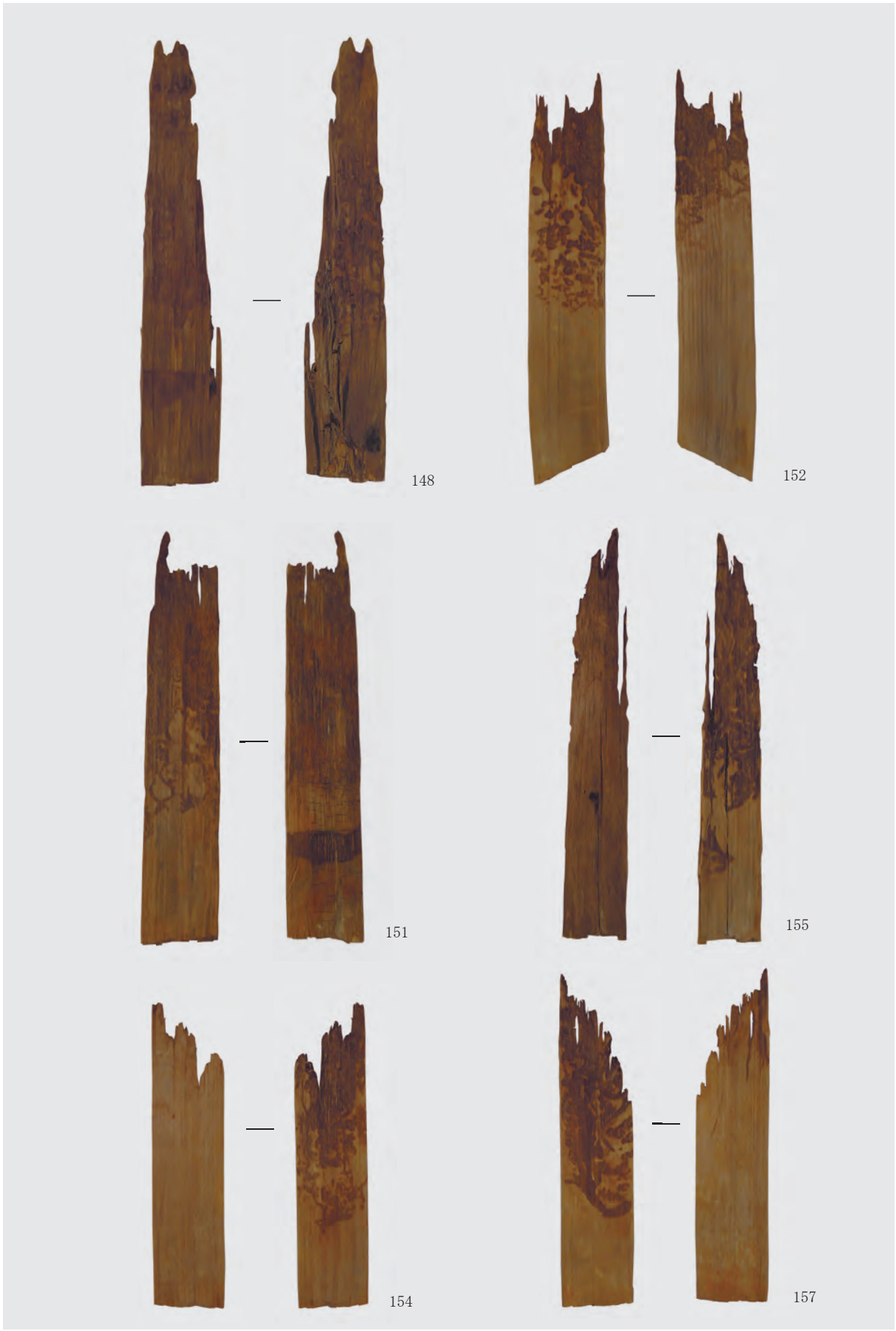
136

137

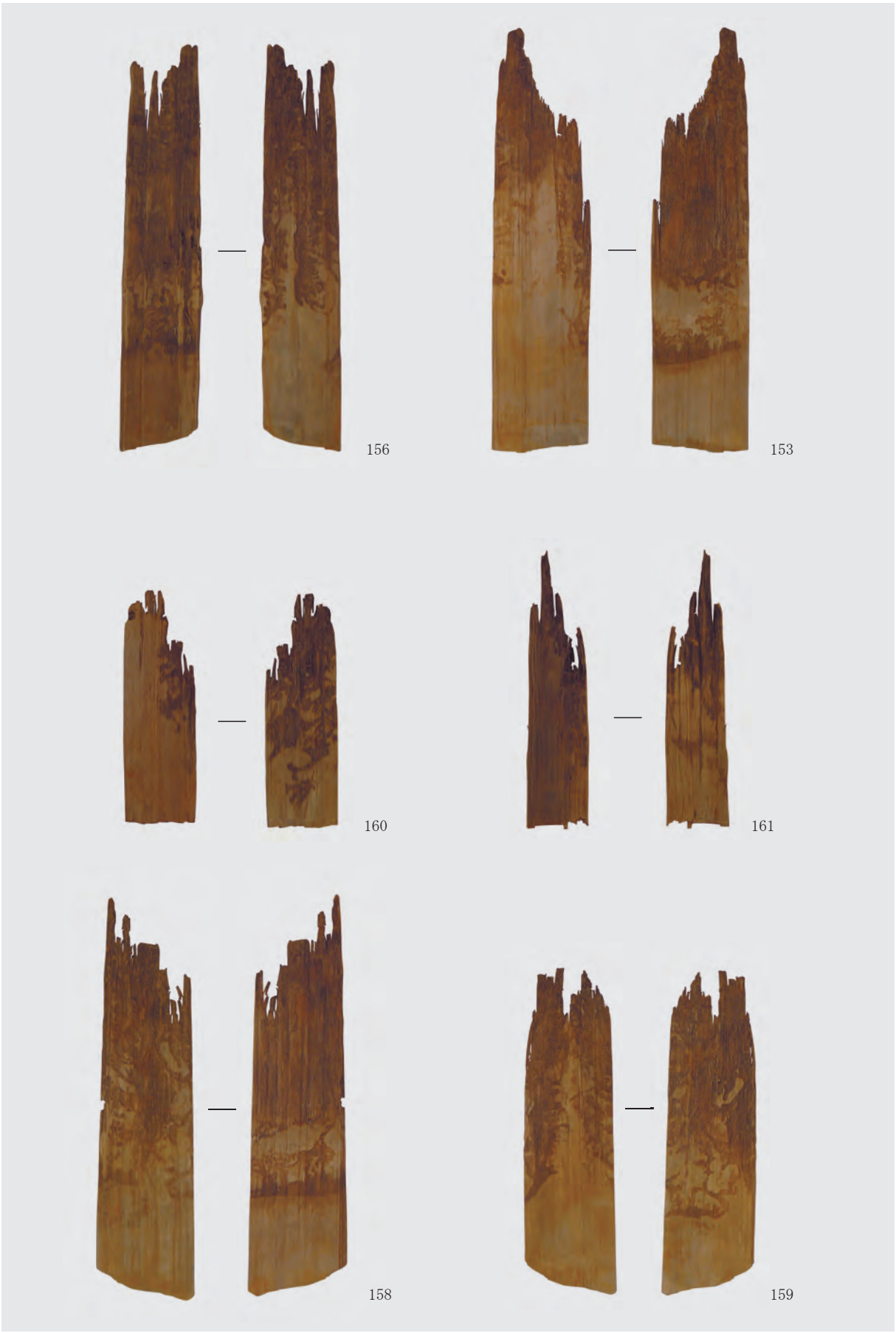
ＳＥ 33 井戸跡横桟

ＳＥ 33 井戸跡縦板（１）

図版14

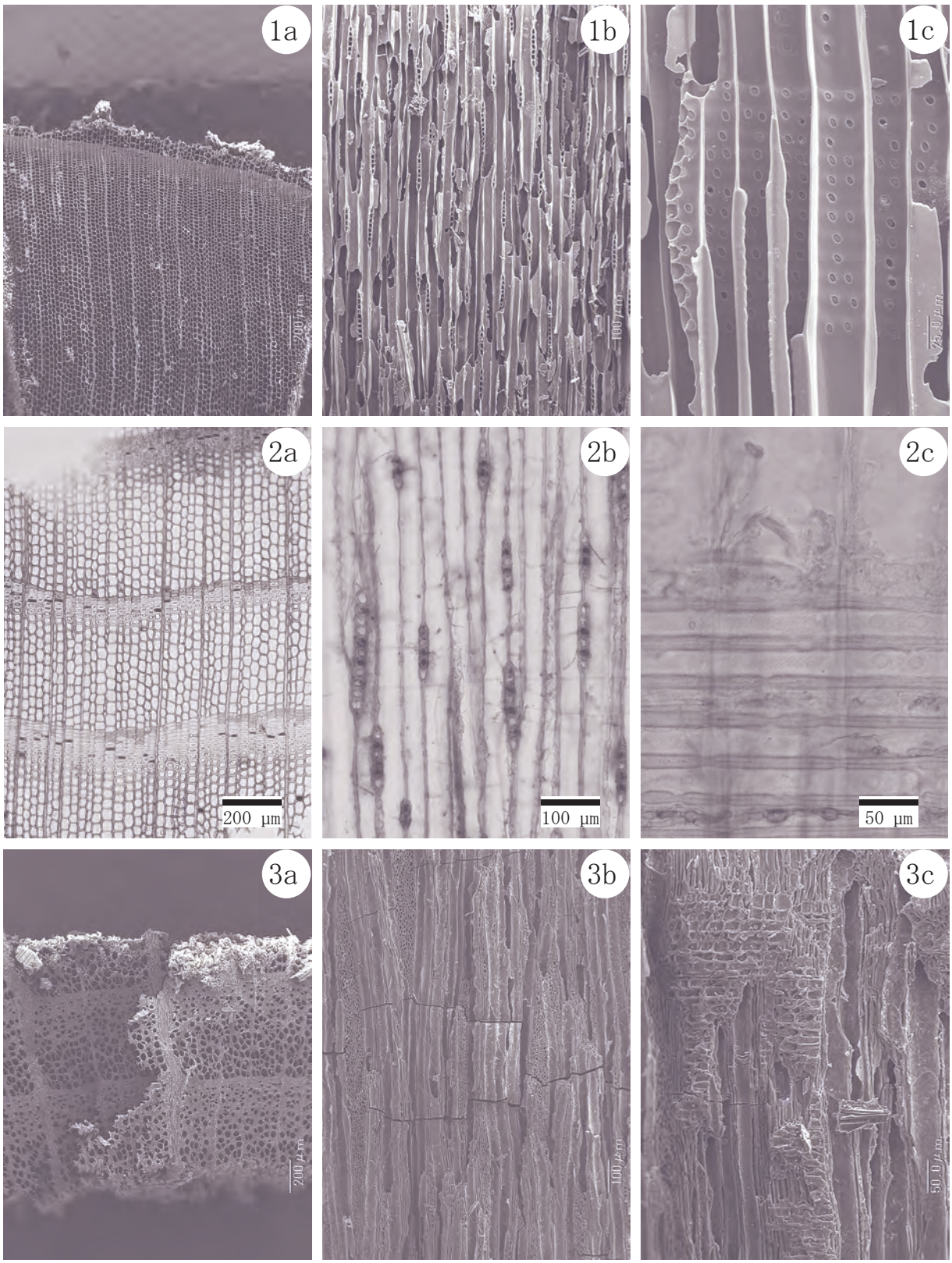


SE 33 井戸跡縦板（2）



ＳＥ 33 井戸跡縦板（３）

図版16



1a-1c. スギ(No. 1)、2a-2c. スギ(No. 4)、3a-3c. ブナ属(No. 3)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

阿部舘遺跡出土木材の光学顕微鏡・走査型電子顕微鏡写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	あべだていせき
書名	阿部舘遺跡
副書名	一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅵ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第481集
編著者名	山田徳道
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014−0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　TEL0187−69−3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010−8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号　TEL018−860−5193
発行年月日	西暦2012年７月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
阿部舘遺跡 (あべだていせき)	秋田県(あきたけん) にかほ市 両前寺(りょうぜんじ) 字阿部舘(あざあべだて) 28－1外	05214	214-35-68	39° 17′ 41″	139° 58′ 38″	20110519 ～ 20110729	4,300㎡	一般国道７号 仁賀保本荘 道路建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阿部舘遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡　２棟 井戸跡　２基 土坑　22基 鍛冶関連遺構　１基 大溝跡　１条 柵跡　３条 柱穴列　２条	須恵器 土師器	平安時代の大溝跡と井戸跡、土坑墓群などを検出した。大溝跡と井戸跡から同一個体の須恵器大甕破片が出土した。土坑墓は長軸方位が南南東方向のものとこれに直交する西南西方向のものとに大きくは二分される。
		中世	井戸跡　１基	須恵器系陶器 曲物	

要約

平安時代を中心とする遺構や遺物を検出した。遺跡の初現時期に属すると考えられる遺構は、９世紀半ば過ぎを下限とする最大幅約５m、最大深さ約1.6m、総延長78m以上の大溝跡である。大溝跡は遺跡平坦面の中央部を弧状に巡り、その内側を区画した空堀状の施設と推定される。大溝に区画されていた可能性がある遺構には井戸跡、柵跡、柱穴群などがある。これらの遺構群は大溝区画の南東側にまとまり、当該期には区画の中央から北側は広く空閑地となる景観を呈していたと考えられる。大溝埋没後に、土坑墓群が集中的に分布する墓域が形成される。土坑墓群の時期は９世紀後半から10世紀頃と推定される。その後、遺跡は断絶し、13世紀から14世紀前後に新たに中世の集落が成立したものと推測される。

秋田県文化財調査報告書第481集
阿　部　舘　遺　跡
―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―

印刷･発行　平成24年７月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69－3331　FAX(0187)69－3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話(018)860－5193
印　　刷　秋田活版印刷株式会社